日本ルワンダ学生会議
第 4 回本会議 活動報告書

2010 年 8 月 21 日～9 月 2 日

はじめに

『日本ルワンダ学生会議　第４回本会議報告書』を手に取ってくださり、ありがとうございます。

この報告書を通じて、日本ルワンダ学生会議のルワンダでの活動について皆様にご報告させていただけることを非常にうれしく思います。また同時に、この企画の実現にご協力いただきました皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

前身のルワンダ・プロジェクト時代から数えて７度目になった今回の渡航はルワンダでの大統領選挙の時期と重なり、またキガリ市内での手榴弾事件発生の知らせを受け、渡航自体の可否を問う声が各方面から上がりました。それでもメンバーの「ルワンダに行きたい」という強い意志のもと、慎重な情報収集と安全管理の意識をもって渡航を決断いたしました。

しかし実際のルワンダの治安は私たちの考えていたものとは異なり、安全・衛生面でのトラブルは一切なく活動を終えることができました。改めて、遠く離れた場所で得られる情報と現地で受ける印象は必ずしも同じではない、と感じた次第であります。

また、今回からはルワンダ国内での見学活動にもルワンダ側メンバーが同行することとなり、彼らとより長い時間を共にすることができました。例年に比べ短い滞在にはなりましたが、メンバーにとって替え難い経験となりました。

「相互理解」という活動理念の下、更なる発展を続けるであろう日本ルワンダ学生会議の今後に、どうぞご期待ください。

それでは、ぜひ最後までこの報告書をお楽しみください。

2010年10月1日

日本ルワンダ学生会議　メンバー一同

日本ルワンダ学生会議　第４回本会議報告書

＜目次＞

【序章】

団体紹介 ……10
ルワンダ共和国基礎情報 ……12

【第１章】第４回本会議　事業概要

活動概要 ……18
活動日程 ……19

【第２章】学生会議　活動報告

概要・議題 ……24
日本側からのプレゼンテーション
1. Japanese History……25
2. Japan's Education and WWII ……27
3. Japanese Industry ……33
4. Religious Views of Japanese People ……36
5. Japanese social problem "Suicide" ……41
ルワンダ側からのプレゼンテーション
1. Tourism in Rwanda ……46
2. How Rwandans can elaborate simple project ……49
3. ITORERO ……54
4. Green Revolution for Rwanda ……57
ジェネラルディスカッション
1. Love and Jealousy ……61
2. Peace ……65
3. Hero ……66
4. Art ……69
ピースコンサート
……73
ホームステイ
……83

【第３章】ルワンダ現地活動　活動報告

1. 在ルワンダ日本大使館 ……94
2. ジェノサイドメモリアル（キガリ/ムランビ） ……102
3. カバロンドセクター・イントワーリ小学校 ……108
4. キヨンベセクター ……112
5. トゥワ村(NONKO SITE) ……119
6. Radio Salus ……130
7. Enas Coffee factory ……134
8. REACH ……138

【第４章】学生意識アンケート　結果

……152

【第５章】参加メンバー　感想

……159

【付録】

コラム

1. 乗り継ぎの楽しみ方～ドーハ編 / ナイロビ編～ ……20
2. 一人で食べてたのにこれなんていじめ？ ……32
3. ルワンダ語とルワンダの物価 ……44
4. 停電の夜に ……53
5. トイレを探して ……60
6. 友達なら手をつなぎなさい ……64
7. コンサートのプログラムはいつわかるんですか ……75
8. 涙のソーラン節練習 ……82
9. キガリの街、人。と、エフレムの本音 ……92
10. 博物館 ……101
11. どきどきバス移動 ……117
12. アフリカンタイムの伝染 ……118
13. あれっ道が明るくなってる ……129
14. EXPO ……133
15. ルワンダの社内事情～Rwandatel の事例より～ ……151
16. 乗り継ぎの楽しみ方～アディスアベバ編～ ……158

会計報告……178
メディア掲載 ……181
写真館 ……184
おわりに ……186

【序章】

団体紹介 ……10

ルワンダ共和国基礎情報 ……12

日本ルワンダ学生会議　団体紹介

《略歴》

2005年	10月	早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターが主催するスタディーツアーの形でルワンダ・プロジェクトがスタート
2008年	9月	ルワンダにて第１回本会議を開催
2009年	3月	団体名をルワンダ・プロジェクトから日本ルワンダ学生会議に改称
	9月	ルワンダにて第２回本会議を開催
	12月	日本にて第３回本会議を開催
2010年	1月	日本ルワンダ学生会議関西支部が発足
	8月	ルワンダにて第４回本会議を開催

《構成人数》＊2010年10月現在

日本側メンバー 24名（関東16名 関西8名）

ルワンダ側メンバー 30名（ルワンダ国立大学）

《主な活動内容》

- 週1回の定期ミーティング
- 勉強会
- 各種イベントの開催
- ルワンダへの渡航
- 日本への招致

《連絡先》

メールアドレス　japan.rwanda@gmail.com

ホームページ　http://jp-rw.jimdo.com/

《活動理念》

虐殺が行われた教会の壁にかけられている一枚の布には次のような言葉が書かれています。

「あなたが私を知っていたら、あなたがあなた自身を知っていたら、こんなことは起きなかっただろう」

ルワンダにおいて、情報の主体的入手と、偏見を捨てた相互理解は非常に大きな意味を持ちます。我々にとって、それは人類の悲劇から目をそむけたという自責の念に対し、相手を理解し自分を伝えるという地道な活動からアプローチしようとするものです。そしてそれは紛争・貧困などの社会問題にのみ目を向けていくことを意味するものではないでし

ょう。国際協力において、問題ありきで先進国として支援することばかりを考えていては、依存関係をつくり、かえって発展を阻害してしまうことすらあり得ます。途上国が真に自律し主体的に自らの豊かさを築いていくには、ともに社会問題を考え取り組む「仲間」が必要なのです。我々は実際に生活している人々と交流し、彼らの現状・価値観・人生を知り、相互理解・尊重に基づき信頼関係を築く中で、ルワンダの“Never again”に対し当事者意識を養うばかりでなく、「自由・平等・尊厳・持続可能性・寛容」の視座から真に豊かで平和な社会を考察し行動していく主体となるはずです。

近年世界で頻発する紛争における共通課題として宗教・民族対立があります。ルワンダにおいても植民地分離政策と虐殺におけるプロパガンダは人々の間に「憎しみ」と「偏見」を作ってしまいました。ルワンダの惨劇に対峙しようとする私たちは、「『偏見』を取り除き寛容な『人間同士』の関係づくりがひいては平和な社会を構築する」という信念から、学生会議という形で「相互理解」を理念に交流しています。会議では日本・ルワンダ両国の歴史や社会問題を広く議論し双方をより深く理解することで、両国のみならず人類の共通課題に向き合っていきます。

《公認》

・駐日本ルワンダ共和国大使館

・アフリカ平和再建委員会（ARC）事務局長 小峯茂嗣

・早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)

《団体理念の継承》

当団体は以下のような方法で学生会議としての継続性、発展を確保するものである。ユネスコ憲章には以下の文言がある。

「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。

ここに終りを告げた恐るべき大戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し、これらの原理の代わりに、無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義をひろめることによって可能にされた戦争であった。

文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育とは、人間の尊厳に欠くことのできないものであり、且つすべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神をもって果さなければならない神聖な義務である。」

ルワンダにおいては、民族対立による偏見や不寛容の心が虐殺という悲惨な結果に表出した。我々の活動は「日本」や「ルワンダ」に対する偏見を取り除き、寛容な人間関係を築くことが恒久的な平和を築く、という視点から学生会議という形で相互理解を理念に交流している。 実際にルワンダや日本で両国の学生が互いの文化や生活を知り、両国や世界各地で起こる諸問題に対する認識を共有することで遠く離れた国の人々との信頼関係を築くことができると考えている。この理念は常に継承されるものであり、新たにメンバーを加える際にはこれに同意していただくものとする。

ルワンダ共和国基礎情報

（外務省ホームページより引用）

正式名称：ルワンダ共和国（Republic of Rwanda）

一般事情

＜「千の丘の国」と呼ばれる自然豊かな内陸国 ＞

1. 面積

2.63 万平方キロメートル

2. 人口

1,000 万人（2009 年、UNFPA）

3. 首都

キガリ

4. 言語

ルワンダ語、英語、仏語

5. 宗教

カトリック 57%、プロテスタント 26%、アドヴェンティスト 11%、イスラム教 4.6%等

6. 略史

年月	略史
17 世紀	ルワンダ王国建国
1889 年	ドイツ保護領 （第一次大戦後はベルギーの信託統治領）
1961 年	王政に関する国民投票(共和国樹立を承認) 議会がカイバンダを大統領に選出
1962 年	ベルギーより独立
1973 年	クーデター（ハビャリマナ少佐が大統領就任）
1990 年 10 月	ルワンダ愛国戦線(RPF)による北部侵攻
1993 年 8 月	アルーシャ和平合意
1994 年 4 月	ハビャリマナ大統領暗殺事件発生をきっかけに 「ルワンダ大虐殺発生」（～1994 年 6 月）
1994 年 7 月	ルワンダ愛国戦線(RPF)が全土を完全制圧、新政権樹立 （ビジムング大統領、カガメ副大統領就任）
2000 年 3 月	ビジムング大統領辞任
2000 年 4 月	カガメ副大統領が大統領に就任

2003 年 8 月	複数候補者による初の大統領選挙でカガメ大統領当選
2003 年 9-10 月	上院・下院議員選挙（与党 RPF の勝利）
2008 年 9 月	下院議員選挙（与党 RPF の勝利）

政治体制・内政

1. 政体

共和制

2. 元首

ポール・カガメ大統領

3. 議会

上院（26 議席）、下院（80 議席）

4. 政府

（1）首相　ベルナール・マクザ

（2）外相　ルイーズ・ムシキワボ

5. 内政

1962 年の独立以前より、フツ族（全人口の 85%）とツチ族（同 14%）の抗争が繰り返されていたが、独立後多数派のフツ族が政権を掌握し、少数派のツチ族を迫害する事件が度々発生していた。1990 年に独立前後からウガンダに避難していたツチ族が主体のルワンダ愛国戦線がルワンダに武力侵攻し、フツ族政権との間で内戦が勃発した。1993 年 8 月にアルーシャ和平合意が成立し、右合意を受け、国連は停戦監視を任務とする「国連ルワンダ支援団（UNAMIR）」を派遣したが、1994 年 4 月のハビヤリマナ大統領暗殺を契機に、フツ族過激派によるツチ族及びフツ族穏健派の大虐殺が始まり、同年 6 月までの 3 ヶ月間に犠牲者は 80～100 万人に達した。

1994 年 7 月、ルワンダ愛国戦線がフツ族過激派を武力で打倒すると、ビジムング大統領（フツ族）、カガメ副大統領による新政権が成立。同政権は大虐殺の爪痕を乗り越えようと、出身部族を示す身分証明書の廃止（1994 年）、遺産相続制度改革（女性の遺産相続を許可）（1999 年）、国民和解委員会及び国民事件委員会の設置（1999 年）等、国民融和・和解のための努力を行っている。

1999 年 3 月には、1994 年の虐殺以降初めての選挙となる地区レベル選挙（市町村レベルより下位）を実施、2001 年 3 月には市町村レベル選挙を実施、2003 年 8 月には大統領選挙が実施されカガメ大統領が当選。政治の民主化が進展している。同年 9、10 月の上院・下院議員選挙及び 2008 年 9 月の下院議員選挙では与党 RPF が勝利した。

カガメ大統領は汚職対策に力を入れており、他のアフリカ諸国に比して、汚職の少なさ、治安の良さは特筆される。

外交・国防

1. 外交基本方針

従来非同盟中立主義が基本路線。冷戦時代は東西両陣営と友好関係を維持、現在は、経済開発のため先進諸国との協力に重点を置く。東アフリカ共同体（EAC）及び東南部アフリカ共同市場（COMESA）メンバー。コモンウェルス加盟（2009 年 11 月）。

2. 軍事力

（1）予算　7,600 万ドル（2009 年）
（2）兵役　志願制
（3）兵力　3 万 3,000 人（2009 年）

経済

1. 主要産業

農業（コーヒー、茶等）

2. GDP

44.6 億ドル（2008 年）

3. 一人当たり GNI

440 ドル（2008 年）

4. 経済成長率

11.2%（2008 年）

5. 物価上昇率

17.4%（2008 年）

6. 総貿易額

（1）輸出　257 百万ドル（2008 年）
（2）輸入　880 百万ドル（2008 年）

7. 主要貿易品目

（1）輸出　コーヒー、茶、錫
（2）輸入　資本材、半加工品、エネルギー財、消費財

8. 主要貿易相手国

（1）輸出　中国、独、米国、タイ
（2）輸入　ケニア、中国、ウガンダ、ベルギー

9. 通貨

ルワンダ・フラン

10. 為替レート

1 ドル＝571 ルワンダ・フラン

11. 経済概況

（1）農林漁業が GDP の 40%以上、労働人口の 90%を占め、多くの農民が小規模農地を所有。主要作物はコーヒー及び茶（輸出収入の 60%）であり、高品質化により国際競争力を強化する政策をとっている。一方で、内陸国のために輸送費が高いという問題も抱える。

（2）1980 年代は、構造調整計画を実施し経済の再建に努めたが、内戦勃発以降はマイナス成長、特に 1994 年の大虐殺で更に壊滅的打撃を受けた。その後、農業生産の堅実な回復（1998 年には内戦前の水準を回復）、ドナー国からの援助、健全な経済政策により 1999 年までに GDP は内戦前の水準に回復した。

（3）ルワンダ政府は、1996 年に「公共投資計画」を、2000 年に 20 年後の経済達成目標を定める「VISION2020」を、2002 年には「貧困削減戦略文書完全版（F-PRSP）」を、また、2007 年には、第 2 次世代 PRSP となる経済開発貧困削減戦略（EDPRS）を策定し、これら戦略等を基軸とした経済政策を実施している。2000 年 12 月には、拡大 HIPC イニシアティブの決定時点に達し、2005 年 4 月に完了時点に到達している。

（4）カガメ大統領は、汚職対策にも力を入れており、グッドガバナンスの模範国として世銀等からの評価も高い。

経済協力

1. 日本の援助実績

（1）有償資金協力（2008 年度まで、EN ベース）　46.49 億円
（2）無償資金協力（2008 年度まで、EN ベース）　318.28 億円
（3）技術協力実績（2008 年度まで、JICA ベース）　49.80 億円

2. 主要援助国（2007 年）

（1）英　（2）米　（3）ベルギー　（4）オランダ　（5）独

二国間関係

1. 政治関係

（1）日本は、ルワンダが独立した 1962 年 7 月に国家承認。2009 年末まで在ケニア日本大使館がルワンダを兼轄していたが、2010 年 1 月に在ルワンダ日本大使館開館。ルワンダは 1979 年 5 月に在京大使館を開設。2000 年 9 月に閉鎖したが、2005 年 1 月に再開。

（2）1994 年 4～6 月のルワンダ大虐殺により国外に避難したルワンダ難民を救援するため、日本は、同年 9～12 月の間、国際平和協力法に基づき、ザイール共和国（当時、現コンゴ民主共和国）のゴマ 等に約 400 名の難民救援隊・空輸隊等を派遣した。

2. 経済関係（対日貿易）

（1）貿易額

輸出　4,900 万円（2009 年）
輸入　10 億円（2009 年）

（2）主要品目

輸出　コーヒー、バッグ類
輸入　自動車、二輪、機械

3. 文化関係

国営テレビ局に対し番組ソフトを供与。

4. 在留邦人数

40 人（2009 年 10 月現在）

5. 在日当該国人数

21 人（2009 年）

【第１章】

第４回本会議　事業概要

活動概要 ……18
活動日程 ……19

第４回本会議　概要

【開催時期】
2010 年 8 月 21 日（土）～2010 年 9 月 2 日（木）

【開催場所】
ルワンダ共和国（キガリ、ブタレ、カバロンド、ギコンゴロ、キレヘなど）

【活動目的】
1. 学生が主体となった、市民レベルの友好交流により二国間関係を強化する。
2. 学生会議やフィールドワークを通して、両国学生がお互いの国の歴史や社会的・政治的・経済的現状を知り、市民活動に関して多面的理解を促進させる。
3. 日本とルワンダ、各々の国が抱える国の社会問題に注目し、共に考え、解決策を模索する。
4. 両国学生一人ひとりが未来を担う次世代のリーダーの一員であることを再認識する。
5. 活動を紹介する映像や報告書を作成し、報告会で発表することによって、我々が学んできたことをより多くの人々に伝える。

【協力】
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)
ルワンダ国立大学(National University of Rwanda, NUR)
在ルワンダ日本大使館
駐日本ルワンダ共和国大使館

第４回本会議　活動日程

実施日	実施内容	実施地
8 月 21 日(土)	日本出発	成田空港
8 月 22 日(日)	カタール、ケニアで乗り継ぎ、ルワンダの首都キガリ(Kigali)に到着	キガリ国際空港
8 月 23 日(月)	在ルワンダ日本大使館表敬訪問 キガリ虐殺記念館見学	Kacyiru（キガリ） Gisozi（キガリ）
8 月 24 日(火)	Intwali 小学校訪問 キヨンベ訪問 ホームステイ	Kabarondo（東部） Kiyombe（北部） キガリ市内
8 月 25 日(水)	トゥワ族の村訪問 ブタレ(Butare) へ移動 INDANGAMUCO のリハーサル見学	Kicukiro（キガリ） ブタレ（南西部）
8 月 26 日(木)	学生会議	ルワンダ国立大学
8 月 27 日(金)	学生会議	ルワンダ国立大学
8 月 28 日(土)	リハーサル ピースコンサート開催・出演	ルワンダ国立大学
8 月 29 日(日)	ルワンダ国立博物館見学 学生会議	ブタレ
8 月 30 日(月)	学生会議 Radio Salus 見学 Murambi 虐殺記念館見学	ブタレ Gikongoro（南西部）
8 月 31 日(火)	コーヒー工場見学 第 13 回ルワンダ国際貿易祭(EXPO)見学	キガリ市内
9 月 1 日(水)	REACH 見学	Kirehe（東部）
9 月 2 日(木)	日本へ帰国	キガリ国際空港

コラム　乗り継ぎの楽しみ方

～ドーハ編～

日本からアフリカに行く際、多くの人は中東・UAE のドバイかカタールのドーハを経由することになる。日本ルワンダ学生会議も 2008 年、2010 年とカタール航空を利用し、ドーハを経由した。

ドーハに降り立って飛行機から降りた日本人がまず思うことといえば、「暑い」ということである。とにかく暑い、蒸す。すなわちメガネがくもる。そしてあついよーあついよーと言いながら飛行機を降り、滑走路から空港ターミナル行きのバスに乗る。

しかしバスから降り、ターミナルの自動ドアが開くと、建物からは猛烈な寒気が流れ出してくるのである。どうやらこの国に「エコ」という言葉はまだ存在しないらしく、人の有無を問わず、建物の中はいつでも冷房がガンガン効いている。屋外は灼熱、室内は冷やしすぎ。これがドーハの気候であるといえる。

ドーハ空港のレストラン

さて、ドーハ空港で忘れてはならないのが、無料サービスの存在である。空港内のインフォメーションで搭乗券を見せてスタンプをもらうと、それがチケット代わりになり食事をとることができる。

往路では機内食で満腹だった上にプレゼンの準備に追われていたため食事はとらなかったが、復路ではしっかりごちそうになり、このレストランのテーブルで３時間にわたりトランプを楽しんだ。

その他、空港内には中東の国らしくイスラム教のモスク（礼拝所）があったり、オイルマネーで潤う国らしく免税店で高級車が売られていたりと、なかなか見所は多い。ルワンダ渡航の前にちょっとした中東体験を楽しむのも、一興というものである。

モスク
(男性用)

～ナイロビ編～

中東を経由しても、ルワンダのキガリ国際空港に直行する飛行機はまだないらしい（2010 年 9 月現在。近々就航と聞く）。そこで大抵の人はナイロビ空港に立ち寄ることになる。ナイロビ空港は暑いでも寒いでもなく良い温度だが、あいにく無料で食事をとることはできない。ただ私たちは往路で７時間もの待ち時間を過ごさなければならなかった。プレゼン準備があるとはいえ、さすがに７時間もパソコンに向かい続けるほどワーカホリックではない。そこで、とりあえず空港内のカフェで「できるだけ

長く」時間をつぶすことにした。

カフェの奥の席を６人＋荷物分確保し、軽食を注文。私以外のメンバーにとっては初めてのアフリカンフードとなる「サモサ」やこれからの旅で欠かせなくなるであろうミネラルウォーターなどを購入した。ルワンダの食事はこんな感じなの？とか、今頃日本のみんなは何してるんだろうねー、などという他愛もない会話をしつつだらだらと１時間ほど過ごし、食べ物がなくなると誰からということもなくトランプ大会が始まった。「敗者二人はポッキーゲームを披露する」という白熱の七並べを繰り広げ、派手にテーブルにカードを広げているのを白い目で見る店員の視線を感じつつ、私たちは１時間半ほどの楽しい時間を過ごした。

ナイロビ空港の少年

さてそうはいってもさすがにそろそろ店員の視線が重くなってきた、というところで私たちはカフェを後にし、搭乗ゲート付近のベンチで学生会議に向けた準備を始めることにした。古屋・宮本・池上の持ってきたパソコンを総動員して各々がプレゼンや日本を紹介する映像などの作業に取り掛かる。とそんなとき、たまたま隣のベンチの周りできゃぴきゃぴはしゃいでいたのが写真の少年である。見たところ年齢は３つか４つ。鋭い眼光の奥に母性を感じる美人なお母さんと二人で飛行機を待っているようだった。

この子、何が楽しいのかずっと踊ったり跳ねたり一人でかくれんぼしたりこっちを覗いてきたりで、それはそれは愛くるしい。椅子からジャンプしたり壁を使ってジャンプしたりとあまりに楽しそうなので、こちらも負けじと宮本がダンスを披露すると彼もおそらく初めて見るであろう日本人に興味を示していた。そこからしばらくは二人の激しいダンス合戦が繰り広げられましたとさ。

そしてなんやかんやでキガリ行きの搭乗時間に。旅先で出会う人との別れは常に寂しいもので、それはほんの数時間、ほとんど言葉さえ交わしていない子供が相手でも同じことである。ささやかな記念品として、池上のポラロイドカメラで撮影した宮本＆少年の写真を渡して私たちが後ろ髪を引かれながら席を立つと、この子は満面の笑みで手を振り、私たちを送ってくれた。終始クールだったお母さんもチラリとこちらを見て小さな笑みを見せ、見知らぬ東洋人と我が子の出会いに思うところがあるようであった。

結局この小さな友人は、私たちがゲートを通って姿が見えなくなるまで手を振ってくれていた。もしあの写真を彼が大事にとっておいてくれたなら、あるいは何年か後にお母さんがこの旅の思い出話をしてくれたなら、この日ナイロビ空港で日本人と出会ったことを彼は楽しい思い出として振り返ってくれるのだろうか。そんなことを考えながら私たちはルワンダへ発った。

（古屋）

【第２章】

学生会議　活動報告

概要・議題 ……24
日本側からのプレゼンテーション
1. Japanese History ……25
2. Japan's Education and WWII ……27
3. Japanese Industry ……33
4. Religious Views of Japanese People ……36
5. Japanese social problem "Suicide" ……41
ルワンダ側からのプレゼンテーション
1. Tourism in Rwanda ……46
2. How Rwandans can elaborate simple project ……49
3. ITORERO ……54
4. Green Revolution for Rwanda ……57
ジェネラルディスカッション
1. Love and Jealousy ……61
2. Peace ……65
3. Hero ……66
4. Art ……69
ピースコンサート
……73
ホームステイ
……83

第 4 回本会議　学生会議概要

実施日時

2010 年 8 月 26,27,29,30 日

活動内容

日本・ルワンダ両国の学生がそれぞれの興味のある分野や専攻、社会問題などからトピックを決め、プレゼンテーションを行い、質疑応答、ディスカッションを行う。

活動目的

団体の基本理念である相互理解を念頭に、同じ学生という対等な立場から多岐にわたるテーマについて深く考え、お互いの意見を尊重しつつディスカッションをすることで、互いの国についてより理解を深める。

成果

・お互いの国についてのより深い理解。
・ディスカッションにおける、“日本とルワンダ”ではなく“日本の学生とルワンダの学生”というコミュニケーションの確立。
・過去から現在について振り返り、未来への展望を考えるきっかけづくり。
・異なるバックグラウンドを持っていることで、全く違った価値観・視点からの意見との出会い。

反省

・予定されていた時間通りに行えなかったことが多々あった。
・プレゼンテーションの方法（パワーポイントの使い方や時間配分など）に改善点あり。

学生会議トピック（発表者）

26 日

1. Japanese History (古屋亮輔)
2. Japan's Education and WWII (井上真希)
3. Tourism in Rwanda (Olivier)
4. Love and Jealousy※（海原早紀)

27 日

5. Japanese Industry (海原早紀、池上純平)
6. How Rwandans can elaborate simple project (Pie)
7. Peace※(井上真希,Pie)
8. ITORERO (Alfred)
9. HERO※（Alain)

29 日

10. Religious Views of Japanese People (岩井天音)
11. Art※（Calliope)

30 日

12. Japanese social problem “Suicide” (宮本寛紀)
13. Green Revolution for Rwanda (Vincent)

※今回は専門知識の有無に関係なく個人の意見を交換できる議論を目指し、ジェネラルディスカッションとして身近なトピック「Love and Jealousy」「Peace」「Hero」「Art」を取り上げた。また過去の学生会議での反省から、議論の過程や発言しそこねた個人の意見を記録するためのリアクションペーパー（疑問や私見、感想などを記入する用紙）を導入した。

日本側からのプレゼンテーション

1. Japanese History

発表者：古屋 亮輔

【日時】
2010 年 8 月 26 日（水） 10:00~11:00

【参加者】
古屋亮輔、海原早紀、池上純平、井上真希、宮本寛紀、岩井天音
Maurice, Alfred, Nadine, Olivier, Pie, Christelle, Majyambere, Liliane, Eric

【プレゼン要旨】

3 万年前から現在までの日本の歴史を 15 枚のスライドにまとめて発表。

【プレゼン詳細】

テーマを選んだ動機

ルワンダ側メンバーから日本の歴史のすべてを簡潔に紹介してほしいとの要望があったため。これまで学生会議では社会問題や国際問題など、現代を取り巻く様々なテーマを扱ってきたが、やはり現代の日本社会を理解するためにはその基本となる歴史に触れる必要があり、それはルワンダ人だけでなく日本人メンバーにとっても同じことである。そのため第 4 回学生会議の最初のプレゼンで日本史を総復習することになった。

プレゼンの展開

大陸と日本列島がまだつながっていた氷河期に日本人の祖先が歩いてやってきた、ということに始まり、仏教の浸透、天皇の役割、貴族、武士の台頭、寺子屋教育、アメリカとの関係など日本史を語る上で欠かせない要素を特に重点的に説明し、図を多用して時代ごとの日本のイメージがつかみやすくなるように努めた。

また、「徳川家康」や「関ヶ原の戦い」のように日本人なら知っていて当然の固有名詞や出来事でも、前提知識を欠く外国人にとってわかりにくいものは避け、逆に「日本最古の会社」「応仁の乱の影響で中央政府が弱体化した」「300 年前の東京は識字率が世界最高水準であった」など、日本の歴史の深さをわかりやすく理解できる情報や、歴史の変遷のきっかけになった社会の変化は、日本人にとってあまり馴染みのない情報でも詳しく説明した。プレゼンのタイトルも日本史上の「○○時代」ではなく「A.C.300～500」のように西暦で区切った。

質疑応答

《プレゼン直後の質問》

Q. いつ、どうやって日本は経済大国になったのか？（Nadine）

A. 戦後の自動車産業など。海原・池上が産業に関してプレゼンするのでその時に詳しく説明する。（古屋）

Q. どのようにして日本は今の不況のに陥ったのか？ （Nadine）

A. もともとはアメリカ発の不況だが、アメリカの経済が悪化すると関係の深い日本企業の生産・輸出が減少し不況になる。（古屋・池上）

Q. 仏教と他の宗教の違いは？（Alfred）

A. 仏教に神はなく、厳しい教義もない。生

活に溶け込んでいて日本人にとってより身近である。（古屋）
Q. 日本は科学技術が世界トップレベルにまで発達したのはなぜか？(Majyambere)
A. 1 分では説明できないので明日のプレゼンで詳しく説明します。（海原）

《リアクションペーパーより》
What should be the reaction of Japanese toward the history of Japan?
（日本人は日本の歴史に対してどのように考えているのか？Olivier）
In which God do Japanese believe in?
（日本人はどの神を信仰しているのか？Liliane）
Why is Buddhism more powerful than Christianity / Islamic?
（なぜ仏教はキリスト教やイスラム教より浸透しているのか？Nadine）
How does Buddhism different from Christianity?
（仏教はキリスト教とどう違うのか？Alfred）
What is the most powerful religion?
（どの宗教が最も力をもっているのか？）
Buddhism the object for believes?
（仏教における信仰の目的は何か？）

【感想】
今回のプレゼンの準備で中学校レベルくらいの日本史の知識を総ざらいしたのだが、改めて年表を振り返ると、それぞれの出来事を個別の知識としては知っていても、その歴史的意義や社会に与えた影響については知らないということが多かった。大学生になり、中学生の時よりは少し洗練された考え方で歴史を見ることができたような気がした。学生会議の度に「私たち自身が日本のことを知らない」と言う日本人メンバーが何人もいるが、実際にその後日本のことを学ぶために行動に移すことは少ないように思う。知らないことに気付いた、と言っているだけでは話にならない。私自身は今回歴史のプレゼンをする機会を得られて良かったと思う。

さて、プレゼンの中で興味深かった点としてアルフレッドがリアクションペーパーに”Totalitarianism, Depression, Buddha”（全体主義、不況、仏教）を挙げたように、質疑応答は産業や宗教に偏った内容になってしまった。これまでの経験からある程度は予測していたが、やはりルワンダ人メンバーは宗教の話題に非常に関心を持っている。もちろん質問するのは自由だが、宗教に関するプレゼンを別に用意してあることもよく言っておけばよかったと思う。リアクションペーパーの「理解できなかったこと」を見ても以下のように仏教に関することが並んでいた。
“Is Buddha taken as God or other symbol in which Japanese people believe in?” (ブッダは神か、あるいは別のシンボルとして日本人に信仰されているのか,Liliane)
“A lot of people out of Japan think that Buddha is a Japanese God, I too, I think so. But what could Buddha really present to Japanese?”（私を含め日本人以外はブッダが日本人にとっての神だと思っているが、実際日本人にとってブッダはどんな位置づけなのか,Liliane）
“For me I can’t agree with Buddha since its object brief which is not clear to

believe on object.”（仏教における信仰の目的がやはりよくわからない,Alfred）

歴史全体について発表した私の立場からすれば、1500 年以上も前から全国を統べる政府がいて、時代ごとに国を治めるための様々な努力がなされ、今に至るまで日本人の伝統・価値観が脈々と受け継がれてきたという点に感動してもらいたかったのだが、結局宗教や産業に目が行ってしまう結果になり、少し拍子抜けの印象があった。事実を淡々と挙げていく私のプレゼンにも問題があったのかもしれない。ただ一点、日本歴史において政治権力が天皇→貴族→武士→天皇→国民と推移したことを理解できるような構造でプレゼンを作ったため、“I came to know …the succession of power.”（権力の推移がわかった,Olivier）のようなコメントがあったことはよかった。学生会議メンバーは不変ではないため、ルワンダ側のメンバーがすべて入れ替わった頃にまた日本の歴史を発表する必要性が出てくると思うが、その際は今回の私の経験を踏まえてより上手く情報を与えるよう、後輩にお願いしたい。

2. Japan’s Education and World War II

発表者：井上 真希

【日時】

2010 年 8 月 26 日（水）11:00~12:00

【参加者】

池上純平、井上真希、岩井天音、海原早紀、古屋亮輔、宮本寛紀

Alfred, Christelle, Eric, Lillian, Majyambere, Maurice, Nadine, Pio

【プレゼン要旨】

第二次世界大戦前後、日本政府が行った教育方針や、児童・生徒に対する政策の代表的なものを取り上げ、どのように教育は戦時に利用されたのか解説した。また、戦後の国家間における歴史認識問題について考える機会を与えた。

【プレゼン詳細】

テーマを選んだ動機

94 年のルワンダ虐殺に関する文献で、当時の学校では教員が生徒をフツ・ツチに強制的に分離し、更にツチの生徒を差別するように教育がなされていた、という記述を読んだ。その際、強制的に帝国主義的な思想を教育していた日本の戦時教育が思い起こされた。第二次世界大戦下の日本と虐殺時のルワンダでは、教育はプロパガンダとして利用されていた。そこで、第二次世界大戦前後においてどの様に日本人、特に学童・生徒は教育されたのか着目し、先に述

べた共通性についてルワンダ人学生と共に考えたいと思った。また、日本が抱える歴史認識問題についても意見を聞きたいと思った。

プレゼンの展開

第一に、戦時下の教育が天皇崇拝、愛国主義、軍事主義を支持する国家神道を基盤とした政策によって構成され、国民学校で徹底的にそれらの思想が教え込まれていたことについて言及した。次に、戦争が激化する過程において、学徒動員や学童疎開が命令され、当時の学童、生徒の人生が戦争の犠牲となったこと、一方、敗戦後はGHQが主導となってかつての帝国主義的、軍事的な教育から民主主義的な教育への脱却を目指す教育改革とその具体的な政策について紹介した。

第二に、歴史認識問題として、日本・米国・アジアの国々の間に存在する、広島・長崎原爆投下に対する代表的な解釈の違い、そして日本とアジアの国々で未だ解決されていない歴史教科書の問題を取り上げた。

プレゼンに込めたメッセージ

教育は戦争を引き起こす武器にもなるが、平和を構築する効果的な道具にもなりうる。どのようにそれを用いるのかは、私達に任されている。

【ディスカッションテーマ】

プレゼンの後、次の三つの点についてグループで考えてもらった。

①第二次世界大戦の歴史は日本の学校でどのように教えられるべきか？

②虐殺の歴史はルワンダの学校でどのように教えられてきたか？

③教育の領域において、平和構築を実現さるために考えられるアイディアはあるか？

【ディスカッションテーマに対する意見】

● グループ 1

（岩井・ Alfred ・Christelle）

① に対する意見

・The teachers should be fair and teach students the reality of the history, and they should not condemn one group. And also they should know the cause and all the information about the war.

（教師は公正に歴史の真実を教えるべきであり、特定の集団を非難すべきではない。また、教師は戦争の原因やあらゆる情報を知るべきである。）

・They should teach the history not as a victim or a victimizer but as a human being.

（教師は被害者、加害者として歴史を教えるのではなく、人間として教えるべきだ。）

② に対する意見

・It has been taught mostly where by parents played role of creating enemy by telling children that there are your enemies.

（(虐殺前および虐殺時は) 両親によって敵の存在（トゥチにとってのフツ・フツにとってのトゥチ）が教えられていた。）

・It is more important to teach the concept, “We are all Rwandans” than the history itself.

（「皆同じルワンダ人」というコンセプトを

教える方が、虐殺の歴史を教えるより重要である。）

③ に対する意見

・I think it could be possible in the way that they allow students worldwide to meet and share views about peace each other.

（世界中の生徒が出会い、平和に関する価値観をお互いに共有できたら、（平和構築は）可能である。）

・Love and understanding each other is important to build peace. So the teachers should teach kids about its significance.

（愛やお互いに理解することは平和を構築するために大切なことである。教師はその重要性を児童に教えるべきである。）

●グループ 2

（宮本・Lillian ・Majyambere）

① に対する意見

・ We should be taught the right information about W.W.2 by a history teacher.

（私達は第二次世界大戦に関して正しい情報を教えられるべきである。）

②に対する意見

・Some teachers used to the ideas of races and divisionism but also the ideology of Genocide to students.

(教師の中には民族的概念、分断主義的考えや虐殺のイデオロギーを教える者もいた。)

・ Today the teachers have to teach students how to live in unity and reconciliation.

（今日、教師は共生や和解について教育しなければならない。）

・Tools used to teach students about Genocide history: books, personal experiences, songs, clubs of unity and reconciliation, workshops, etc.

（虐殺の歴史を生徒に教育するためのツールとして、文献や個人的な体験談、歌、共生と和解を促進させるクラブ、ワークショップなどが挙げられる。）

④ に対する意見

・Peace and unity have to be taught to children from the nursery schools.

（平和と共生の概念は保育園くらいから子ども達に教えられなければならない。）

・Workshops are also good ways for young children to learn peace.

（ワークショップは小さい子どもに平和について学ぶ良い手法である。）

● グループ 3

（古屋、Pio、Majyambere）

② に対する意見

・Today the history of the Genocide are not taught because there are still some traumatised children, and they are likely to get panicked. Also it is for children not to recognise the idea of the division, “Tutsi” and “Hutu”.

（現在ルワンダの学校では、虐殺の歴史は教えられていない。なぜなら、教室には未だにトラウマを抱えている子ども達がおり、彼らが取り乱してしまうこともあるからである。また、トゥチ・フツといった概念を認識させないためでもある。）

・When Vision 2020 is accomplished and the people's life become stable, it should be the time to teach history of the Genocide in schools officially.
（Vision 2020 が完遂され、ルワンダの人々の生活が安定したら、学校でも虐殺の歴史は公式に教えられるべき。）

【リアクションペーパーより】

QUESTION

・Nowadays, is there any trace about bombs threat in Hiroshima and Nagasaki during the WW2? （今日、広島と長崎での原爆投下に関する何か軌跡（記録）はあるか？）by Majyambere

・How are your reactions or thought about shooting Nagasaki and Hiroshima?（原爆投下についてどう考えるか？）(Alfred)

・After Hiroshima break, did American pay for the destroyed materials? （広島への原爆投下後、アメリカは破壊された建造物等に対して弁償したか？）by Alfred

・Why stop classes of moral science, Japanese history and geography temporary?（戦後、民主化教育のために、一時期なぜ道徳教育、日本史、地理の授業を休講したのか？）by Christelle

INTERESTING

・Democratization （民主化）by Christelle

・Education, tool to build peace（教育が平和構築のための道具になるという意見） by Christelle

・Teach like a human being, not Japanese/Chinese （（戦争の歴史に関して）日本人」・「中国人」としてするのではなく、「人間」として教える、という意見） by Nadine

CAN'T AGREE / UNDERSTAND

・It's not good to engage youth in the war.（青少年を戦争に従事させることは良くない。）by Majyambere

・Stop classes of moral science, Japanese history and geography（道徳、日本史、地理の授業を休止したこと）
by Christelle

CONCLUSION / MY OPINION

・Let's youth change the world strongly in peace.（青少年が世界を平和な世の中に変えるべき） by Majyambere

・If we love each other, we can live in peace. （互いに愛し合えば、平和な世の中で生きられる。）by Nadine

【感想】

今回のプレゼンにより、戦時下の日本において国の軍事政策により多くの青少年の人生が戦争の犠牲となったことや、終戦を期に、帝国主義から民主主義へ教育の方針が劇的に変化したことに関して、ルワンダ人学生の理解を深めることができた。やはり、虐殺に向かう時代、ルワンダの学校でも教師によって虐殺を促すイデオロギーが生徒に教育されており、両親からもそういった教育がされていたと聞いた。このことから教育は時にはプロパガンダとしても機能してしまう面を再認識した。

現在、ルワンダでは学校において公式に虐殺の歴史は教えられていない、という事実には驚いた。それはトラウマがある青少

年を配慮してのことだそうだが、少し疑問が残った。虐殺から約 16 年経過した現在でも、まだルワンダ国民全体として共通の歴史の真実が明らかになってないのだろう。ルワンダ政府が掲げる開発計画書、「Vision 2020」が完遂したときこそ、歴史教育はされるべきだという意見もあったが、将来的にルワンダではいつ学校教育で虐殺の歴史が教えられるのか非常に興味深い。

歴史認識の問題に関しては、未だに日本、アジアの国々、アメリカの間において、どのように広島・長崎の原爆投下の歴史を認識するか、という問題（＝ヒロシマ・ギャップ）について説明した。このヒロシマ・ギャップについて、ある生徒の「虐殺や戦争を『加害者』、『被害者』の視点で教えるのではなく、『人間（人類）』の歴史として教えるべき」という発言が心に残った。

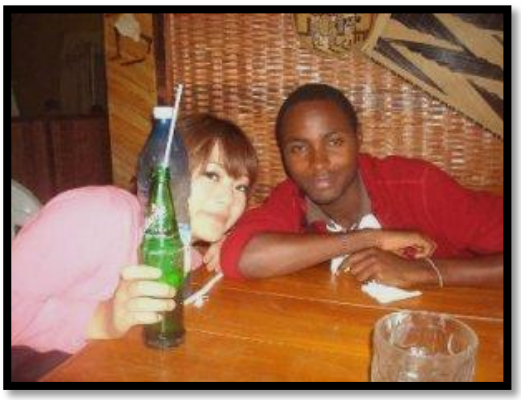
ディスカッションテーマの三つ目の答えでは、「世界中の生徒が出会い、平和に関する価値観をお互いに共有すれば平和構築は可能」、「愛やお互いに理解することは平和を構築するために大切」といったコスモポリタン的な意見が目立った。

このように、取り上げたテーマは日本の戦争史にまつわる問題だったのにも関わらず、ルワンダの虐殺後の将来や平和構築のために必要なことについてなど、発展して議論を交わすことができ、非常に有意義な時間となった。

コラム　一人で食べてたのにこれなんていじめ

ルワンダでの食事に多様性を求めることは難しい。パンは大学やホテル、街中の店でもたくさん種類があって充実しているが、一般的なレストランで食べられるのは大抵ビュッフェ、オムレツ、ブロシェット（山羊肉の串刺し）くらいのものである。しかし味は申し分ない。日本人好みの適度に控えめな味付けで、とても美味しい。

ビュッフェは店によって少しずつこだわりがあるようだが、だいたいチャーハン風の米、スパゲッティ、フライドポテト、バナナ（甘くない穀物用）、豆、ほうれん草の炒め物、牛肉のスープ煮、そしてたまにサラダが並んでいる。本当にほぼ毎日食べていたから並んでいる順番まで覚えてしまった。



そんなある日、ブタレにて。
この日も私たちはディスカッションを終え、大学内のカフェテリアで夕食をとろうとしていた。しかし運悪く、混雑していて座る場所がない。さてどうしよう、と。そんな時にモーリス、大きなテーブルを使い一人で食べている男性のところで、「よしここに座ろう」と、さも当然のような口ぶりで言いだした。これにはたまげた。

もちろん、えええこれなんていじめ、早くどけって言ってるようなもんじゃん、と私たち日本人は大変困惑した。というか実際、食べていた彼も「…え？」という感じで私たちを見ていた。しかしモーリスは大丈夫大丈夫よくある、と言い、完全に彼を取り囲む形で私たちを座らせたのだった。

そんな感じでそわそわしながらちょっとおかしな食事が始まったわけなのだが、なんというか、やはりそこは文化の違いか。モーリスが口火を切って彼と話し始めると彼も積極的に私たちと話し始め、自分の勉強の話をしたり一緒に写真を撮ったり、結局 10 分もすれば普段ルワンダ人大学生と食べているのと同じように楽しい夕食になっていた。

これはさすがに極端な出来事だったが、実はこういったことは食事に限らず、たとえば彼らは街中のバスで乗り合わせた人などともすぐに会話を始める。やはりここでは人と人との距離が近いんだな、と実感する経験だった。

（古屋）

3. Japanese Industry

発表者：海原早紀、池上純平

【日時】

2010 年 8 月 27 日(木)　9:30~10:30

【参加者】

古屋亮輔、海原早紀、池上純平、井上真希、宮本寛紀、岩井天音

Alfred, Pio, Vincent, Christelle, Eugene, Ndoonbe, Calliope, Maurice

【プレゼン要旨】

日本の産業が現在に至るまでの推移・発展過程と、その時代的背景・要因の紹介

【プレゼン詳細】

テーマを選んだ動機

ルワンダ側から、日本がどのように産業を発展させてきたかを紹介してほしいとの要望があったため。また、日本の事例との比較からルワンダで今後いかに産業を発展させていけるか議論できるのではというねらい。

プレゼンの展開

繊維と軽工業を中心としていた戦前の日本の産業から、二度の世界大戦及び戦間期を経て、重化学工業へと発展、そして機械・サービス業へと、産業構造がいつ、どう変化したのか。そして朝鮮特需に始まる戦後日本における復興から、高度経済成長を経て現在に至るまで、日本の産業の成長の流れを扱った。その際、政府は何をしたのか、そしてしなかったのか。

この時期の日本の産業は国際問題とは切り離せない関係にあったため、国内問題だけでなく、ニクソンショックやオイルショックなどの国際的な問題の両面にも触れつつ、他国との産業の変化の比較、現在の日本産業が抱える問題点、将来像も提示した。

説明する際、ルワンダとの比較もできるように、ただ産業そのものを示すのではなく、産業構造の変化をもたらした要因はどこにあったのかという因果関係を明確にすることを重視してプレゼンを行った。

質疑応答

≪プレゼン直後の質問≫

Q. 漁業について。漁業は主要な産業ではないのか？(Pio)

A. 主要な産業ではあったが、今はＮＺなどの海外産の方が安いので輸入も多くなっている。

Q. 中国の急激な経済成長がどうして日本の産業の成長の妨げになるのか？(Pio)

A. 中国製の製品の方が安いから。日本以外の国々でも、日本製より安い中国製を選ぶ。

Q. 以前の日本の成長のように、ルワンダのような発展途上国が先進国に追いつくにはどうしたらいいのか？

A. （個人的な意見として）ルワンダにおいては、政府が出資してキガリに製造業の工場をもっとつくるべきであり、海外の大学等に人材を送り出して教育を受けさせるべき。そこに投資したらいいのではないか。

Q. オイルショックとはなにか？ニクソンショックとは？(Alfred)

A. オイルショックとは、中東での紛争などの原因によって中東からの石油の石油輸出量がへり、日本にも石油供給が減ってしまったこと。

ニクソンショックとは、金との兌換性が

下がったことによりドル危機が世界中で起こったこと。

Q. 産業の空洞化とは？(Alfred)

A. 工場が日本から中国やアメリカなどに移転してしまうこと。それによって引き起こされる、日本での雇用の減少などのこと。

Q. 日本は産業の発展に必要な知識や技術をどこから手に入れたのか？日本国内か？それとも外国からか？(Vincent)

A. どこからとは一概には言えないが、外国から。例えば車はアメリカの方が先に発展したし、日本はそういった先進国から技術を得て、日本流に成長させていった。

Q. 日本では大気汚染や水質汚染などの公害に対し、どう対策してきたのか？(Ndoonbe)

A. 確かに成長期である 1970 年代には大気や水質汚染などの公害が発生し、死者も出た。しかし政府はその事態を見て、規制を作ってその問題に取り組んできた。また、太陽光発電などの新エネルギーも採用している。

Q. 日本では海外からの技術者を雇用しているのか？(Ndoonbe)

A. 正確な人数はわからないが、確かにしているし、増加している。

Q. ルワンダの産業の問題として、「賃金が高い」という説明があったが、賃金の問題がどうして産業発展に影響を及ぼし、成長の妨げとなると言えるのか？（Calliope）

A. 先ほど中国の例を挙げたが、中国やインドが産業や工業で発展してきたのは、労働者の賃金が安く、それによって製品の価格を低くできるという理由もあるから。

例えば、バングラディッシュはルワンダの約半分の賃金。もし海外企業が合理的な選択をしたら、おそらくルワンダではなくバングラディシュに工場を建設するだろう。だから日本の企業も海外に工場を建設している。

Q. ルワンダの賃金が高いとは思わないが、どうしてそう思うのか。(Calliope)

A. 日本人のルワンダ研究者とルワンダの産業について話をした際、そういう情報を得た。他国との比較の問題だと思う。

Q. 日本では資源が少ないと言っていたが、資源はどこから手に入れたのか？(Ndoonbe)

A. 例えば鉄はオーストラリアなどから原料となる鉄鉱石を輸入して国内で加工・生産したりしている。

Q. 日本は核兵器を生産しているのか？(Pio)

A. 日本は非核国だからしていない。広島・長崎の歴史を経験しているから。

Q. その他の軍事兵器を生産しているのか？(Pio)

A. いくつかはしている。

Q. 軍需産業が経済成長に関与しているか？例えば、ヨーロッパやアジアの国々、アメリカはアフリカの戦争を利用して武器を売り、利益を得ている。日本もかつて朝鮮戦争の際に武器を売って経済を回復させた。今はどうなのか？アフリカを市場と考えているのか？(Pio&Calliope)

A. 確かに昔は多く作っていたし、朝鮮特需があったことも事実だが、現在は自衛用だけで、国外に輸出・販売はしていない。

Q. どうして車が主要産業となったのか？他のものではだめだったのか？

A. （個人的な意見だが）車は国内用にも輸出用にもでき、また、当時（高度成長期）

は車への需要が特に高かったことも要因として挙げられる。

Q. 高度成長期、どうして政府は積極的に関与しなかったか？

A. 政府が関心がなかったわけではない。政府はインフラの建設などは積極的に行っていた。ただし、日本は資本主義なので、政府が市場に介入しないほうがよいとされた。

≪リアクションペーパーより≫

* Investment is based on capital, after WW2 what did you do to gain capital?

* How do these industries profit to small people? (Eugene)

【感想】

Interesting Opinion

* private sector's role in the country development.(Vincent)

*money exchange (Vincent)

* It's very good to hear how Japan keeps on developing after the wars which could help us as Rwandan's to work hard and have hope that will develop it worked hard.(Alfred)

* It's also good to adopt this system of copying how other countries work so. As Japan did to improve their products to the quality like that of America and other countries developed.(Alfred)

My opinion

This topic is interesting. Now we are aware of Japan industries. As advice, Chinese are producing cheaper products and sell them all over the world. Try as quickly as possible with your technologies to make the chance through exchange with many other countries such as Africa countries. Make products of cheaper price. Thank you.(Eugane)

My opinion(I don't agree)

I don't agree with the idea of Japanese industries having problem due to rise of Chinese industries. I think that it could be a motivation for competition.(Alfred)

今回日本の産業を紹介するにあたり、どんなポイントに焦点を当てたらルワンダ人に興味を持って聞いてもらえるかというのをまず考えた。個人的にはすべての変化の過程における、「なぜ」といった理由や背景部分を強調したかったので、結果的に質問も多く出てきて、充実した話し合いができたと感じている。

質問や感想を見た限り、中国との関係性や軍事産業に対しての姿勢などに特に興味を示しているようだった。特に武器輸出の部分では、表現は悪いが「アフリカを食い物にしている」先進国への嫌悪感を抱いているのが窺いしれた。

最後に、ルワンダ人学生が自国の産業について考えてくれたことが非常に嬉しかった。もちろん以前から関心もあり、考えてはいただろうが、このプレゼンで紹介したことを踏まえての質問が出てきたことで、彼らの知見が深まったと考えると、喜ばしい限りである。（池上）

4. Religious Views of Japanese People

発表者：岩井 天音

【日時】

2010 年 8 月 29 日（日） 15:30~17:00

【参加者】

古屋亮輔、海原早紀、池上純平、井上真希、宮本寛紀、岩井天音、宗像淳史、SUGEE Maurice, Calliope, Pio, Noel, Ephraim, Alfred, Olivier, Majyambere, Liliane, Eric, Sylver

【プレゼン要旨】

自分の信仰する宗教について聞かれたとき、日本人の 90%が「無宗教だ」と答えるという統計結果がある。しかしそれは日本人がまったく宗教を持たないという意味ではない。日本人には、仏教や神道の考え方と深く結びついた日本人なりの宗教観や信仰の形がある。

【プレゼン詳細】

テーマを選んだ動機

世界ではキリスト教とイスラームの対立構造が叫ばれて久しいが、一神教を信じる人々がアミニズム的な要素を持つ日本人の宗教観を理解する方が難しいのではないか。第 3 回本会議でルワンダメンバーが日本人の宗教観に大変興味を持ってくれたということを聞いていたので、日本人の宗教観をルワンダでプレゼンすることは相互理解に繋がると考えた。

プレゼンの展開

はじめに、日本人の価値観に大きな影響を与えている仏教と神道の基本的な考えを紹介した。

その上で日本人は「無宗教である」と答える人の割合が 90%であるというデータを示した。日本人にとって「あなたの宗教は何ですか？」という質問は、「あなたはどの宗教に属しますか？」というように捉えられる。実際は何らかの形で信仰心は存在することが多いのだが、はっきりと「○○教を信仰しています」と答えられないので上記のような結果になる。決して無神論者が多いとか、信仰心がまったくないという意味ではない。

また”God”の訳語は「神」ということになっているが、キリスト教における”God”と日本の「カミ」はまったくの別物である。「カミ」は無数に存在し、自然や先祖と結びついた霊的な概念なのだと思う。

次に宗教と関係にある年中行事を紹介した。初詣、お彼岸、お盆、大晦日などはすべて仏教や神道の儀式・考え方が基になっている。これにより、日本人と宗教がまったく切り離されたものではなく、むしろ深い関わりをもって日常生活に生きているのだということを伝えたかった。

最後に昨今の風潮として、宗教への恐怖心を説明した。1994 年に起こった「地下鉄サリン事件」などの影響も受け、日本で「宗教」と言うと「カルト宗教」を連想させ、あまり宗教という言葉自体に良いイメージがない。また儒教的な価値観と反することから、キリスト教もあまり受け入れられてないということについても触れた。

以上より日本人は「無宗教である」と言

われているが、実際は宗教的な儀式は年中行事となって日常に存在している。キリスト教的な文脈での「神」は信仰していないが、日本人は長い歴史の中で形成された独特の信仰心を持っており、それは生活の一部になっている。

質疑応答

《プレゼン直後の質問.》

Q. 日本人が 90%も無宗教という統計結果が出るのは何故なのか？（Maurice）

A.日本人は特定の宗教を信仰している人は少ないので、「あなたの宗教は何ですか？」と聞かれたときにどう答えていいか分からないため、そのような統計結果が出る。（岩井）

Q. いくつもの宗教があって、宗教間で対立は起きないのか？（Ephraim）

A. 歴史的に見ても大きな対立はなかった。仏教と神道は、1400 年ほど前からお互いの考え方に影響を与え合ってきた。また、仏教や神道は他宗教を排除する性質を持たないので、キリスト教とも争いを生まずに共存している。（岩井）

ただ、16 世紀に豊臣秀吉が自分の権力への影響を恐れてキリスト教徒たちを迫害したという歴史はある。（井上）

それは宗教対立というよりは、日本と外国の争いと見る方が正しいかもしれない。（海原）

当時は、キリスト教が説く「人はみな平等」という価値観とは相反する社会構造を持っていた。だから政府（豊臣秀吉）はキリスト教を弾圧した。（古屋）

Q. それでは現在の日本の首相は宗教を持っているのか？（Ephraim）

A. 彼個人の信仰については知らないが、そのような立場にいる人は「仏教徒だ」などと特定の宗教に関係した発言をするべきではない。（海原）

加えて、「政教分離」の原則が存在する。（古屋）

Q. 親と子で違う宗教をもつことはあるのか、またそれは可能なのか？親から子供に宗教はどのように伝えられるのか？（Ephraim）

A. 両親がキリスト教徒であれば子供もそうなる確率は高い。日本人は憲法で「信教の自由」を保障されている。成人したのち自分からクリスチャンになることを選び取る人もいる。（岩井・井上）

Q. 主に仏教、神道、キリスト教の 3 つの宗教があるようだが、例えばクリスマス休暇やイースター休暇があるように、これらに関係した休日・祭日はあるのか。また祝日の施行において、どの宗教が一番優先されるのか。（Pio）

A. どの宗教が一番国民の祝日と結びついているか、ということに関しては、どの宗教もあまり結びついていない。例えばお盆それ自体は仏教に関係しているが、お盆休みは単なる夏休みとほぼ同義で宗教的な休暇としては認識されていないと思う。（岩井）

「国民の祝日」として制定されている休日は色々あるが、それらは概ね宗教に関係していない。（海原）

Q. 「日本人は宗教を持ってない」とあった

が、無神論とはどう違うのか？また、「日本人なりの宗教観も確かに存在する」との趣旨の発言があったが、この矛盾はどういうことか？（Pio）
A. 日本人が「宗教を持っていない」という時それは「特定の宗教に属していない」ということを意味する。日本人は God ではなく、自然などの何か超越的なものに神性を見出しているので、無神論者が多い訳ではない。ただキリスト教的な「神」を信じるかどうかという点においては、信じていない人の方が多いだろう。（岩井）
仏教や神道が日本に広まるよりもずっと前から、日本人は固有の信仰があった。それは、自然界のすべての物に精霊(spirit)が宿るという信仰の形だった。そこには大地や農業、太陽の精霊などがいて、我々は歌や踊りを捧げてきた。INDANGAMUCO がコンサートで豊穣を祝って踊ったのと同じように。そしてそれらの精霊は一つの大いなる精霊の元に存在していると考えられていた。（SUGEE）

Q. SUGEE の言う「一つの大いなる精霊」とは何か？詳しく説明してください。（Noel）
A. それは言葉で説明できるものではないし、私自身も探している途中だ。ただ、その大いなる精霊こそ日本の「カミ」だと思っている。すべてのものは聖なる魂を持っていて、それは人間一人ひとりの中にあると思う。（SUGEE）

Q. キリスト教の文脈における神と日本のカミは何が違うのか？（Alfred）
A. 日本のカミは God と同じように超越的な存在として捉えられているが、それ自身が存在するというより、その神性がある事象・事物の内側に生まれるのではないかと思う。だから神道では、木にもカミが宿っていると考えられている。（宗像）

Q. 神道では「清浄」が最も大切な概念だと説明があったが、具体的に「清浄」を説明するものは何か？（Noel）
A. 例えば、神社に入るときは入り口で手を清める場所がある。何故だか分からないけれど、神社に行くと清くなるような気がする。（井上）
神社には入り口に「鳥居」という門があるが、それをくぐると我々の体は清浄になると信じられている。（宮本）
補足として、清浄の対立概念は不潔ではない。「清浄＝生」なので反対語は「死」にあたる。生命や新たな命の誕生が「清浄」にあたる（岩井）
私は神道における「清浄」は「何か神的なもの（霊、魂）を清らかに保つ」ということではないかと考える。（SUGEE）

Q. ルワンダにおけるキリスト教は旧宗主国からもたらされたものだが、日本の宗教はどこから来たのか？（Pio）
A. 神道は日本で生まれた。仏教はインドで誕生し、6 世紀に現在の中国・韓国を伝わって日本にやってきた。キリスト教は 1549 年にポルトガル人の宣教師が伝道したのがきっかけ。（岩井）

Q. 宗教は日常生活に規律を与えてくれるなど、人々にとって良いことがたくさんある。日本で無宗教の人が多いことは、日本

社会に悪影響なのではないか？（Pio）
A. 私個人の考えとして、宗教を信じていないからと言って、社会に悪影響を及ぼしているとは思わない。無宗教と言ってもそれは無神論ではないので、神を信じていないから規律がない、というのとは違う。（岩井）
例えば私は、重要な試験の前などに「神さま…お願い！」などと思うことはある。普段から信仰心を持っている訳ではないが、そういった「超越的なもの」の存在を信じていない訳ではないし、プレゼンにあったようにそれは文化や風習に溶け込んでいると思う。（井上）

Q. 例えば牛などの動物を神からの贈り物として捉えて信仰心を持つ人もいる。もし自分が信じている牛を他人に殺されたら、日本人はどう思うのか？（Pio）
A. まず日本では、法と宗教は完全に分けられている。もし私があなたの牛を殺したら、私は罰せられるだろう。でもそれはあなたの財産を侵害したことによる罪であって、信仰を傷つけたからではない。日本の法律は、神の存在を認識して作られてはいない。（海原）

Q. ルワンダには「国のために祈りを捧げるい日」が存在するが、日本にはそのような日はあるのか？（Pio）
A. 日本には「建国記念日」といって国が建立されたことを記念する祝日がある。しかしそれはただの祝日にしか過ぎない。（海原）
「建国記念日」は確かに国のことを祝うが、仏教や神道のことを意識して祝っている人は少ないし、その祝日に積極的に祝っている人も少ないのではないか。（岩井）

Q. 日本では結婚するときに新郎新婦の宗教が違う場合、どうするのか？（Sylver）
A. ムスリムと結婚する時はイスラームの規定によって改宗する必要があるが、それ以外は必要ない。そもそも新郎新婦で違う宗教という事態は、ほとんどの人が「無宗教」と考えている日本ではあまり起こらない。（岩井）

Q. 仏教はブッダから始まったと聞いたが、神道には創始者はいないのか？（Maurice）
A. 神道に明確な創始者はいない。何故ならSUGEE さんもおっしゃったように、神道は宗教として教義や戒律と共に始まったのではなく、農耕文化の日常の中から生まれた作物や大地、自然への感謝から始まり、やがてそれが信仰となったからである。（岩井）

Q. それでは、神道にキリスト教でいう牧師のような存在はあるのか？また聖書のような書物はあるのか？（Maurice）
A. 牧師とは性質は違うが、神主という存在はある。（岩井）
神道は「日本書紀」など数冊の書物と深い関わりがある。しかしそれは聖書のように生き方や考え方を示したものではなく、神道という宗教の由来を説明する物語に近いのではないかと思う。（池上）

Q. 結局日本人は無神論者ではない、ということでいいのか？神道の考え方を信じているのに、神は信じていないのか？「無宗教」の意味するところは何か？（Maurice）
A. プレゼンには「日本では 10%しか宗教を信じている人をいない」というデータを

出したが、この 10%は「強い信仰心」を持っているという意味での 10%として捉えてほしい。だから残りの 90%がすべて無神論者だとか、まったく宗教心がないという訳ではない。（岩井）
90%の中にも、ある程度の信仰を持っている人はいる。ただ、日本人のほとんどは仏教や神道がどういうことを説いている宗教（考え方の体系）なのか理解していない。だから「仏教を信じています」とは自信を持って言えないので、無宗教と答えている。（古屋）
「無宗教」とは、一つの宗教だけを信じている訳ではない、と定義した方が分かりやすいかもしれない。日本人はいくつかの宗教に対して様々な態度を取っている。（宗像）
つまり、多くの日本人は主に仏教・神道・キリスト教の影響を受けていて、日本人の「信仰」と呼ばれるものはいくつかの宗教の考え方が混じって形成されていると思う。ただ、いずれの宗教も、なんとなく共感しているけど詳しく知っている訳ではないし日常的に何か宗教的なことをしている訳でもないので、多くの日本人は「無宗教」と答えるのだ。（海原）
日本人がいう無宗教とは「信仰を持たない」のではなく、「特定の宗教を信じない」ことによって生まれる状態なのだ。
（岩井）

Q. 日本に行った時に家に仏壇があったが、それは信仰の表れではないのか？ また日本の葬式の形式はどうなっているのか？
(Maurice)
A. 良い質問だと思う。何故なら葬式こそ日本人の宗教に対する考えを示していると思うので。日本の葬式は、仏教の儀式に基づいている。しかし、日本人は「仏教的な葬式をしている」と意識するよりは「伝統的な形式に基づいて葬式をしている」と見なしているのではないかと思う。このように儀式だけが形骸化したのは、日本人が「無宗教だ」と思い始めてからだと思う。（海原）

《リアクションペーパーより》
What is the contribution of every God in the daily life of Japanese?
（日本人の日常生活に神々はどのように恩恵を与えてくれているのか？ Sylver）
What did the nation do to prevent the intervention from other religions or western countries?
（他宗教や西洋諸国からの宗教的な干渉を避けるために政府は何をしてきたのか？ Pio）

【感想】
「日本の歴史」のプレゼンの時点で宗教関係の質問は多発していたので予想はしていたが、このプレゼンではルワンダ人学生からは矢継ぎ早に質問が出て、私一人では答えに詰まるところも多々あった。宗像氏や SUGEE さん、そして他の日本人メンバーに助けられながら、質問に答えていった。そのためかプレゼン自体は 20 分ほどで終了したのだが、その後の質疑応答は 1 時間を越えるほどの長丁場になった。
私は「日本人の宗教観」について考えることが多く、自分の中でだいぶ議論は煮詰まってきたように思っていた。しかし、それを外国の人に「伝える」という点ではまだまだ足らないな、と痛感させられた。ル

ワンダ人からの質問に満足のいく回答が出来なかったと思う。またプレゼンの説明で余計に混乱させてしまったことで、ルワンダ人学生が理解しきれてないと感じた。それは質疑応答で、プレゼン中に述べたことを再度聞かれることが多くあったことからも分かった。今回のプレゼンの反省すべき点を挙げながら考察したい。

まずプレゼンの展開に問題があった。「仏教・神道の紹介」→「”無宗教”であるというデータ」→「日本人なりの宗教観」とその表象（年中行事など）→「宗教への忌避」という展開にしたが、これでは日本人が結局仏教徒なのか、無宗教なのか、無神論なのか、それでいて宗教的な生活を送っているのか、がはっきりしなかったと思う。

そして英語表現にもいくつか問題があったと。「宗教」を単純に”No Religion”と訳したが、カトリックが多いルワンダにおいて”No Religion”はすなわち「信仰心がない、神を信じていない、無神論」という図式になるようだ。このプレゼンでは「日本人の”無宗教”の中にある信仰心」を伝えたかったのだが、そもそもの「無宗教」という単語を安易に訳してしまったため、説明不足になった。

さて、反省点は多く残るが良かった点も挙げたい。それは、ルワンダ人学生が積極的に理解しようとしてくれたことだ。「外国では政治と宗教の話は避けること」とよく言われる。日本人の宗教観は特に、信仰を持つ人にとっては理解しがたいかもしれない。しかしルワンダ人学生は「理解しようとする姿勢」を貫いてくれた。質疑応答が 1 時間も続いたことは、担当者としては非常に嬉しかった。

5. Japanese social problem “Suicide”

発表者：宮本 寛紀

【日時】

2010 年 8 月 30 日（月）　10:00~11:00

【参加者】

池上純平、井上真希、岩井天音、海原早紀、古屋亮輔、宮本寛紀

Eugene, Maurice, Norbert, Olivier, Alfred, Christelle, Alain, Eric

【プレゼン要旨】

日本の社会問題の一つとして、自殺者数が多いことについて。その現状と、その原因として考えられる理由、政府・NPO 団体の解決策などについて。

【プレゼン詳細】

テーマを選んだ動機

日本では、毎日 90 人近くの人々が自殺によって命を落としており、自殺未遂者は自殺者の 10 倍はいるとされていることから、1 日に約 1000 人近くの人々が自殺を図っていると言っても過言ではない。この人数は、先進国の中でも群を抜いて多い、という悲しい現状にある。

そこで、何故それほどまでの人々が、自殺に追いやられてしまうのかと疑問を抱いた。また、ルワンダでは自殺をしてしまう人々はいるのか？いるとすれば、どういった理由からしてしまうのかということも気になり、このテーマを選んだ。

プレゼンの展開

まず、昨年(2009 年)で、12 年連続、年間 3 万人以上の自殺者を記録したこと、警察庁の出した「平成 21 年における自殺概要資料」を元に、それらの年代別・職業別・性別など様々な視点からのグラフを参考に「自殺大国 日本」の現状を紹介。

次に、人々を自殺に追いやる原因として考えられる、健康面・経済面・精神面など具体的な事例も挙げながら、なぜこれほどまで多くの自殺者を出てしまうのかを紹介。

最後に、日本はどのようにこの問題に取り組んでいるのか、国会で 2006 年に成立した「自殺対策基本法」や 2007 年に“政府が推進すべき自殺対策の指針”として、閣議決定された「自殺総合対策大綱」の概要を紹介し、国家レベルでの対策を掲示。また、山手線の全駅に LED を設置していることや、NPO 法人「ライフリンク」の描く理想の社会構造などを紹介。

ディスカッション

《プレゼン直後の質問・コメント》

※ここでは、ディスカッションで特に印象深かった部分を会話形式で取り上げます。もちろんディスカッションはすべて英語で行われましたが、分かりやすいように、ルワンダ学生の意見は英語で、日本人学生の意見は日本語で書きたいと思います。

As you Japanese student, how do you collaborate with government? (Christelle)

私たち学生は、この問題を知ってはいるが、ほとんどの学生は、特に何か対策になるような行動は取っていない。(宮本)

もし、友達にうつ病の人がいたら、気遣ってあげるべきだと思う(井上)

I want to tell you about this. For example, our country, someone has such problem, maybe people talk to counselor. You should be a counselor. (Christelle)

でも、カウンセラーって仕事でしょ?(海原)

No, maybe, there is a good person who can help them. (Christelle)

Like here, at national university of Rwanda, there is a volunteer student. If we are depression, we can talk to them. (Maurice)

私たちは、学生カウンセラーはいないけど、プロのカウンセラーはいるよ。(井上)

But, if you have a friend you can go to talk to him. It's not like to professional. (Christelle)

たしかに、友達に話すことはいいことだけど、友達は友達。もし、家族とかにうつ病の人がいても、それを友達には話せないかもしれない。(海原)

Don't you have number of death because of AIDS in Japan? (Alfred)

どれくらいいるのか詳しい割合は分からない。エイズが原因で亡くなる人もいるが、とても少ない。(宮本)

Another suggestion, after genocide, we made groups and join the group. They tried to resolve the problem. They do other things, had many project to do. Maybe, you can make groups. (Christelle)

To talk your problem is trying to be open. For me, I can tell you about my life. “I do

this, I do this. I was like you" then, the other people can understand "There is not alone." (Eugene)

Do you have depression, Ryosuke? (Maurice)
たまにね。（古屋）
How do you resolve? (Maurice)
特に何もしないよ。時間が解決してくれると思う。（古屋）
Don't you care about JRYC member? (Maurice)
私は、自分の悩みについてみんなには話さないが、コーディネーターとしてみんなの話しは聞いてあげなきゃいけないと思う。（古屋）

I think that I can hold others problem in my hand, I can't hold in my heart. (Maurice)

ところで、ルワンダでは自殺してしまう人はいるの？（宮本）
Yes, some people commit suicide. Maybe, some people who are left by genocide. After genocide, their life is worse because they are alone. But that is not higher percentage.

ルワンダの学校でいじめはある？（海原）
No, that's not happening in Rwanda. (Alfred)

この他にも、日本人は働きすぎなことや、うつ病を恥ずかしいことだと思い、あまり人に言えないことなどが議論されました。

【感想】
《リアクションペーパーより》
I came to know the cause of suicide, the rate of that in Japan and also situation in Rwanda. (Olivier)
Even though, many people have many problems. It's not good to decide to commit suicide, because people may have good future and his contribution building the world is needed. (Sylvier)
Japanese government must empower the study of psychology achieve and encourage the volunteer club about suicide. You can tell you about your problem. (Norbert)
My advice about to solve people's depression is to make a group of counselors and tell people who have a problem to join you and try to solve it together and do other project. Talk to someone else even if he/she is older or younger than you. Or talk to diary? (Christelle)

まず、私はこのテーマを選んで正解だったと思う。一部のメディアに「自殺大国」とまで呼ばれるようになってしまった日本の社会問題を、日本の学生としてもっと考えなければならないと再認識することが出来た。

また、自殺そのものより、うつ病に関しての議論が白熱し、ルワンダ学生からの意見一つ一つに感心した。一番大切なことは、一人で悩むのではなく、自分の悩みや苦しみを人に話すこと。みんなでシェアをすれば、それほど大きな悩みでないことに気付

ける。ジェノサイドという悲劇を乗り越えた彼らだからこそ言える意見なのかとも思えた。

プレゼンをする前は、どんなディスカッションになるのか、あまり発展しないのではという心配もあったが、ルワンダ学生の熱心な発言や提案によっていいディスカッションになったと思う。

これから先、日本の学生としてどのようにこの問題に取り組めるか考えていきたいとも思えた。

コラム　Kinyarwanda(ルワンダ語)

ルワンダの現在の公用語は、英語・フランス語・ルワンダ語となっており、一緒にいたメンバーは英語やフランス語を流暢に話せるが、教育をあまり受けてない人たちは、ルワンダ語を話す。そこで、いくつか教えてもらったルワンダ語を紹介します。

・good morning = mwramutse
・good afternoon = mwiriwe
・good bye = murabeho
・thank you = murakoze
・have a good day = mugire umunsi mwiza
・Where do you live? = muba he?
・I live in Tokyo. = muba Tokyo.

などなど、実はルワンダ語と日本語は発音が似ているため、逆に日本語や日本の歌を教えると、すぐに覚えてよく使っていた。

中でも、Maurice の“2010 年チャラくない”という発言は本当に面白かった!!

（宮本）

※ルワンダ語を熱心に教えてくれた BIGIRIMANA Eugene がサルの真似をしている写真

コラム　Rwanda の物価は…？

ルワンダでは、ルワンダフラン(Rwandan franc, 以下 RWF)という通貨が流通。

私たちが渡航した時のレートは【1 USD(= 85JPY) = 580RWF】程であった。ちなみに私は、キガリの空港に着いた時、200USD を換金し、ルワンダ滞在中は、その一回の換金で十分に足りた。この時点で、どれほどの物価なのかお分かりいただけたでしょうか？

身近なものを例に挙げると、キガリ市内での 500ml ペットボトルの水は 1 本 100RWF～200RWF、軽食の定番サモサは一個 100RWF、レストランでのビュッフェは 1 人分で 500RWF～1000RWF などなど…。

そして、私たちが滞在したゲストハウスは、2 人部屋で 1 泊の料金 8,000～10,000RWF。つまり、1 泊するのに 1 人 800 円程あればいいのだ。

値段だけ聞くと「どんな宿なの!?」と不安に思うかもしれないが、蚊帳が備え付けてあるベッドに、洗面所は当たり前で、ブタレのゲストハウスにはトイレもシャワーも部屋ごとに設置されていたため、とても快適であった。

また、日本人と同様でルワンダ人も携帯電話を肌身離さず持っている人が多い。

日本と違うところは、ルワンダの携帯電話は基本使用料がかからないのである。携帯電話の端末を購入し、（安くて 3000RWF 程）あとはプリペイドカードを必要に応じて購入するというシステムになっている。プリペイドカードは街中の至る所で、売っているお店があるし、携帯電話会社のゼッケン(?)を着て、売っている人がたくさんいるため、困らないであろう。

私が一番言いたいこと、それは、ルワンダの物価がどうであれ、私たちのルワンダでの経験は…

“Priceless” であるということ。

（宮本）

ルワンダ側からのプレゼンテーション

1. Tourism in Rwanda

発表者：NDIZIHIWE Olivier
報告：海原 早紀

【日時】
2010 年 8 月 26 日（水） 15:00~16:00

【参加者】
古屋亮輔、海原早紀、池上純平、井上真希、宮本寛紀、岩井天音
Maurice, Alfred, Nadine, Olivier, Pie, Christelle, Majyambere, Liliane, Eric, Calliope

【プレゼン要旨】

ルワンダは国を上げて観光産業の発展を目指している。主に国立公園や博物館に力を入れていて、すでにルワンダのマウンテンゴリラは有名だ。しかし、インフラ未整備などの問題点も抱えている。

【プレゼン詳細】

展開

ルワンダの観光産業は国立公園、博物館、手作り工芸、湖などから成り立っている。ORTPN (Rwandan Office of Tourism and National Parks) は RDB (Rwanda development Board) の下で観光産業の政策を進めている。また、国内外の NGO や民間企業と協力している。

最も有名な二つの国立公園は Akagera National Park と Volcanoes National Park である。Akagera Park は西プロヴィンス、タンザニア近くに位置し、その名前はアカゲラ川に由来している。バッファロー、像、カバ、シマウマ、キリン、そして様々な霊長類が生息している。この公園は道路の整備も進んでいる。

Volcanoes National Park はマウンテンゴリラの生息地として有名で、他の霊長類も生息する。マウンテンゴリラは世界的にもルワンダを含む中央アフリカの山地にしか生息していないため、人気である。毎年ゴリラのネーミングセレモニーが盛大に開かれることも有名。

ルワンダでは自然だけでなく、王国時代に遡るその文化も評価されている。INMR (Institutes of National Museum of Rwanda)は虐殺記念館も含め、歴史的・文化的な博物館を管理している。最も有名なのがブタレにある National Museum of Rwanda である。Nyanza には国王と首長が住んでいた住居を再現した博物館がある。

観光産業に欠かせないインフラにもルワンダは力を入れている。ゴリラトレッキングのためのツアー会社、道路整備、キガリや国立公園付近の宿泊施設の充実などがある。

しかしルワンダの観光産業には問題も残る。例えば道路の質が悪いことや動物を保護できる獣医などのスペシャリストの不足、そしてルワンダ国民の観光に対する無関心。国立公園に入るのにルワンダ人は 20 ドルほどの入場料がかかるが、これを払いたいと思う人は少ない。(外国人は 100 ドル程度)

質疑応答

Q. 日本では海外旅行客はもちろん、日本人自身が国内の観光産業を支えている。ルワンダはそのように変わっていくのか。(海原)

A. 今まで観光のイメージは「お金持ちしか楽しめないレジャー」と認識されていた。でも、今は国も発展し、国民は観光を楽しむ外国人を見て、自分も参加したいと思うようになってきた。自分も、実際ゴリラを見たことがないからいつか行きたいと思う。こんな風に少しずつ情況は変わってきている。(Alfred)

Q. ルワンダでは観光客と地元民の間に問題は起きないのか。
A. 一つの問題として外国人による売春がある。(Alfred)
A. 売春や性的暴力などの問題があるが、だからと言って外国人を拒むことはできない。観光によって経済的に発展し、世界と繋がること、観光客のもたらずポジティブな影響を大事にしたい。(Calliope)

Q. 観光産業の発展に伴う環境破壊の問題はあるか。
A. あるかもしれない。道路を作れば自然を壊すことになる。でも、政府も自然の保護には配慮しているし、そこまで大きな問題として私は認識していない。(Calliope)

Q. 日本には珍しい動物の生息する自然公園はあるか。(Eric)
A. 日本にも、他では見られない動物は何種かいるし、国立公園もある。しかしアフリカほど観光地として栄えてないかもしれない。

Q. なぜルワンダ政府はルワンダ固有の神々への祈りの場などを、観光地として発展させようとしないのか。例えば、ギリシャに行ったらたくさんの神殿を見ることができる。(Pio)
A. それは博物館に行けばみることができる。(Olivier)
A. 博物館だけでは足りない。しかしギリシャほど彫刻などがないのが問題なのではないか。(Eric)

Q. ORTPM はどんな政策を行っているのか。（井上）
A. 良質な道路の建設、動物のケアスタッフの招致、ホテルの建設など。政府（RDB）が指針を示している。(Alfred)
A. 更に政府はパンフレットを発行して、国民に観光産業の大切さを理解してもらう努力をしている。

【ディスカッション】

議題

1. 日本にはどんな観光ができるのか。は観光産業をどのように発展させてきたか。
2. ルワンダにおける観光の発展への影響どのようなものか。

ディスカッション過程

（グループ３のディスカッションより）

ゴリラについて

「なぜゴリラが他の動物より魅力的と言えるのか？日本では動物園でゴリラが見える。どうやってその価値をアピールするかが問題だ。」（古屋）
「ゴリラはとても珍しいからだ。そしてゴリラは家族で住んでいて、他の動物よりその生態系が面白い。人間と似ている。」（Majyambere,）

日本の観光について

「どんな観光が一番儲かっているのか。」（Majyambere,）

「いろいろな民間企業が展開しているから、どれが一番かは判断できない。民間が強いというところがルワンダと違うのだろう。日本の観光地としては世界遺産、城、寺、森林、東京タワーなどのビル、広島の原爆ドームなどがある。歴史と現代都市という二つの要素を持つから、発展途上国と先進国どちらからも観光客が来る。そして食文化も豊か。」（古屋）

ルワンダの観光について

「ルワンダ人が観光に行かないのはなぜ？」（古屋）

「お金の問題というより、皆がその価値を理解していない。動物を見に行くより、他にお金を使わなければいけない問題を抱えている。」（Liliane）

「しかし、ルワンダの観光は、経済発展に役立った。海外からたくさんのお金が入った。税金もとれた。バスやホテルは民間で、国立公園などは政府が入場料をとっている。」（Liliane）

「ルワンダにとって大きな収入源になっているとはいえ、観光はメインの産業になれないのでは。」（古屋）

「メインではない。他にもある。」（Majyambere,）

「では、ルワンダの他の産業には何があるのか。」（古屋）

「一番に栄えているのが、ビール。次がセメントだろう。」（Majyambere,）

各グループ結論

グループ１

1. 日本は縦長の形をした国なので、各地で違った気候が楽しめる。様々な食べ物、寺院、城、自然公園、ショッピングなどで人を集めている。日本では野球・サッカー観戦が人気なのでスポーツも観光産業としてさかんである。
2. ルワンダの国の収入の 30%が観光業に関連したものである。外国人が来てルワンダを見ることはルワンダの良い評価にもつながる。観光は国にとってのプライドとなる。

グループ２

1. 日本には二つの側面がある。歴史的な日本と、近代都市の日本。それに加えて、自然、原爆ドームなどがある。日本食は非常に人気だ。
2. 観光による収入が国を潤している。

グループ３

1. 先のグループの意見に加えて、日本で 1970 年に開催された万博の例を挙げたい。日本人みんなが訪れた大成功のイベントだった。今でも日本にはイベントが各地で開催される。最近は特に漫画・アニメが強い。ルワンダでも、外国人とルワンダ人が一緒に楽しめるようなイベントを開催してはどうか。
2. 観光はどんな国にも大きな影響を及ぼす。国外、国内からお金を儲けることができる。例としてドバイは観光のシステムを構築して、今では世界中に知られている。また、発展とはインフラ整備だけではない。文化的、社会的、知的な国際交流を生む観光業は意義がある。

グループ４

1. 日本での観光の歴史は 400 年前の参勤交代をきっかけに国内で人が旅をすることから始まった。現在の日本では、民間の旅行代理店が観光業を支えている。

2. 観光業のおかげで政府の収入が増えただけでなく、雇用機会を増やし、国内のインフラ整備を進めた。海外から人が来ることは私たちのモチベーションになる。観光によって自国を有名にすることができる。

【感想】

国立大学の学生が社会的エリートであるからだと思うが、観光に皆関心を持っているのが印象的だった。現状として農業以外の産業が未発達なルワンダでは、海外から富を呼ぶ観光業をもっと伸ばしたいと考えるのは納得だ。

観光に関する政策の話を聞いていて、民間の力がまだまだ弱いと思った。例えば、キガリを歩いていてゴリラツアーの会社は一つしか見なかったのだが、たくさんのツアー会社を並立・競争させた方が観光は活発になるはずだ。

アフリカでは珍しいほど治安が良いルワンダは、多くの海外旅行客を呼べるはずだ。しかし、現状ではそのようなイメージの海外向けアピールが足りない。「ルワンダ＝ジェノサイド」が世界的な認識である以上、観光客は集まりにくいと思った。

2.How Rwandans can elaborate simple project

発表者：Pio NTWARI

報告：池上 純平

【日時】

2010 年 8 月 27 日 10:30~12:00

【参加者】

古屋亮輔、海原早紀、池上純平、井上真希、宮本寛紀、岩井天音

Maurice, Alfred, Olivier, Pio, Christelle, Vincent, Ephraim, Ndoonbe

【プレゼン要旨】

In Rwanda there are 2 territorial segments as a big gap between very rich people and very poor ones can mean it. **The poor ones are requested to join cooperatives where they can combine their forces and elaborate simple projects to develop and improve their way of living.** CAPMER, PPPMER are institutions launched to support them financially and in advice methods. This leads the whole country to MDGs and to vision 2020 that is its target. The other problem of them, it's their illiteracy. So they need an upper-hand to push them. Exactly **twa who are termed people who are lagging behind the development or who are left by the history, are the most affected by poverty as they are likely being neglected by others** and they consider themselves undermined. For all these reasons, small scale financial

institutions respond positively to finance their businesses with simplified conditions.(pio)

＊このプレゼンの数日前、私達はJRYCルワンダメンバーとともにトゥワの村を訪問した。「Simple Project」は、トゥワの例のように、急成長が進む一方でルワンダが抱える貧富の差の拡大や社会問題に対し、政府や私達がどういう政策・方針を選択したらよいかについて話し合うことを目的としていた。私達が実際に見たものを踏まえ、具体的なイメージを持って議論できるようにという狙いがあった。

【ディスカッション】

議題（Case Study）

1. もし、盲目かつ耳が聞こえなく、子供もいない女性の為に Simple Project を考えろと言われたら、どうするか。

2. Twa 村で作られていた伝統的なヒーター（調理器具）が、環境政策によって売れなくなり、2000 個売れ残ったままになってしまった。これで生計を立てている彼らには厳しい状況である。では、どうやって彼らの経済的状況を救うか？

ディスカッション過程

（グループ１より）

《議題１》

「盲目で耳が聞こえない人に何かできるか？」（井上）

「教育をすることはできる。彼らの為の学校や機械があれば、学んで将来何かできるだろう」（Christelle）

「支援組織を設立すれば、大学にも行けるのでは？」（井上）

「まず 2,3 人を支援して学ばせ、いい大学へ入学させれば、他の人達への励まし、頑張る動機になる」（Christelle）

「でも、その後はどうするのか？盲目者の為の教師になれるか？」（井上）

「でも、盲目で耳が聞こえないというのは、生徒たちの反応が受けられないから、コミュニケーションが難しいと思う。」（池上）

「例えば日本ではパン屋で働ける環境を整えてあげている例もある。また、ハンドクラフトで自立している人もいる。」（井上）

「日本では、全盲で全く耳が聞こえなくても大学教授をやっている人がいる。その人の隣には常に補助する女性がいて、指を使って言葉を伝達しているから、コミュニケーションが取れている。でも、これはシンプルプロジェクトというには難しいかもしれない。」（池上）

「ルワンダではそんなに支えられる人がいないということを忘れてはいけない。教育されていて、コミュニケーションができる人を外国から呼ぶのも、現実的じゃない。」（Vincent）

「点字を知ってる？盲目の人には勉強できるいい方法。」（井上）

「ああ、知ってる。でもそれが有効なのは盲目な人向けだ。耳が聞こえないのはまた違う問題だ。」（Vincent）

「では、どういう仕事が適していると思うか？」（井上）

「例えば、Radio Salus には全盲でも能力が高くて、働いている人もいる。（耳は聞こえる）。とにかく知性を使う職業だ。」（Vincent）

「もし才能があれば、それを示すべき。例えば作曲したりだとか。」(Christelle)
「やはり、シンプルプロジェクトとしては、点字を使った教育がまず優先されるべきだ。」(井上)

結論

グループ 1

まずその前に、これらの解決策は難しいと思う。不可能じゃないけど、決してシンプルプロジェクトじゃない。ただ、目的は支援して自立させること。第一に教育を受けさせることが重要であり、点字の普及が必要だろう。第二に、適切な職業に就くことだ。例えば知性を生かした仕事など。日本のパン屋の例のように、環境の整備も大事。

グループ 2

タイピングなど、聴覚・視覚を使わなくてもできる職業を見つける必要があるが、それでもコミュニケーションが取れないと困難である。もし両方の感覚を失う前に何らかの知識を得ていたら、自分でプロジェクトを立てて利益を得てから人を雇うという選択肢もできるかもしれない。

《議題 2 》

「政府の規制で本来の用途では市場で売れなくなってしまった。そして、借り入れているローンも返さなきゃいけないけど、売って得るはずの利益が無いから返せない。どうする？」(Christelle)
「彼らには牧場が無い。牧畜は無理だ」(Vincent,)
「トゥワの村に行って感じたが、彼らはヒーターを売るのが唯一の仕事だと思っているのでは。他の代替案を知らないだけじゃないか。」(井上)
「それはある。無知なだけ。農業や、ヘルパーみたいな仕事もある。」(Vincent)
「もし誰かが土地を与えるかシェアをして、耕作や農業をさせればそこから利益は得られる。」(Christelle)
「でもルワンダでは個人が土地を与えるのは難しい。組織が与えないと。だからやはりシェアがいい方法だ。できた作物もシェアできるし」(Vincent)
「ところでトゥワで大学に行く人の親は何か特別なことをしているの？それとも奨学金？」(井上)
「奨学金だ、政府が力を入れている」(Vincent)
「そういう人達がいい仕事について、村を資金的に助けたりしないのか？」(井上)
「しない。他の世界に憧れているから。」(Vincent)

結論

グループ 1

彼らに全く違う仕事、生計の立て方を教えてあげる必要がある。なぜなら、彼らは無知で今は知らないだけだから。もし助けたいなら彼らに農耕など知識を教えてあげて、土地も貸すべきだ。

(Q.トゥワ族に融資しているローンの問題、返済期限があるという問題はどうなる？ヒーターが 2000 個売れることを見込んで貸している資金の回収は？)

延期してあげて、新しいプロジェクトで収入が得られるまで支援してあげればいい。新しい農耕や作物栽培から収入が得ることができる。

グループ 2

伝統的陶器ならば、観光客に売るという

手段も考えられる。さらに、ストリートチルドレンを 200 人ほど雇って、1 人 10 個ずつ売ってもらえば、広範囲で売れるというメリットがあるうえに、子供にも利益があり、互いによいのではないか。

【感想】

このプレゼンは、私達に知識を与えることを目的としたものではなく、「問題意識」を喚起させて日本人・ルワンダ人も一緒になって問題に取り組ませようとしたものであり、その点で私達が訪問したばかりの twa 族の事例を持ってきた Pio（発表者）の優しさを感じた。

では実際にルワンダ社会の「負の側面」とも言える問題をどう扱っていくべきか。もちろん唯一の答えはない。だが、エリートと言える彼らでさえも、こういった問題から目を背けることはしていなかった。ルワンダが本当に成長していくためには、そして新たな火種を生み出さないためには、全体の成長が不可欠なことを彼らはよく理解しているように思えた。彼らはよく「努力しなければならない、一生懸命働かなければならない」という言葉を使う。恐らく、目指している社会の理想像がまだ遠いことを彼らは知っているのだろう。

コラム　停電の夜に…

８月 27 日。ディスカッションの終盤に停電し、カフェテリアでも停電し、いつもに増して暗い帰り道を通って私たち日本人メンバーは宿舎に戻った。

インフラ整備がまだ不完全なルワンダでは、しばしば停電が発生する。私のホームステイ先であったカリオペの家は一晩中停電していたし、カフェテリアでの停電では店員が慣れた様子で各テーブルに蝋燭を立て、私たちは束の間のキャンドルナイトを楽しんだ。電気がついた途端さっさと蝋燭を片付けてしまうのは少し残念であったが。

そんなわけで、宿舎に戻っても当然のごとく部屋の電気はつかない。ちなみにブタレで泊まっていたのは NUR のすぐ近くにある「Barthos」という高級ホテル・・・の本館から少し離れたリーズナブルな部屋。とはいえ、部屋にトイレ・シャワー備え付けのルワンダではかなり立派なところである。

さて、そんないい部屋でも真っ暗闇では仕方ない。しかしシャワーを浴びて寝るにはまだ早いし、暗闇の中で２人部屋にいても心細い。というわけで私たちは部屋の外、コンクリートの地べたに座りこんで暗闇トランプ大会を開催することにした。懐中電灯や携帯など持ちうる限りの照明器具を駆使して手元を照らしつつ、ナイロビ空港以来の七並べを楽しんだ。しばらくやっていると同じ場所に泊まっていた宗像氏も加わり、徐々に冷え込むブタレの夜空の下、２時間以上にわたり、人には言いたくないような罰ゲーム付きの暗闇トランプ大会は盛り上がった。

ブタレの宿舎・Barthos

日本ではなかなか遭遇できない停電。インフラ整備の重要性を感じつつも、そこには普段味わえない一風変わったわくわく感がある。ゆっくり流れるアフリカの時間の中、外に出て風の音を聴き、限られた明りに身を寄せながら暗闇の夜に笑いあうのもひとつのリフレッシュだな、などと考えていた。

（古屋）

3. ITORERO

発表者：NTAGANDA Alfred
報告：古屋 亮輔

【日時】
2010 年 8 月 27 日（木）15:00~16:00

【参加者】
古屋亮輔、海原早紀、池上純平、井上真希、宮本寛紀、岩井天音
Maurice, Alfred, Pio, Christelle, Eric, Noel, Eugene, Vincent, Liliane, Majyambere

【プレゼン要旨】

ITORERO とは、ルワンダ国民が互いに関係を深めたり、政策への共通理解を深めたりできるように政府が運営しているルワンダ独自の教育機関である。小学校、中等学校といった公教育の機関とは異なり、文化や国家の発展についての教育に特化している。この制度自体はルワンダの王国時代から存在し、異なる地域に住む人を集め、どのように国を愛するか、国の発展のためにどう貢献できるか、などを教える機関だった。近代化に伴い内容を改めた上で、カガメ大統領が ITORERO を復活させた。生徒は INTORE と呼ばれる。

【プレゼン詳細】

プレゼンの展開

（発表者・Alfred のプレゼンより抜粋）

- 伝統的な ITORERO では歴史、哲学、社会学、文学、倫理、論理学、政治、軍事、法律、愛国心、国内関係、国際関係も教えられていた。現在はグッドガバナンス、国家の調和、正義、和解、経済発展といった国に影響を与える社会問題について話し合う場となることを期待されている。
- 3 つのグループに分けて実施されている。1 つ目は若者、女性、地方の弁護士、オピニオンリーダー、その他セル（ルワンダ最少の行政区分、村）レベルでの責任ある人物が参加する。2 つ目は小学校・中等学校の教師、3 つ目はセクター(2 番目に小さい行政区分)の長である。現在はセルとセクターのレベルでのみ実施されているが、すぐに国家レベルで実施されるようになるだろう。
- カガメは議会で正式に ITORERO を立ち上げ、同月、地方のリーダーを集めたオリエンテーションが行われた。2007 年 12 月、国家対話会議(National Dialogue Council)において、すべてのルワンダ国民が ITORERO に参加するという決定がなされた。

質疑応答

Q. 正義やリーダーシップといった抽象的なテーマが多いが、教科書やカリキュラムはあるのか？（古屋）
A. すべてのグループがプログラムをこなせるような教科書やガイドラインがある。教育が不十分な地方出身者などにも対応できるようそれぞれのレベルに合ったガイドラインがある。(Alfred)

Q. そのガイドラインはいつ作られたのか？（海原）
A. ITORERO は昔からある制度だが、すべてのカリキュラムが改正されたわけではな

い。昔からの価値観の中には現代のグッドガバナンスや経済発展に役立つものもあるからだ。そのため、ガイドラインが作られたのは政府による制度化の時点（2007 月 11 月）だが、後世に伝えるべき価値観は新しいガイドラインにも取り入れられている。(Calliope)

Q. 使われる教科書は他の教育機関と異なるものなのか？（古屋）
A. もちろん違う。特に文化に焦点が当てられており、良い点には従い、悪い点は切り捨てながら文化を国の発展にどう役立てるかが示されている。その中で何が良い文化なのか何が悪い文化なのか考える機会があるし、また外国の文化もルワンダの発展に有益なものは取り入れられている。(Alfred)

Q. 生徒はどの時期に ITORERO に行くのか？（古屋）
A. ITORERO は国民に対して自分を教育する機会を与えるものだ。どうやって社会に貢献するか、文化的価値は何か、良いマナー・悪いマナーとは何か、ということを自ら考える場所である。初等教育のように一律に教育するものではなく、学ぶ人のレベルや都合に応じて実施される。(Calliope)

Q. ITORERO において教師はどんな役割を担うのか？（井上）
A. ITORERO の教師は文化をより深く知っている必要があるため、年長者がなることが多い。例えば父親が私より国の文化をよく知っているように。年長者が、これは善いことだとかやるべきでないとかを教える。ワークショップやスポーツを通じて人との関係を築くこともある。(Alfred)

Q. ルワンダ人「全員」が ITORERO に行くのか？（海原）
A. 政府は全員が参加することを想定しているが、まだその過程にあるため全員が参加しているとは言えない。改めて文化を学ぶことでジェノサイド以降の国民の沈んだ感情をリフレッシュさせようというのが政府のやろうとしていることだ。(Vincent)

Q. プレゼンの中で、ITORERO が解決すべきルワンダ社会のタブーとして“Artificial Harmony”というのを挙げていたが、普段それを感じることがあるのか？（岩井）
A. 昔はあったが、今はない。個人的な意見だが、他のカテゴリーの人間に対する無関心という問題があったと思う。紛争を避けるには、隣人を始めどんな人とでも協力しなければいけない。(Alfred)

Q. 日本人に対して訊きたいのだが、日本にも同じような制度はあるか？なければ国を発展させるためにどんな制度を用いているのか？（Alfred）
A. 似た制度はないと思う。政府が運営し、国民全員が参加するような機関は学校以外にない。（宮本）
　たぶん学校で国の発展について勉強するし、小学校では道徳の授業がある。ただそれは形式ばった授業だ。（海原）

Q. 道徳の授業に試験はあるのか?(Vincent)
A. ない。主に生徒に話し合いをさせる。宗教系の私立学校ではその宗教に基づいた道徳教育がされる。しかし学校で愛国心を教えることはない。（井上）

Q. ではどうやって国の文化を学ぶのか？（Alfred）

A. 日本の歴史は歴史の授業で学ぶし、日本の音楽は音楽の授業で学ぶ。小学校で日本史を学び、中学校から世界史を学ぶ。しかしひとつ言えるのは日本の文化が若者に十分に伝わっていないという点で、西洋やアメリカの文化ばかりを持ちあげ、日本固有の文化は失われつつあるように思う。例えば私の祖母は着物の着方を知っているけど、私は知らない。（海原）

Q. どうやって文化を教えるのか？（宮本）
A. ワークショップで教える。例えば紛争が起きた時に文化を利用して解決することができないか考える。(Alfred)

【感想】

ITORERO というユニークな教育機関がルワンダにあるということは今回初めて知った。Gacaca 裁判しかり、ルワンダ政府は昔から利用されてきた伝統的な制度を上手く現代版にアレンジし、役立てていると思う。正義、リーダーシップ、グッドガバナンスといったテーマに関する理解は人間社会において不可欠であるが、客観的な線引きの難しいこれらのテーマは一般の教育機関で教えられることが少ない。日本の義務教育でこれらについて実のある学習ができることはないだろう。少なくとも私は高校までに学んだ記憶がない。また、文化を次の世代に伝えるという点でもこのような機関があることは非常に意義のあることだと思う。国が発展して生活水準が向上したりグローバル化が進むことになれば、国民の生活様式や価値観に変化が生じるのは当然で、昔からの文化への興味は薄れていってしまう。そこまで見越して ITORERO をスタートしたのであれば、ルワンダ政府の先見性は素晴らしいと思う。

ディスカッションに参加した大学生たちもほとんどがすでに ITORERO に参加したということで、この制度の意味を深く理解していた。まだ小さな行政レベルでしか行われていないため目に見える成果はないのだろうが、ここでリーダーシップや文化の価値を学んだ若者が 10 年後、20 年後にルワンダを動かし、精神的な豊かさと経済発展を両立させた国作りを目指すことになるのだろう。私たち日本人ももう一度日本文化の価値を考えてみてはどうだろうか。

（古屋）

4, Green Revolution for Rwanda

発表者：UWIMANA Vincent
報告：海原 早紀

【日時】
2010 年 8 月 30 日（月）11:00~12:00

【参加者】
池上純平、井上真希、岩井天音、海原早紀、古屋亮輔、宮本寛紀
Eugene, Maurice, Norbert, Olivier, Alfred, Christelle, Alain, Eric, Noel

【プレゼン要旨】

国民の 80%が農業従事者であるルワンダでは、グリーンレボリューションを達成して生産量を増やすことで国を豊かにすることができる。自給自足農業から商品作物栽培への移行、農業以外の産業の育成、栽培作物の多様化など様々な目標が掲げられているが。しかし、元海外難民の指導者の農村への不十分な理解や、彼らの掲げる国家政策には様々な問題がある。

【プレゼン詳細】
論文タイトル：
A Green Revolution for Rwanda? The Political Economy of Poverty and Agrarian Change
（ルワンダのグリーンレボリューション～貧困に関する政治経済と農業変革～）

動機

アジア・ラテンアメリカでは 1965 年以降グリーンレボリューションに成功しているが、サブサハラアフリカでは経験した国は無い。2008 World Development Report によると、アフリカでは小規模農家に政策を集中させた方がグリーンレボリューションの可能性が高いとされている。政府主導で農業・土地改革を進めるルワンダにとって、このような指摘は注目するべきである。そして、政府は「ルワンダのグリーンレボリューション」というアイディアを国際的に普及させ、ドナーへアピールしようとしている。

展開

１．ルワンダにおける政治と経済：権力と富の分配

エリート・農民の富の差は、長年続くツチ・フツの対立構造だけでなく、権力者が出身地を優遇する地縁の問題、社会的地位、職種、性別などの様々なアイデンティティと関連している。

富の配分は都市部と農村部で大きく違っている。それは現在のルワンダのエリートが農村社会へ十分な理解を示していないためだ。ルワンダでの経済的・政治的エリートのほとんどが元難民として周辺諸国で生まれたツチであるため、ルワンダの伝統的な農業技術、環境や農村社会のルールがわかっていない。今までの政府の政策も都市部開発が中心で、農村は見捨てられてきたという見方もできる。

２．「新」ルワンダエリートの政策

ルワンダ政府が 2001 年～2006 年に打ち出した PRSP(Poverty Reduction Strategy Papers)には、貧困人口の減少を期待より実現できなかったとの批判が集中する。実際、

貧困ラインはこの期間の間に 60.3%か56.8%にしか減少しなかった。その反省から 2008 年～2012 年の政策であるEDPRS(Economic Development and Poverty Reduction Strategy)では、農村の貧困解決に焦点を当てている。

また、従来の自給自足型農業から、商品作物への移行も必要であるとされている。しかし、農民たちが伝統的な農業のスタイルから移行することは容易でなく、これを「農民の考え方が悪い」と理由付けするルワンダ政府には、この転換に関する政策が不十分である。

３．ルワンダの経済発展の可能性

PRSP では ICT（IT 産業）の発展による、サービス産業への移行を目標としている。

しかし、既存の基盤である農業から富を生み出す政策の充実も必須である。技術の近代化、生産効率の改善や市場での流通を実現する。従来のコーヒー・紅茶に依存せず、マカダミア、パチョリ（ハーブの一種）、モリンガ（葉を食用にしたり、オイルから石鹸が作れる）、バニラなどの作物生産の生産拡大を民間セクターに期待する。

しかし、プランテーションのような大規模生産のための土地統合が難しいため、既存の小規模農家の生産拡大・競争を強化するべきという議論もある。

また、ルワンダでは人口が急速に増えていて、近い将来には今の様に農業は続けられなくなる。そこで、他の産業を発展させることで、2020 年までに農業従事人口を現在の 80%から 50%に減らすとしている。他の産業を発展させるためには何よりも民間セクターの成長と、海外からの投資を呼び込むことが必須だ。

農村社会の「強化」～法律と厳しい目標～

ルワンダ政府の農村改革政策は、不届きな点が多い。例えば「イミドゥグドゥ政策」では、帰国した移民のツチを集団生活させることで教育やインフラを効率的に提供、更にはそれ以外の土地で大規模な農場栽培をすることを目的としている。しかし近距離でも土壌の質が細かく違ってくるルワンダの土地では、大きく土地をくくって農地としてもモノクロッピングはうまくいかない。また気候が急に変化するルワンダでは、一つの作物だけを栽培するリスクは高い。

また、農作物を市場に流通させマーケット経済を活発化させるにも、現在の農民には商売をする意欲も能力もない。

結論

グリーンレボリューションが実現されるのは、以上のような政治や経済政策の問題が解決されなければならない。

【感想】

現在の農家は自給自足で、生活に必要な種類を全部自分で栽培しているからほとんど売り買いをする必要がない。（海外輸出向けのコーヒー農家をのぞく）しかもルワンダの土地は貧しく、雨量は十分だが斜面での灌漑は難しくそれを設備するお金もない。これでは誰の生活も向上するはずがない。

そこで政府は土地を統合して効率化を図り、作物を市場に流通させ、競争も促し民間セクターを強化する、という市場主義的な政策を始めようとしている。

一見正しいように思えるが、農民はそのやり方を好まない。モーリスとバスに乗っていて、窓の外に見える農家の人々を指差して言われた。「彼らが、代々先祖が守って

きた土地を政府や会社に売りたいと思うか？」農学部で勉強するモーリスは推進されている大規模農園の方法ではなく、現状の個人が所有する小さな土地でいかに生産量を増やすか、研究しているそうだ。

合理的な近代化を推し進める政府と伝統を重んじる農民の対立構造。従来の手法を続けたところでルワンダの貧困は改善されないが、嫌がる国民から土地を取り上げることが果たして正しいのだろうか。また、理解・支持を得ていない政策に農民は従うのだろうか。そして、政府主導トップダウンなやり方でルワンダは大丈夫なのか。

「国家の発展」のあり方という根本的な問題について考えさせられた議題だった。

コラム ルワンダ・トイレ事情　～女子寮もりもり事件～

ああ日本のトイレはなんて綺麗なんだろう……。日本に帰った私が、一番初めに感じたことであった。

そもそも、日本のトイレが綺麗すぎるのだ。そんなことは分かっている。世界のトイレ事情は経験済だ。経由地のドーハ国際空港ですらトイレットペーパーはなかったし、水の流れはいまひとつであった。ルワンダのトイレだって、ただの穴しかない・鍵が閉まらない・水が流れない……そんなのは各地を訪問する中で当たり前になっていった。トイレごときで騒いでいるようではルワンダではやっていられない。

そう、思っていたのだ。覚悟はできていたつもりだった。日本人もやればできると思っていた。あのルワンダ国立大学のトイレを経験するまでは……。

まずルワンダのトイレ事情について軽く触れたい。ルワンダのトイレは水洗と汲み取り式の二つに分かれる。両者の比率は2：8といったところであろうか。主に街か農村かで分かれる訳だが。ただし、日本の水洗トイレとは大きく異なる点がある。トイレットペーパーを水に流してはいけない。使用済みの紙はゴミ箱に捨てる。水圧が弱いので紙を流すとトイレが詰まる可能性が大いにあるからだ。一方、汲み取り式は、和式トイレの形に似ており、農村地帯であればこれが一般的であろう。穴は小さいことが多いので狙いを定めるのが難しい。ちなみに新しい家を建てる際には、穴を 20 メートルほど掘らなければならないので、トイレを掘る作業が一番大変らしい。

さて、ここはルワンダで唯一の国立大学。簡素な作りでありながら、のどかで気持ちの良いキャンパス。綺麗とまではいかなくても、それなりのトイレを期待していた。ところが、まずメインの建物にトイレがなかった。歩くこと3分。「ここが女子トイレよ」と学生に案内してもらった先は、女子寮の近くにあるシャワールームとトイレが一体となった空間だった。トイレとシャワーが通路を挟んで各8つ。ふむふむ、ここがこれから 5 日間過ごす大学のトイレね…と足を踏み入れて、比較的綺麗なトイレをさがす。あーちょっとこれはうーん無理かな…隣はどうかな…え、もしかして全部このクォリティなの…っ！

残念ながら、このトイレの詳細をここに記すことは出来ない。理由はお察しの通り、綺麗な言葉では言い表せられないからだ。コラムのタイトルからなんとなく想像してほしい。

この状況のすべての原因は、和式の水洗トイレのような形をしていながら「水が流れなかった」ことにある。つまり完全な汲み取り式ではないために穴が大きくなく、更には水が流れないのだ。どうやら水道管が壊れているらしい。一日に数回、清掃員の人がバケツから水を流すだけのようであった。

トイレの臭いや設備には文句をつける気はない。何故なら冒頭でも触れたように、日本のトイレを基準に考えては世界では通用しないからだ。でも、でも…、大学のあのトイレは視覚的に私たちの想像をはるかに超えていた。あのトイレのことは良くも悪くも一生忘れないだろう。ルワンダでの貴重な思い出がまた一つ増えた大学女子寮での出来事であった。

（岩井）

ジェネラルディスカッション

1. Love and Jealousy

発表者：海原 早紀

【日時】

2010 年 8 月 26 日（水） 16:00~17:30

【参加者】

古屋亮輔、海原早紀、池上純平、井上真希、宮本寛紀、岩井天音

Maurice, Alfred, Olivier, Pie, Eric, Christelle, Majyambere, Liliane, Adolph

【プレゼン要旨】

今回扱う「嫉妬」は、「あなたが好意を寄せる人が別の人に好意を示しているのを見て感じる悲しさみや怒り」と定義付けた。

【プレゼン詳細】

動機

一人ひとりで価値観が違い、個人の意見を自由にぶつけ合えるような議論をしたくて、恋愛の話題を取り上げた。また、恋愛という個人的な感情が入るテーマだからこそ、日本人・ルワンダ人関係なく意見が分かれて、日本対ルワンダの対立構造がなくなるディスカッションとなることを予想した。

普段とは一味違ったテーマを議論することで、国籍に関係なく同じ意見の人に親近感を抱くこと。そして積極的に意見することで、お互いの理解を深めるきかっけにすることが目的だ。

【ディスカッション】

議題

あなたはどの以下のレベルで嫉妬を感じますか？

（1） 恋人が異性と楽しそうに会話しているとき。

（2） 恋人が異性と 2 人で食事をしているとき。

（3） 恋人が異性と手をつないでいるとき。

（4） 恋人が異性と旅行に行ったとき。（宿泊含む）

グループに分かれて、それを選んだ理由・なぜそれ以下のレベルは容認できるのか話し合い、グループごとに発表。他のグループも賛成・反対意見を述べなさい。

ディスカッション過程

レベル（1） （ルワンダ・男 2 人、日本・男 1 人）

＜発表者（ルワンダ・男＞

私は恋人が他の人と喋っているのを見たら、よく思わない。彼女が何を話しているのか、気になる。その子がジェスチャーやサインをしているのも嫌。だから私も恋人以外の人にそんなことはしない。

＜反対意見（ルワンダ・女）＞

あなたは異性の友達と楽しくお喋りしないのですか。

＜発表者（ルワンダ・男）＞

「楽しく」っていってもいろいろある。 例えば、お尻をぽんぽんしながら喋っていたらどう思う？人間というのは弱いもので、

彼女は考えを変えるかもしれない。
＜反対意見（ルワンダ・女）＞
「楽しく」の区別をすることはできない。喋っているときにいつ恋が始まるかわからないから。
＜反対意見（ルワンダ・男）＞
神父さんが、楽しくあなたの恋人と話すかもしれない。
＜発表者（ルワンダ・男）＞
神父だって神ではない。人間は皆弱いにだから危険が付きまとう。
＜賛成意見（日本・男）＞
楽しく会話するのはしょうがない。でもそれを見て、彼女は惹かれているのか？と考えてしまうその感情が嫉妬でしょう。
＜発表者（ルワンダ）＞
私の結論は、このような情況で嫉妬を感じないのであれば、あなたは恋人を本当に愛していない。

レベル（２）　（ルワンダ・男１人、日本・女１人）
＜発表者（日本・女）＞
2 人で食事をするということには、いろんな危険がある。例えば、アイコンタクトや、お互いを気遣う場面が多い。日本人の私にとっては、2 人で食事をすることはデートを意味する。しかし、自分が他の異性と食事することは悪いと思わない。私はその彼が友達だとわきまえて行動するから。
＜賛成意見（ルワンダ・女）＞
女の子は危険。女の子は男の子を選ぶパワー、誘惑するパワーがあるから、彼氏が他の女の子と食事するのは嫌。だから、ずるいけど自分は良くても、彼はだめ。
＜発表者（日本・女）＞
レベル１は人間として当たり前の行為だから、大丈夫。
＜反対意見（ルワンダ・男）＞
もし、内緒話をしているように、楽しそうに話していても、大丈夫？
＜発表者（日本・女）＞
それは嫌かもしれない。情況による。

レベル（３）　（ルワンダ・男１人、日本・男２人、日本・女１人）
＜発表者（日本・女）＞
レベル１、２は人間のコミュニケーションとして当然だから大丈夫。
＜発表者（ルワンダ・男）＞
恋人が他の人に触れているのはみたくないし、と手をつないでいたら嫌。だから、私も恋人以外の人とはつながない。
＜反対意見（ルワンダ・女）＞
あなたが、恋人以外の女の子とも手をつないでいるのを見ています。不公平です。
＜発表者（ルワンダ・男）＞
ようするに、自分は大丈夫だけど、恋人にはしてほしくない。
＜発表者（日本・女）＞
日本では、手をつなぐことの意味が違う。例えばルワンダでは道を渡るときに手をつなぐのを見る。でも、日本で異性同士が手をつないでいたら、それは付き合っているということ。

レベル４　（ルワンダ男 1 人、ルワンダ女 1 人）
＜発表者（ルワンダ・男）＞
旅行に行くなら自分に相談してほしい。夜・暗闇というのは「よくないこと」のイメージだ。距離が近いほど、お互い惹かれ

るかもしれない。それで 2 人の恋愛の終わりかもしれない。恋愛とは「笑顔で始まり、愛で成長し、涙で終わる。」
他のレベルがなぜいいのか。1 に関しては、世の中にはお喋りな人がいるからしょうがない。食事は、だれかが奢ってくれたら仕方がない。そして、手をつなぐことに何の問題があるかわからない。ハグだって、人間なのだから普通だ。
＜賛成者（ルワンダ・女）＞
（2 人で食事は嫌だけど）手をつなぐことの、何がいけない？

１～４何をされても嫉妬を感じない　（ルワンダ・男１人、ルワンダ・女１人）
＜発表者（ルワンダ・女）＞
私は実際、全てにおいて嫉妬を感じているのかもしれない。でも１・２に関してはその理由がわかれば大丈夫。４は、嫌だけれども例えば仕事上の事情があったりしたら仕方ない。
＜発表者（ルワンダ・男）＞
私は愛している人には自由でいてほしい。恋人は自分の行動の意味を考えているはずだから、私が嫌だと思うことはしない。嫉妬心は信頼関係に反している。誰かに獲られると恐れている。もし世界の人が皆レベル１で嫉妬を覚えていたら、世界は平和になれない。そこら中が争いだらけだ。大切なのはあなたの恋人の心がどうであるかで、愛しているなら良い振る舞いしかしないだろう。

【感想】
予想通り、大いに盛り上がった。アカデミックな話題だと発表時に声が小さくなりがちなルワンダ学生も、今回は大きな声で議論できた。グループ内で結束感も生まれ、一日目にしてお互いに親近感が沸いたと思う。両国の学生とも、たまに恥ずかしがって笑いながらディスカッションしていたのが印象的だった。
また、予想通りに、ルワンダ・日本関係なくばらばらにグループに分かれたので、「文化の違い」以前に「個人の価値観の違い」を認識できる機会になった。
私はファシリテーターとして客観的に全体の意見を聞いていて、レベル１～３においては誰かが必ず「自分はやってもいいけど、恋人にされたら嫌」という意見が、最初は口にしなくても後から後から出てきたのが印象的だった。人間は皆恋愛に関しては利己的であると思い知らされた。
しかし、最後の 2 人の「信頼の大切さ」の意見を聞いて皆拍手をしてしまった。議論する時間はなかったが、どこまで相手を「信頼」できるのか、皆考えさせられた瞬間だったと思う。「信頼」「嫉妬」という一見逆の気持ちが交錯する人間の難しい部分について、もっと議論したいと思った。
そして今年は初の試みとしてジェネラルディスカッションを取り入れたのだが、その中で最もアカデミックとかけ離れた話題をいかに秩序正しく議論展開させるのか、頭をひねった。「意見が多く出て盛り上がるディスカッション」としては大成功だったが、勝手に盛り上がって同じことを繰り返さないよう、ファシリテーターの能力が問われるテーマだった。

コラム 「友達なら手をつなぎなさい」

クリステラの言葉です。学生会議ではズバズバ積極的に意見を述べる彼女も、普段はすごく優しくて、夜道では私とはよく手を繋いでいました。

そんな彼女がどうしても納得できない日本人の文化が「異性の友達とは手を繋がない」ことでした。ジェネラルディスカッションで、恋人が他の異性と手をつなぐのを許せるか？という質問についてほとんどのルワンダ人が「問題ない」と答えたのに、日本人は「全員ダメ！」というところが理解できなかったようで、会議の後にもいつまでも「なんで？なんで？」って話していました。

「異性だからって、仲がいいなら手を繋げばいいじゃない？」というクリステラに、私は「それは付き合ってる証拠なの！」と繰り返すことしかできませんでした。そしたら、「じゃあ、彼氏と手を繋ぐよね。それで別れたらどうするの？」と聞かれ。「もちろんもう好きじゃないから繋がない。」と答えると、クリステラは唖然。「日本人って・・！！」

その後も、私たち 2 人の前を歩く日本人男性メンバーの手をとって、あたしと手をつながせようとするも、当然私たちは拒否。まだ納得いかない彼女に、私は、クリステラ自信が日本人男性メンバーの手をつないでみるのをすすめてみました。

「よし、わたしは絶対つないでみせる。」と言って、3 人とも試してみました。さすがに、相手がルワンダ人の女の子だと、3 人ともつなぐんですね。でも、一人は明らかに照れてニコニコしてるし、残りの 2 人は照れ隠しから手をルンルン振るので、「まじめに繋いで！」とクリステラに怒られていました。

おしゃれなクリステラのサングラスをお借りして一枚

最終的に言われたのは「わかった。あなたたち日本人はお互いのこと本当に思ってないのね。」（You Japanese don’t love each other.）そこまで言われてしまうと悲しくなるので「別にそういう意味じゃなくて、単純に文化の違いだよ。」と説明して、もし日本に来たら街中の男性と手をつないでみることをおすすめしました。

「よし、任せて！」と言うクリステラが来日するのが楽しみでならないです。

（海原）

2. Hero

発表者：Alain MWISENEZA
報告：宮本 寛紀

【日時】
2010 年 8 月 27 日（金）14:00~15:00

【参加者】
池上純平、井上真希、岩井天音
海原早紀、宮本寛紀
Alain, Alfred, Christelle, Pie, Calliope, Eugene, Majyambere

【プレゼン要旨】

HERO とはどのような人物で、どのような性格を持ち、どのように社会に影響を与えているか。

【プレゼン詳細】

プレゼンの展開

具体例として、マーティン・ルーサー・キングやマンデラなどの世界的に有名な偉人を紹介した後、ルワンダの社会に貢献した Fread Gisa Rwigema という人を紹介し、HERO とは、どのような人のことをいうのかを紹介。

質疑応答

《プレゼン直後の質問》

Q. 例として挙がっていたルワンダでの HERO（Rwigema）はいつ頃の話？（海原）
A. 1957 年に生まれた人で、1990 年に亡くなりました。（Alain）

Q. HERO と呼ばれる人は、亡くなる前にも呼ばれますか？（Christelle）
A. はい。ネルソン・マンデラも生きているときから HERO とされていましたし、オバマ大統領もそうではないか。（Alain）

《ディスカッションやリアクションペーパーより》

Q. どのようにその人物が HERO であると認めるの？（Christelle）
A. HERO と呼ばれるようになるには、何か一つの出来事だけでなく、その人物の性格なども関連していると思う。（Alfred）

Q. 日本人の人たちは HERO についてどう思う？（Calliope）
A. 私の意見は変なのかもしれないけど、私が HERO と聞くと、スーパーマンのようなものが思い浮かびます。（海原）

一般的に HERO と呼ばれる人は、革命などを起こし社会に影響を与えた人なのかもしれないけど、私にとっての HERO はオーストラリア人の画家クリムトである。つまり、私にとっての HERO は私が尊敬できる人だと思う。（井上）

Q. どのような手段で HERO になれると思いますか？（Alain）
A. 私の意見としては、HERO と呼ばれるようになった人々は、元々そのように呼ばれることを望んでいたわけではないと思う。（宮本）

Q. 日本における HERO について教えて欲しい。（Alain）
A. 私は、白洲次郎という人物じゃないだろうか。彼は、終戦後の日本で唯一、アメリカに対して従順しないと言い張った人であるから。（池上）

私たち日本人にとって、この人が HERO だとすべての人々が認めるような人物はいないと思う。（海原）

たとえば、南アフリカでは黒人が差別されていてそれに取り組んだネルソン・マン

デラはすべての国民が認める HERO になり得たかもしれないが、日本において、そのような状況は無かった。（井上）

私が思う HERO は children of nyange だと思う。なぜなら、ジェノサイドの時に学校に民兵が来て「ツチとフツに別れろ」と子どもたちに言ったが、子どもたちはずっと立ち止り、結局全員殺されてしまったから。（Majyambere）

※children of nyange については、『壁を越えて わたしたちみんなルワンダ人』という短編映画で知ることができる。

【感想】

このディスカッションは、残念ながら、あまり白熱しなかったように思える。ディスカッションの中でもあったが、私は HERO と聞くと、何か実在しない架空の人物を思い浮かべてしまう。それは、HERO を“ヒーロー”という一つのキャラクターとして捉えていたからである。今回のディスカッションでの HERO は、きっと“偉人”などという解釈が正しかったと思う。日本の HERO は誰なのかと聞かれ、思い浮かばなかったのもこの解釈の相違があったからではないだろうか。

だが、トピックとしては、面白かった。HERO になるにはどうしたらいいかなど考えたこともなかったし、一人一人にそれぞれの HERO がいるという考え方も共感できた。また、最後のジェノサイド時の子どもの話は特に印象的であった。

これを機会に、日本の HERO は一体誰なのかを考えるきっかけにもなった。

3. Peace

発表者: 井上 真希、Pio

【日時】

2010 年 8 月 27 日（金）16:00~17:30

【参加者】

池上純平、井上真希、岩井天音
海原早紀、宮本寛紀
Alfred, Christelle, Eric, Noel, Eugene
Majyambere, Pio, Vincent

【プレゼン要旨】

沖縄平和協力センター(OPAC)で実際に使われているワークショップをルワンダの虐殺時の状況に暗示させるような設定にし、「風船ゲーム」を行った。「風船をめぐる対立」という身近なら例から、紛争の発生過程、紛争から協力への交渉の困難性を体感した。その上で、平和構築において必要な要素を話し合う機会を設けた。

【ワークショップ詳細】

テーマを選んだ動機

虐殺後の平和構築活動が盛んなルワンダの学生と共に、改めて紛争は何故起きるか、平和構築はどうすれば可能か議論し、考えたかったから。

ワークショップの展開

材料:風船50個、テリトリーの目印3箇所、ファシリテーター(私)、裏メッセンジャー（Pio）、参加者 24 名
場所：野外、教室

① 参加者をA・B・Cの三つのグループに分ける。
A グループ：12 人
B グループ：10 人
C グループ：2 人
② 50 個の風船を三つのグループに分ける。（配当比率はA＞B＞C）
③グループごとに裏メッセンジャーから任務が伝えられる。他のグループにはその任務は知られない。
A：「Bの風船を奪え」
B：「Aの風船を奪え」
C：「Aと自身のグループの風船を守れ。」
③ ファシリテーターにより、全てのグループに指示が与えられる。
「できるだけ多くの風船を保持してください。一番多く風船を持っているグループが他の二つのグループを支配することができます。ただし、風船を割ることは禁止です。」
④ 任務、指示に従って第一ラウンド開始。（5分間）
⑤ 一時休止。今の時点でそれぞれのグループがいくつの風船を持っているか確認する。その間に、裏ファシリテーターがAグループだけに「Bグループの風船を割ってもいい。」と伝える。
⑥ 第二ラウンド開始。（5分間）
風船を割っていく A グループとそれを許すファシリテーターにB･Cグループは混乱する。
⑦ ゲーム終了。
各グループいくつの風船ととったか確認。予想通り A グループが多くの風船を獲得したので、「Aグループがこれからあなた達を支配します。」とB・Cグループに伝える。それぞれのグループに現在の心境を聞いてみる。
A：「ゲームに勝てて最高の気分。」
B：「A グループは風船を割ってはいけない、というルールを破ってずるい。この結果に納得しない。」
C グループ：「もともと二人しかメンバーがいなかったし、最初から諦めていた。」
⑧ A と B が言い争う中、ファシリテーターがこの風船ゲームの真の主旨を説明。（ワークショップに込めたメッセージ参照）
⑨ 教室に戻りディスカッション

ワークショップに込めたメッセージ

一見、シンプルなこの風船ゲームは、実はいくつかルワンダの虐殺時の状況を示唆させる暗示があった。まず、一番メンバーの人数が多いAはフツ族、その次にメンバーが多いBはトゥチ族、圧倒的に少数だったC はトゥワ族とした。それぞれのグループに不均等に分配された風船は資源や金銭、権力、人間であるため、それらを一番多く集めたグループが支配権を持つことができる、という設定をつくった。

「風船を割る」という行為は「人を殺す」という意味にも解釈できる。途中でAだけに風船を割ってもいいという指示を暗黙に行った裏ファシリテーターは当時、虐殺を煽動した政府とした。

一度紛争が起こってしまうと、平和な状態を取り戻すのは難しい。しかし、紛争当事者がお互いに我慢強く、協力し合えば、そ

れは実際に可能である。果たして具体的にどのように対立した集団を和解へと導けるだろうか？

【ディスカッションテーマ】

私達は風船ゲームから何を学んだのか？また、実際の紛争状態から和解を促進させるためには何が必要か？

【ディスカッションテーマに対する意見】

- 決して安易なことではないが、平和を構築するには対立状態にある当事者同士が許し合うことが不可欠である。
- 紛争後は、まず奪い取ったものを返して再び分配すべき。
- 紛争が始まると、当事者は自身の利害関係のことにしか頭になくなってしまい、冷静でいられなくなる。
- 割われた風船、つまり紛争で犠牲になった人々はもう帰ってこない。だから彼らの代償をどうするのか問題になるだろう。
- 両者が話し合える場を作る必要がある。

感想

今回、JRYC の試みとして初めてルワンダ人学生と協力して一つのプレゼンテーションを作った。元々、私一人が「平和」を題材としてプレゼンをする予定だったのだが、NUR に到着して仲良くなった Pio はとてもやる気のある青年だったので、軽くお願いしてみた所、本当に協力してくれることになった。事前に私は上杉 勇士著の「ワークショップで学ぶ　紛争解決と平和構築」の中のひとつの「風船ゲーム」を題材として平和と紛争について考えよう、と思っていたので、それをベースに試行錯誤した。昼食中などを使って議論し、結果 Pio が提案したルワンダの虐殺時の状況を暗示させる案を採用することになった。

正直、ワークショップの前、私は果たして大学生が風船を奪い合う、少し子ども染みたゲームをして意味があるのだろうか？と少し心配だった。しかし、実際始まってみると、みんな本気顔で必死の風船奪い合いとなり、非常に驚いた。中でも、A グループの Alfred と B グループの Christelle の間の風船の取り合いはとりわけ激しく、終わった後も本当に喧嘩状態になってしまっていた。だから今回のワークショップの主旨である、紛争が発生する過程から解決に至るまでの流れを体感することは達成できた。ディスカッションも皆疲れているのにも関わらず、いろいろな意見が出てよかった。ちなみに、Alfred と Chiristelle は最後にはちゃんと仲直りしていました！

4. Art

発表者：Calliope AKINTIJE SIMBA
報告：岩井 天音、Calliope

【日時】
2010 年 8 月 29 日（日） 17:00~18:00

【参加者】
古屋亮輔、海原早紀、池上純平、井上真希、宮本寛紀、岩井天音、宗像淳史、SUGEE Maurice, Calliope, Pio, Noel, Ephraim, Alfred, Olivier, Majyambere, Eric, Sylver, Nadine

【プレゼン要旨】

アートとはダンスや絵画などを示すだけではなく、すべてに伴う。あらゆる人間の行動には“アート”（芸術性）が見られる。それではアートを国の発展に役立てるにはどうしたらいいのか、学生会議でディスカッションをする。

【プレゼン詳細】

テーマを選んだ動機

毎年学生会議のプレゼンテーションは、政治・経済・社会問題などのトピックが集中していたが、少し趣向を変えてアートの話をすることで、新たな発見があると思ったから。

プレゼンの展開

※スライドを使用せず、ファシリテーターのカリオペが参加者に質問を投げかける形で議論を進める。（太字がカリオペの発言）

1. アートの定義

まず皆に問いかけたいのはアートとは何か？ということである。

「人々を惹きつけるもの」(Pio)
「何かを形作る行為だと思う。人々を幸せにすることが出来ると思う。」(Maurice)
「私はアートとは個人の感情の表現だと思うので、例えばそのアーティストと私の価値観が合わなかった時やアーティストが訴えるメッセージによっては、アートによって悲しくなることもあるのではないか。」（海原）
「何か重要なことを形にするのがアートだと思う。」(Ephraim)
「自然もアートの一種だと思う。自然を見ていると何かしらの印象を受ける。例えば美しい山の形を見れば、それはアートだと私は感じる。」（井上）

マキ（井上）が言ったことはアートの種類の一つだと言える。それでは次に進もう。

このプレゼンではアート（芸術）を、「他人と共有したいという想いの元に生まれる、美的な事象・環境・経験の創作物に見られる想像力と技術」と定義したいと思う。ただ単に絵や映画などの芸術作品を指す訳ではない。アートは先史時代から現代まで人間にしか見られない行為であった。

2. アートの種類

私は大きく分けて二つのタイプのアートがあると考える。一つ目に「自然なもの」(Natural)、もう一つは「人工的なもの」(Artificial) である。

例えば、マキ（井上）が言ったように天

に突き刺さるようにそびえ立つ山も姿もアートと言えるだろう。また人工的なアートにも様々なタイプがある。「アート」と「ハンディクラフト（※ここでは「アートに見られるような人間の意図が含まれない製作物」を指すニュアンスに近い）」の違いはどこにあるのだろうか。アートをアートたらしめているものは何だろうか。

「人間の手によって工場で作られた製品はアートなのか？ハンディクラフトなのか？」（海原）

良い質問だ。例えば携帯電話を工場で生産したら、それ自体は製造という行為でアートではないだろう。しかし携帯電話自身はどうだろうか？それは携帯として魅力的な製品になるよう多かれ少なかれデザインされている。これはアートと呼べると考えている。

ルワンダのバスケットに編まれている模様や INDANGAMUCO が普段踊っている伝統ダンス自体がアートなのか？私はアートの本質はもっと違うところに存在すると思う。例えばダンスであれば、その中に見られる価値観や体系をアートと呼ぶべきだ。

「それでは例えば政府の役人が新しい政策をデザインしたとする。それもアートと呼べるのか？」(Maurice)

名前は忘れてしまったが、ギリシャ人でこう言った人がいる。『どんな行為の中にもアートの軌跡が見える』と。彼はアートをリーダーシップ、特に政治指導者がどう国民を率いていくかといったところにも見出したのだ。政策を”デザイン”する、これもアートの一種だ。限られた予算の中で、目標を定めて政策を決めていくには、柔軟な想像力が必要だ。このプロセスはまさにアートであろう。

結論として、アートは人間のありとあらゆる行動の中に存在している。身近な例で言うと、食事の際いかに皿に盛り付けるかを考える時だ。チップスがここ、バナナはここ、と考えるのは食べる人の食欲をそそるように配慮した結果だ。これはアートだ。

ここまでで、このプレゼンにおけるアートの定義はシェアできたと思う。

しかし私が今日皆で考えたいのはここからだ。アートは人々に大きな影響を与える。では、国を発展させるためにはアートをどのように利用できるだろうか？それを考えてもらいたい。

3. 国の発展とアートの関係について

ディスカッション

議題：国が発展するためにアートはどのように貢献できるだろうか？

＊グループ A（井上、岩井、Nadine, Noel）での議論の展開

「国の政策を国民にアピールするのにアートが使われることもある」(Nadine)

「ということは、国がより発展するためのアートというのは 2 種類あることになるのだろうか。一つは政治的に利用されるアート、もう一つは街のデザインなど目に見て分かりやすいアート。」（井上）

「一つ目の例はやはり、政策を国民に説くときだろう。アートは政治的にとても役に

立つ。それは愛を伝えたいときに好きな人の前で踊るダンスと一緒だと思う。アートという媒介を経ることによって、国民はより簡単に政策を理解出来るようになる。」(Nadine)
「例えば歌手が大統領の政策について歌うとか、アートはそういった貢献も出来る」(Noel)
「でも、アーティストが政治的な存在になっていいのだろうか。教育を受けていない人はアーティストが何かを大声で発信すればそれを簡単に受け入れるだろう。戦争を引き起こすプロパガンダが良い例だ。」(井上)
「私にもその懸念がある。1994 年のジェノサイドの時も、アートが政治的になったことによって、その力が悪用されたのではないだろうか。」(岩井)
「確かにジェノサイドの時にアートの力は悪用されたが、その後アートが和解に役に立っていることも確かである。」(Noel)
「でも、そのように紙一重であることこそ危険なのだ。だからアーティストは政治的な存在であってはいけないと思う。発信するなら“愛”とか“平和”とかもっと共有できるテーマの方がいい。」(井上)
「確かに昨晩のピースコンサートでは、パフォーマンスをお互いに披露することによって友情を築くことが出来て良かったと思う。」(Noel)

＊グループ B（古屋、池上、Maurice, Alfred, Pio）における議論の展開
「この前ルワンダでは選挙があったけど、そこでもアーティストの力が発揮されていたと思う。」(Maurice)
「日本ではルワンダと比較するとアーティストがたくさんいるので、個々のアーティストは社会への影響力をそれほど持っていないと思う。また平和などの大きなコンセプトや政治的なメッセージなどを発信できるアーティストも多くない。」(古屋)
「ルワンダでは教育面においてもアートがとても役に立っている。教育という一つのアートがある。」(Pio)
「教育の中におけるアートは日本でも見られる。例えば、私たちが昨晩のピースコンサートで踊ったソーラン節だが、あれを練習したお陰で私たち 6 人の日本人メンバーの結束は高まった。それは教育の現場においても同じで、小中学校などでソーラン節を踊ることによって、児童・生徒は連帯感や達成感を得ることが出来る。」(古屋)
「アートセラピーというものもあり、アートの力でストレスやトラウマを緩和することが出来る。」(Alfred)
「心理的な面での貢献もあるのは日本でも一緒だし、同意見だ。日本語で Peace は“平和”と言うが、これの本質的な意味は“心が落ち着いていること”である。その点でアートは平和に貢献できる。」(池上)

＊その他
「ゴリラも観光業という一つの形のアートで、それが成熟すれば経済的に国に貢献できる。」(Sylver)
「私のグループで話し合ったことをまとめる。まず、エンジニアリングなど身近な学問の中にもアートは存在する。アートを政治的に利用してはいけないと思うが、アートの元では自由に発信できるべきだし、そうするべきだ。アートはソフトパワーとし

て国の発展に貢献できるだろう。」（海原）
「経済的な貢献も忘れてはいけない。もしアートの力によって街や工業施設のデザインが向上すれば外国からやってくる人（観光客、ビジネスマン）が増えるかもしれない。」(Eugene)
「伝統的な考え方から、国の発展に結びつく近代的な考え方へのシフト。その移り変わりと共にあって貢献するのがアートだと思う。」(Calliope)

【感想】

「アート」と最初に聞いたときはダンスや歌、絵画だけを想像し、どのような内容になるのだろうと思ったが今回カリオペが提示してくれた「アート」の定義は、私の想像を超えたところにありながらも、納得できるものであった。INDANGAMUCO のダンスそれ自体ではなくてダンスの中にある伝統的な価値観がアートなのだ、というカリオペの主張を聞くとルワンダの伝統ダンスを見る姿勢も少し変わった。

ディスカッション内容も各グループで多様性が出て良かったと思う。ただやはりアートのコンセプトは難しかったようだ。いわゆる「芸術作品」に捕らわれず自由な発想の元にディスカッション出来たグループもあったが、そのコンセプトをつかむのに一苦労したグループもあったようだ。

ところで、会議の内容だけではなく、担当者のカリオペから学ぶところも多々あった。カリオペのトピックの決め方や議論の誘導方法は、見ていてとても参考になった。それはまるでアメリカの大学教授のようであった。つまり一方的にプレゼンをするのではなく、自分は基礎的な考えを紹介するだけで、後は質問を投げかけながら参加者が積極的に意見を述べられるような雰囲気を作っていた。また医学部生のカリオペが「アート」というテーマを選んだことにも彼の視野の広さを痛感した。　（岩井）

I wanted to make people think and remind that art is not Dance only, art is everywhere, and who ever can see how world is expressed artfully, and how we can take advantage of this art. Finally, call up on every one, to go and read more about art.（「アートは伝統ダンスだけではなく、あらゆるところに存在している、ということを皆に考えてほしかった。世界はアートにあふれていて、私たちはその恩恵を受けているのだ。皆がもっとアートに触れ、知識を得てくれると嬉しい。」）

(Calliope)

ピースコンサート

担当者：井上 真希

1. 企画概要

日時：8 月 28 日（土）

19:00 開場 20:00 開演 25:00 閉演

場所：ルワンダ国立大学大講堂

2. 企画のきっかけ

2009 年 12 月、第 3 回学生会議のためルワンダ人学生 5 名が来日した際に、東京で日本文化とアフリカ文化の交流を目的としたダンスイベントを開催した。日本ルワンダ学生会議としては初の大きなイベントだったが、多くの人々に来場して頂き成功を収めた。全ての出演者の方々と来場者の方々のおかげで、イベントのテーマであった「文化でつながる日本とアフリカ」が実現できたような気がした。そして、音楽やダンスなど文化によって人々の一体感を作り上げられることを実感した。

イベントの後、出演者としてジャンベ演奏をして下さった SUGEE 氏と話をし、もし可能ならばルワンダで「平和」をテーマにしたコンサートを開催しよう、と意気投合した。私がルワンダへの渡航できることが決定してすぐ、その旨を JRYC ルワンダの Maurice に伝えると、快くその計画への協力を引き受けてくれた。

なぜ今回「平和」をテーマにしたのかというと、かつて虐殺が起こってしまったルワンダの地で世界平和を願ってパフォーマンスすることは非常に意味があることだと考えたからだ。また、INDANGAMUCO の活動理念と同じように私たちも「伝統文化による平和構築」する力となりたい、という思いがあったので、ルワンダでピースコンサートを開催する次第となった。

3. 企画目的

① 歌や踊りといった伝統文化を通して世界平和のメッセージを伝える。

② 日本文化とルワンダ文化の交流。

③ 文化交流を通した平和構築の体言。

4. 企画準備

・渡航前

今年の 5 月から日本人メンバーと SUGEE 氏が話し合ったことを Maurice に伝え、ルワンダ側の意見も聞きながら、適宜話し合い、コンサートの計画を進めていった。

コンサートの計画は順調に進んでいたが、8 月に入って問題が生じた。予算と日程的に思い通りの会場でコンサートを開くことが困難なことが明らかになった。そこで、Maurice は元々INDANGAMUCO が NUR の大講堂で開催予定の収穫祭のイベント”UMUGANURA”と合同で行うことを提案してきた。正直、本当は私たちが計画するピースコンサート一本で行いたかったが、

日にちも迫っていたし、「収穫物の共有」というイベントの主旨も平和につながると思ったので合同開催を承諾した。

コンサートでは日本人メンバーはソーラン節を披露する予定だったので、定期的に集まって練習したり、8 月上旬の合宿では猛特訓をしたりした。

・<u>リハーサル</u>

コンサートの前日には JRYC メンバーと SUGEE 氏とで最終ミーティングを行い、当日のリハーサルや流れについて確認した。

当日は、正午から NUR の体育館でリハーサルを行った。日本人メンバーは、クライマックスで INDANGAMUCO のパートに少々参加させてもらうことになったので、その部分の踊りを教えてもらった。

また、私は途中で短いスピーチをさせてもらうことになったので、その準備もした。個人的にキニアルワンダ語でスピーチしたいと思ったので、Maurice に翻訳してもらった。

夕方からは会場である NUR の大講堂に赴き、ポジションなど最終確認した。ステージは INDANGAMUCO のメンバーによってバナナの葉やルワンダの伝統工芸などで飾られており、とても立派だった。

コンサートの開演 1 時間前くらいには、数名の INDANGAMUCO メンバーと共に大学の食堂で軽食をとり、エネルギーをつけておいた。

コラム　コンサートのプログラムはいつわかるんですか

ピースコンサートは今年の春頃から着々と私と Maurice、Sugee さんの間で主にメールやりとりによって計画が進んできましたが、会場を借りる関係で INDANGAMUCO の収穫祭のイベントと合同で開催されることに決定されて以来、実際のマネジメントは INDANGAMUCO 側に任せることになりました。そして、リハーサルや当日のスケジュール、プログラムは INDANGAMUCO の中心メンバーに任されることになりました。

彼らは出演者のアポ取りや会場整備、舞台装飾など非常にスムーズにこなしてくれていて、NUR に到着した私達はこれから始まる一大イベントに胸をふくらませ、安心しきっていました。ある一点の心配を除いて…。

というのは、コンサートのプログラムがいつまで経っても来ない…ということです。コンサートの一日前に行われた最終ミーティングで、「そういえば、プログラムはどうなってるの？」という私の質問が軽く交わされてしまったときはあれ？と少し思いましたが、当日、コンサート直前にみんなで大学の食堂で軽く夕食をとっていたときにも、未だにプログラムについて何も言われないのには驚きました。実際、プログラムというか、何番目に私達が出演するよ、と言われたのはコンサートが始まってからでした！

いろいろ心配しましたが、コンサートは始まってみると何も心配することはないぐらいスムーズでした。私達と同じくプログラムを直前に知らされたであろう、司会のエフレムも実に見事な MC っぷりをみせてくれたのでした。

ここでもアフリカン・タイムというかルワンダ・タイムを思い知らされたのでした。でも、結局どうにかなってしまうところには感心してしまいますね。

（井上）

5. 企画詳細

① オープニング

会場は信じられない程多くの人たちで埋まっており、2 階席まで満杯で、立ち見の者すら多くいた。開演がかなり遅れていたので、観客が手拍子したり叫んだりして急かしていた。とにかく開演前からすごい盛り上がりようであった。

やっと約 1 時間遅れでコンサートは始まった。観客の歓声があがった。

司会は元 INDANGAMUCO リーダーの Ephraim が努めた。キニアルワンダ語で終始トークしていたので、実際どんなことを話していたのかは分からないが、会場の雰囲気的に Ephraim の MC 技術は相当のものだった。

② 来賓の紹介

パフォーマンスの前に来賓を何名か紹介していた。会場には NUR 校長の秘書の方も来ていた。

④ INDANGAMUCO
(National University of Rwanda)

最初のパフォーマンスはこのコンサートのメインである INDANGAMUCO が取り持った。

”UMUGANURA”という伝統的なテーマに沿って、収穫した作物やお酒を農民が王様に献上する様子が表された踊りや、農民が畑を耕す動きをするような踊り等を見ることができた。

INDANGAMUCO のメンバーの身体の動きは非常にしなやかで、機敏であり、一つ一つのリズムに正確に呼応しているようだった。伝統的な合唱も鳥肌が立ってしまうくらい素晴らしいものであった。

⑤ RUGAMBA Choir
(National University Rwanda)

次に、NUR のコーラスグループの合唱を聴いた。衣装は伝統的なルワンダのものなのに、歌い方は西洋的であった。また、途中から真ん中の学生が異色のルワンダ風ラップ(?) を披露した。意外にも観客にうけていてびっくりした。

⑥ GISENYI　Cultural Troup
(The Kigali Independent University)

このグループも INDANGAMUCO と同じく、収穫の喜びと共有の心を表現したダンスと歌を披露した。

⑦ The INDATWA N'INKESHA Cultural Troupe
(Groupe Scolaire Officiel de Butare)

とても鮮やかなオレンジの衣装に身を飾った女子生徒の踊りが印象的だった。

⑧ INGANJI Cultural Troupe
(Kigali Institute of Education)

INGANJI の踊りの中では、男子学生が長い棒を 2 本もって戦うようなものがあり、迫力があった。

⑨ LES STARS DU THEATRE
(National University of Rwanda)

まさかルワンダでコント漫才のようなものが見られるとは思わなかった。全てキニアルワンダ語で話されているため、残念ながら詳しい内容は分からなかったが、世間知らずの田舎者や、警察官のツッコミを受けるボケた青年など、日本人にも分かるような大まかなルワンダ人の笑いのツボを知った。

⑩ 日本人メンバーによるソーラン節

汗水流して練習したソーラン節をついにルワンダの人々の前で披露しました。6 人とも練習の成果を出して踊れたと思う。エネルギッシュなソーランに SUGEE 氏のジャンベのリズムが合体して更に迫力が出せた。

⑪ SUGEE 氏のドラム演奏と歌

世界各地を旅して様々な音楽エッセンスを取り入れてきたSUGEE氏の演奏と歌はまさにトランスナショナルである。日本がアフリカで主流のジャンベを叩けることに、はじめ観客は驚いて目を丸くし、SUGEE氏の音楽的ユニークさを感じられたのではないかと思う。

⑫ エンディング

SUGEE 氏のジャンベのリズムから INDANGAMUCO まずステージ上に丸く円をつくるように歩み寄り、次にルワンダの伝統衣装に身を包んだ日本人メンバーも簡単なルワンダダンスの動きをしながら加わった。やがて、SUGEE 氏のジャンベとINDANGAMUCOの歌声が止まり、私がステージ前に出て、今回のコンサートの趣旨は「文化交流による平和構築」と「”UMUGANURA”に共有の心を学ぶこと」であると、キニアルワンダ語で伝えた。

再びSUGEE氏の演奏がはじまり、私たちは「アマホロ、アマホロ（平和）」と歌いながら平和を願って共に踊った。途中でステージ脇からトウモロコシやイモをザルにたくさんのせた学生がみんなにこの収穫物を分け与えた。このように自然の恩恵をみんなで共有し、その心から平和についてまた思い巡らせた。深夜を過ぎても人々の熱気は冷めず、みんな夢中で伝統のダンスをいつまでも踊って楽しんだ。

今回、コンサートの観客に平和のメッセージを書いてもらおうと、会場の入り口付近に”PEACE”と書いた白い布を置いておいたのだが、最後に回収すると驚くほどびっしりとそれぞれの思う平和のメッセージが書かれていた。

4. 感想

古屋 亮輔

この団体の大きな目標である相互理解を実現するための活動のひとつとして、互いの国の伝統文化を紹介することは「日本ルワンダ学生会議規約」にも記されている。しかし INDANGAMUCO のルワンダダンスと我々日本人メンバーのダンス（毎年ソーラン節）のクオリティの差は、私にとって常に悩ましいものであった。

そんな中、今年の文化交流では数百人を前に日本を代表して踊ることになった。私は前回の渡航で意識の足りないメンバーがいたこと、自分自身も技術的に不十分だったことを 2 年間密かに悔いていた。だから今回再びルワンダに行くことになってから、私はなんとしても NUR の最高の舞台でリベンジを果たしたいと思っていた。当日までに様々な問題はあったが、最終的にその目的は達成できたと思う。ソーラン節についてはコラムがあるので、詳しいエピソードはそこに譲るとしよう。本番数時間前のリハーサルで全員体力のピークを越えてしまい本番でへばってしまった点だけは残念だったが、今回のソーラン節に関しては結果よりプロセスが大事だったと言いたい。

企画に関しては、INDANGAMUCOのコンサートと合同で開催したため、企画当初にあった「平和を訴える」という目的は少し薄れてしまった感がある。しかしラジオ局からは何度もインタビューを受け、国内唯一の日刊新聞にも英語で大きく掲載され日本の文化を一般のルワンダ人に伝えるという面では大成功だった。インタビューでは私たちの活動の意義やルワンダ、アフリカへの印象なども質問され、期せずしてイ

ンタビュアーとソフト面での交流ができた。例えば、日本人にとってのアフリカのイメージは貧困、紛争、HIV だと言ったら彼は少し驚いたような顔を見せ、苦笑いを浮かべた。それだけ、日本人のイメージと実際彼の地に暮らす人々の認識とでは差があるのだろう。文化交流をきっかけにルワンダの人々と近づくことができたんだな、と実感した。

SUGEE 氏

ルワンダ国立大学でのピースコンサートは、彼らの伝統的な文化と精神性に触れることのできた、素晴らしい機会であった。
特に、INDANGAMUCO のダンスは、王の起源と豊饒の神への感謝という、日本の神楽などと共通性を持ったものもあり、心から親近感を覚えた。
ジェノサイドという悲劇を、恐らく幼少期に体験した世代がほとんどであろう彼らが、体いっぱいに命の喜びを表現するその姿は、見るものの心を無条件に打つ。
キリスト教以前に彼らはイマーナという土着の女神の伝説を持つという。
命と豊饒への感謝、恐らく人類全てが共有できる音楽とダンスを誇らしくそして悲劇を超えて迷いなく表現する彼らは正しく時代のリーダーであり、同じ表現者として共にルワンダのステージに立たせて頂いたことを心から誇りに思う。
JRYC のメンバー全員に、感謝の意を表したい。

井上 真希

「ルワンダでピースコンサートを開こう！」という、最初はただの思いつきに近いようなひらめきが現実のものとなり、自分自身信じられなくて、嬉しくて仕方がなかった。それも協力してくれた SUGEE 氏や全 JRYC メンバーなどあの会場にいてくれた全ての人々のおかげであり、大変感謝している。

今回、INDANGAMUCO は私たちが後から便乗させてもらったのにも関わらず、エンディングでスピーチや平和の歌とダンスを取り入れてくれて、ピースコンサートの趣旨にぐんと近づけてくれた。最後のエンディングでステージの上でみんな思いっきり歌って踊っている間、前回のイベントでも感じた「一体感」を再び実感することができた。

会場のお客さんは日本人の私たちも暖かく受け入れてくれ、非常に嬉しかった。コンサートが終わって、いろいろな人に「すごくよかったよ！！」と声を掛けてもらったときには、本当にルワンダに来て、このコンサートを実現させることができて良かったと実感した。そして、コンサートに来てくれた人々が少しでも「平和」や「共有する心」を胸に留めてくれれば嬉しい。

人間は「国」という概念ができるとっくの昔から歌や踊りに親しんできた。だから、たとえ日本人であってもルワンダ人であっても関係なく、共に音楽に身を任せ、楽しむことができるんだろうな、と考えさせられた。そして、この共通性は確かに平和をつくるパワーになると感じた。

最後に、コンサートに関わって下さった全ての方々に、ありがとうございました！

Alfred Ntaganda

The world peace concert is the concert organized by INDANGAMUCO CULTURE ballet from National university of Rwanda A.K.A NUR together with JRYC members of both countries that is to say Japan and Rwanda.

It was a successful because all provided to be done was done and well done;

it was also a special one coz not only Indangamuco performed but also other ballets as the one from KIE, ISAE, ULK on the side of other universities and the ballets from **Groupe scolaire official de Butare** on side of high schools; there was also **les stars du theatre from NUR**.

But what made the concert more special was the performance of Japanese from JRYC/ Japan

The concert was done in series;

_ 1st performance was for Indangamuco opening the concert and showing in general types of Rwandan dances and how it's done.

_ in 2nd place there came other performances of other Rwandan institutes and **les stars du theatre**. They showed also Rwandan culture as works and how they share everything together.

_ in 3rd place came a Japanese performance which shows in general their culture. They performed so well that everyone wanted them to continue.

_ Last performance by INDANGAMUCO; composed by dances showing how Rwandans share their products together as friends.

After all those dances there was sharing Rwandan meal together with all those who were there.

As title of comments, the concert was great but the other time we should invite few ballets in other that the major part could be done by us INDANGAMUCO together with JRYC and we should invite always Japanese as said by some friends who were there in the concert. And we should also sell entrance tickets in order to give respect Rwandan culture so persons who will come would really know the value of what we do as JRYC Members.

コラム　実録！笑いあり涙ありの白熱ソーラン節！！

「今年はソーラン節を本気でやらなければならない。」

ルワンダ側メンバーは INDANGAMUCO（ルワンダ国立大学の伝統ダンスグループ）に所属している学生が多いということもあって、我々のルワンダ渡航ではソーラン節（※金八先生で有名になった南中ソーラン）を踊ることが文化交流の手段として付き物であった。

しかし今回は事情が違った。ただの文化交流としてのソーラン節だった一昨年・昨年と違い、今年は大学で開催されるピースコンサートへの出演という大役があったのだ。つまり、何百人というルワンダ人の前で、日本代表としてソーラン節を踊るのだ。妥協は許されない。

代表・古屋のスパルタ指導の元、我々は 7 月下旬からソーラン節練習を開始した。時には、練習で体力の限界を迎えミーティングがなおざりになったり、ミーティングを放り出して大舞台で踊るにふさわしいフォーメーションを黒板上で考えたり、飛び跳ねすぎたせいだろうか下階の教室を使用していた人から苦情が来たりもした。8 月上旬の合宿＠千葉・白子海岸では、海岸でキャッハウフフと男女が仲良く遊ぶ他のサークルを横目に見つつ、渡航メンバーだけではなく全員で練習した末、筋肉痛が流行した。

ある者は全員が集まる前から自主的に、ある者は肉離れになるまで、またある者は自宅で練習動画を見ながら、個々人が練習を重ねた。そして渡航前最後のミーティング。「移動のとき、腰をもっと落として」「肘がのびてない」古屋の熱のこもった指導が最後の最後まで続く。「ルワンダで、最高のパフォーマンスを」――3 週間にわたる練習の末、皆の心は一つにまとまりつつあった。

ルワンダでも基本の姿勢の確認や最後の決めポーズを考えるなど、最終調整は続いた。そしていよいよ本番の日がやってきた。コンサート当日までプログラムが決まっていなかったり、結局ソーラン節を踊ったのは日付が変わってからだったり、という話は別のコラムに譲るとして、我々はなんとかソーラン節を踊りきった。何百人というルワンダ人の大歓声を受けて、我々の夏は、終わった。

今になって思うことは、ソーラン節をばかみたいに真面目に練習することは、ルワンダ渡航をより良いものにするために非常に重要であったということである。ソーラン節の練習のおかげで、我々6 人のチームとしてのまとまりは形成されたと感じている。

笑いもあり、涙もあった。今年の夏はソーラン節がアツかった。

（岩井）

ルワンダ人メンバー宅・ホームステイ体験記

古屋 亮輔（カリオペ家）

私は Calliope（カリオペ）の家に割り振られた。彼は言うまでもなく現在の JRYC メンバーの最古参であり、日本にも来た初代リーダー。私も 2 年前のルワンダ渡航時からの付き合いであるため、ホームステイについても特に心配していなかった。まだ研修医とはいえ、ルワンダでは「神のような存在」とされるらしい（カリオペ談）医者はどんなところに住んでいるのだろう、といろいろな想像を膨らませていた。

しかし現実に彼の住む家は想像していたような「医者の家」ではなかった。

キガリの中心から 5 分ほど乗って車から降りたのだが、なんというか、その場所は、非常に治安が悪そうだった。キヨンベから帰ってきて全メンバーをそれぞれのホームステイ先に送ってからカリオペの家に行ったため、着いた時点ですでに 23 時すぎだったのだが、そこではまだたくさんの若者が酒を飲んで踊ったり、たむろしたり、火が燃えていたりした。日本でいえば歌舞伎町のような場所なのだろうか、カリオペも「There are a lot of チャラ男」と日本語混じりで私に説明した。「チャラ男」はプレイボーイの意味だと第 3 回本会議のときに教えたのだが、彼がどんな意味でその言葉を使ったのか定かでなかった。その場所の雰囲気と日本人的な偏見が入り混じり、私の頭の中には「売春」や「エイズ」といったネガティブな言葉が浮かんでいた。

どうやら道端にいた若者たちも外国人を見慣れていないようで、私たちの方をじろじろ見て「白人、白人」とルワンダ語で言ってきた。カリオペはといえば、あまり彼らと目を合わせない感じで私の隣をすたすたと歩いていた。

そんな中を 50 メートルほど歩いたところで喧騒は終わり、真っ暗な細い路地に入って少し行くとトタンの門があった。門を入り、いよいよカリオペの家とご対面だ。小奇麗な外観の家に足を踏み入れる・・・と、中には蝋燭が一本立っており、男が一人ソファに座っていた。実は来るまで何も話を聞いていなかったのだが、カリオペは研修医仲間 3 人でルームシェアをしているということだった。もう一人は夜勤である。そして蝋燭に関して、この家には電気がないのだろうかと不安になり「いつも蝋燭を点けているのか？」と訊いた。しかしカリオペは笑って「今日は停電してるだけだよ」と答えたので少し安心した。

家の外観

この日はトウワ・キヨンベの長旅で汚れた身体を洗ってから食事をとって寝ただけだったのだが、正直言ってカリオペの家のトイレが穴、シャワーがタライだったこと

に驚いた。やはり医者の家であってもルワンダのトイレは穴なのかと。ただ室内にはパソコン、スピーカー、立派なソファやベッド、ガスバーナー式コンロなど、ルワンダの生活水準では高級と思われる品もたくさんあった。翌朝「中古の日本車を買う計画を立てている」とも言っていたし、彼が金をつぎ込む点が私には理解できなかった。良い家に住みたいという発想は日本人的なものなのだろうか。それともトイレなど使用できればよく、価値を置いていないのか。まだまだ相互理解は必要なようである。

このホームステイの個人的な反省として到着の遅れと停電のため夜はさっさと寝てしまい、かつ予想外のルームメイトがいたため、カリオペと話す時間があまりなかった点が非常に残念だった。他のメンバーの話を聞くと家族と仲良くなったり深い話をしていたりできたようでうらやましい。時間がないことをわかっていてカリオペと付き合いの長い私が割り振られたのかもしれないが、話そうと思えばいくらでも話すことはできたはずである。ルワンダ社会について色々考えるとともに自分の性格を見つめ直す結果となったホームステイだった。

<u>井上 真希（エフレム家）</u>

1. お宅訪問

キガリ市内で兄と共に暮らすエフレムの家には夜の 11 時くらいに到着した。家の前の通りはまだ整備されておらず、でこぼこで砂っぽく、車で通るのは少し大変だった。「ここが僕の家」と玄関から家の中に案内してくれ、丁寧に部屋ごとに説明してくれた。

玄関から最初に入る居間には食器棚やリビングテーブルなどが並べられていた。なぜか食器棚には何も入っておらず、不思議に思った。次に、エフレムの部屋を見せてくれ、「今日、マキはここに泊ることになるよ。ぼくは兄貴の部屋で寝るから。」と教えてくれた。エフレムの部屋には TV やオーディオコンポ、彼の巨大な体長に合わせた巨大ベッドがあった。

その他にはバスルーム、中庭を見せてくれた。バスルームはとても清潔だったが、水しかでない、と言われて少し驚いた。（じきに慣れたが…）中庭には料理をするための簡素な水場と、家に隣接する小さな小屋があった。小屋の中にはエフレムのモーターバイクが堂々と置かれていた。キガリ市内で出かけるときにこのバイクに乗っていくそうだ。その横は、少し仕切りがあった。覗いてみると、なにやら布団が敷いてあったので、エフレムに「これ何？」と聞いてみた。すると、「これはハウスボーイのだよ。料理をしたり、洗濯したり、いろいろ家事をやってくれるんだ。」という答えが返ってきた。更に聞いてみると、この家のハウスボーイは 20 歳くらいで、ちゃんといくらかのお金も払って雇っており、弟として扱っているそうだ。日本では家政婦なら

ぬ家政青年（？）はあまり聞かないので、少し驚いてしまった。

部屋の案内が終ってからはリビングの椅子に座って、家の途中で買ってもらったサモサを食べながら、ルワンダの歴史
についていろいろ教えてもらった。少し薄暗い蛍光灯の中、かなり議論をしたが、じきに眠くなってきてしまったので先に寝させてもらった。

次の朝目覚めてリビングに入ると、エフレムのお兄さんである Moses がいた。彼はガチャチャ裁判をする法廷で働いている。仕事へ行く彼を見送り、私とエフレムは朝ご飯を食べた。じきに他のメンバーとの集合の時間となったので、荷造りをして、家を出た。

2. インタビュー

Q1: How is the life in Rwanda these days?
（ルワンダでの最近の暮らしはどうですか？）

A: In general, it's not bad. When you find people creating some activities to make him or her busy, you see the change from 10 years ago. Now people have many things to make some money. It's not difficult but it is difficult in another way.
（たいてい悪くないよ。人々が忙しくするためにいろいろな活動（仕事）をしているのを見ると、１０年前からの変化が感じられるよ。今、人々がお金を稼ぐためにいろんなことがある。（お金を稼ぐことは）難しくないが、ある意味難しいね。

Q2: How is it difficult in another way?
(それはどういった意味において難しいのですか？)

A: Today in Rwanda many people are educated, so it is difficult to get a good job.
(今日のルワンダでは人々の多くが教育を受けている。だからいい職を手にすることは難しいね。)

Q3: What's your opinion on government
（1994 年以来の政府の政策についてのあなたの意見を聞かせて下さい。）

A: There have been many changes for 16 years. For example, there were only 5 universities in whole Rwanda before, but now there are many including the private and national ones. It's a good development we have. Also I can tell another one, that is infrastructure. Big change. We can see many houses, roads, hospitals, etc…
（16 年間の間にたくさんの変化があるよ。例えば、かつて 5 つしかなかった大学も今や私立と国立を含めて多くある。これはとてもいい発展だよ。あともう一つ、インフラについて挙げられる。これは大きな変化だ。(今は)たくさんの家や道路、病院が見られるでしょ。

Q4: What's your hope for the future in Rwanda?
（ルワンダの将来に対するあなたの希望はありますか？）

A: According to the good government policy to continue the development, I have a big hope for sure. Because we already have had some good changes, so I expect there will be more development.
（発展を継続させるいい政府政策によって、確かな大きい希望があるよ。なぜなら、す

でにもういろいろいい変化があるから。更にもっとルワンダで発展があることを期待しているよ。）

2. 感想

エフレムに初めて会ったのは去年の冬の第三回学生会議であった。来日した 5 名のルワンダ人の中でも、エフレムは特に仲良くなったので、今回ルワンダで再会することになり、しかもホームステイで受け入れてもらうことになったので、非常にわくわくした。

ルワンダの人の家に泊まるのは、もちろん初めてだったので、最初は少しどきどきしていた。電気が薄暗かったり、冷蔵庫がなかったり、水シャワーだったり、日本での生活とは違う点もあったが、特に困ることはなかった。兄弟姉妹もエリートが多いエフレム家はきっとルワンダ国内ではいい水準の生活をしている方なのかな、と考えさせられた。

たった一日のホームステイだったが、エフレムとはたくさん話をすることができた。わたしは普段 JRYC でルワンダのことについて勉強してきたので、エフレムのルワンダの歴史に関する話は非常に興味深かった。また、インタビューでは虐殺以後のルワンダ社会の変化について聞くことができた。エフレムは現政権に対して 90-100%満足と言及しており、カガメ大統領を信頼している。それは、ここ 16 年で国民の目に見える形でルワンダを発展させる政策が評価されているのだろう。ここで、ホームステイを受け入れてくれたエフレムとお兄さんに感謝したい。MURAKOZE CYANE！！！

<u>岩井 天音（ピオ家）</u>

キガリの中心地でメンバーと別れてからバイクタクシーに乗る。風を切って走るバイクタクシーから眺めるキガリの夜景は美しい。丘の斜面にぽつりぽつりと光っている街頭や家の灯りが星のようで、まるで宇宙に浮かんでいるような錯覚を覚える。15 分ほど経って、キガリでは比較的標高の高い Nyakabanda というエリアに到着した。暗闇の中 30 センチ幅ほどの排水溝を恐る恐る飛び越え、ステイ先の家に到着した。

私のホームステイ先はルワンダ側メンバーの Pio の家だった。ここには Pio、彼の兄 Valantine とそのご夫人である Pamela、彼らの息子 Joshua（3 歳）、そしてメイド 2 人（男女一人ずつ。Kabodo と Janet）の合計 6 人が暮らしていた。

玄関を入るとすぐに大きな空間があり、リビングとダイニングに使われている。奥にはそれぞれ 6 畳ほどの部屋が 3 つ。そしてバスルーム（冷水シャワーのみ、水洗トイレ）、キッチンがあったと記憶している。これはルワンダでは高水準にあたるはずだ。

Joshua は 3 歳児らしく何にでも興味を示す。目を離すといつも、私がベッドの上に置いていた携帯電話やパスポートなどの大切なものや洗濯物を取っていく。初めはひやひやしていたのだが、次第に可愛らしく思えてきた。

到着が遅かったこともあってか 22 時ごろから夕食が始まった。Joshua もまだ起きていて家族全員が参加する、神への祈りから始まる食事であった。ヤギの肉やバナナなどいつものルワンダンフードだが家庭で食べる味はどこか暖かい。食事の後は、テレビで音楽番組（放送されているものでは

なく、録画だと推測された）を見ながら、家族や大学のことを話したのだが、この時 Pio に”Do you have BOTH parents?”と聞かれたことが忘れられない。“両” 親はいるのか、という質問の仕方にルワンダの歴史の重さを垣間見た。

さて、翌朝は近くにあるモスクからの礼拝の呼びかけで目が覚めた。最近はムスリムも増えているとのことである。カーテンを開けると気持ちいい朝の空気が流れてきた。メイドの Janet が外で洗濯をしている。ふと耳を澄ませると、Janet が洗濯をする水音や人々の話声、車の走る音、鳥のさえずりなどが程良いバランスで聞こえてきた。ああ、これがルワンダの空気か、などと感慨に耽ってみた。

さて、Pio と二人で朝食を食べたのだが、牛乳（折りたたんでない紙パックに入っている）が口に合わず全部飲みきることが出来なかった。というよりも、牛乳を一度に 500ml も飲むことは出来ない。カップに牛乳が残ったままの私を見て、Pio は残念そうな顔をした。そして残りのルワンダ滞在中にも何度かこの話で「牛乳を飲め」と冗談交じりに言われることになる。

別れ際、あんなにいたずらを仕掛けてきた Joshua が泣きやまなくなった。君との別れが寂しいんだね、と Pio が笑った。

日本からの長い移動の後、濃密な 2 日間をこなし若干の疲れもあったが、ホームステイではルワンダの「ゆったりとした空気」を感じられた。ホテルとは違って一般家庭に滞在すると、日本人としての「異質性」が緩和される気がする。ホームステイを実現させてくれたルワンダ側メンバーに感謝の意を表したい。

<u>海原 早紀（クリステラ家）</u>

日中の活動を終え、車でクリステラの家に到着すると、ポーターらしき人が私のスーツケースを運んでくれた。頑丈な壁に囲まれていて、家の周りにも広い敷地があることが暗闇の中でもわかった。

家に入ると、遅い時間にも関わらず家族の皆が迎えてくれた。家にいたのは’grand-mothers’と呼ばれる 3 人の老婦人、そして長男のクリスチャン。他に女兄弟がいるのだが、みんな寮制の学校に行っていて、普段は家にいないそうだ。3 人の’grand-mothers’は、クリステラの直径の祖母が一人、そしてその従兄弟姉妹だそうだ。3 人とも 70 代。きれいな伝統衣装に身をつつみ、延々とテーブルでおしゃべりをしていた。英語は全く喋れないのだが、私をハグして迎えてくれた。

家から近くの大学でマーケティングを勉強するお兄さんのクリスチャンは英語も堪能、日本についても興味があるようで、テレビに映る日本の番組を見ながら私にいろいろ質問してくれた。（驚くことにこの家にはケーブルテレビがあって、100 以上のチャンネルが視聴可能。この日は海外向けの NHK の番組を 2 人で見た。）

もう一人の住人である家政婦さんが夕食を作ってくれた。豆、芋といったどこにでもあるルワンダフードだったが、それに加えて庭で飼っている牛の美味しい牛乳を出してくれた。お家は、ソファから立派な絵画までヨーロッパ顔負けのリビングルームに、蚊帳がしっかりついたベッドルーム、白いタイルのバスルーム。期待以上の豪邸だった。食器やキッチンに関しても、全てがとても清潔だった。

そしてシャワーの後、お兄さん・クリステラ・私の３人で深夜２時まで南アフリカの番組を見ながら、のんびりと喋り続けた。勉強のこと、家族のこと、恋人の話、昔飼っていた犬の話、そして虐殺の話まで。彼らのプライバシーの話になるのでここに詳しく書くことはできないが、こんなにも虐殺当時の体験をあっさりと私に教えてくれたのはお兄さんが最初で最後のルワンダ人だった。

翌朝は、お馴染みのルワンダフードと一緒にミルクティーを出してくれた。牛乳たっぷり、お砂糖たっぷり、ちょっと肌寒いルワンダの朝にはぴったりだと思った。

その後は、クリステラが広大なお庭を案内してくれた。牛を５頭くらい飼っていて、それが放牧できるくらいの土地、そしてコーヒーとバナナの樹まで育てていた。５人くらいの人を雇って働かせているようだった。

最後に、家に戻って家族の人にお別れをした。２人のおばあちゃんはまだ寝ているようだったが、一人は歯磨きを中断して写真をとってくれた。お兄さんとも連絡先を交換した。

びっくりするくらいの豪邸と、暖かい家族の歓迎のおかげで私は予想以上に快適な一晩を過ごさせてもらった。しかし何よりも、渡航中一緒に活動していたクリステラの生い立ちや家族について知ることができたのが嬉しかった。

池上 純平（モーリス家）

私はモーリスという学生の家にホームステイすることになった。ホームステイでは大勢と過ごす時間では話せないことも話す。だが、あえて私は嬉しく感じたことを書こうと思う。

キガリにあるのはモーリスの叔母の家であるらしい。高鳴る鼓動を感じながらドアを開けると、出迎えてくれたのはモーリスの叔母の姪にあたる少女であり、その夜は近所の人達も遊びに来ていたため、物珍しい日本人の登場に好奇心が隠し切れない様子だった。

小豆のような豆を煮込んだ料理などの夕食を食べつつ彼女らに日本に関する質問に答えたりしていたが、しかし同時に彼女たちは自分たちの生活が日本人の目にどう映っているのかに関心があるようだった。「日本人から見てルワンダ人は貧困だと思う

か？」私の答えは「No」だった（もちろん貧困が蔓延しているのは知っている）が、なぜあえてこう答えたかはここでは割愛させていただく。

モーリスは今回の学生会議のルワンダ側コーディネーターだったため、部屋に戻るなりあちこちへと電話をかけて調整をしており、忙しそうにしていた。その間、私は荷物の整理や着替えなどをおこなっていたのだが、しばらくするとモーリスが居間に行こうと言い出した。

居間へ戻るとモーリスの叔母とその姪がいて、私達も同じソファに腰かけた。するとモーリスはなにげなく自分のPCを広げ、ダウンロードしたディズニーの動画やチャップリンの無声映画を彼女たちに見せ始めた。たまに出る英語の説明は、彼女たちが分かるようにルワンダ語に通訳しながら解説してあげていた。テレビの無いこの家では、たまに帰ってくるモーリスが見せるその類の映像が数少ない娯楽なのだろう。叔母と少女は何にも代えがたい笑顔で充実した時間を過ごしていた。私は、その自然な様子を微笑ましく思って眺めていた。おそらく、それは彼らにとっての日常だったのだろう。今日は日本人が来るから特別という訳でもなく、いつもそうしているように。私はモーリスに対して、そしてルワンダ人に対して抱いていた距離感が無くなっていることを感じた。これを言葉で言うのは容易いが、これに気付いたときの幸せは言葉では表現できない。

最後に、ホームステイらしいことを少々。モーリスの家には水道がなかった。そしてそれを察したとき、歯磨き、洗髪等の行為をすべて同じ樽の中の水で行わなくてはいけないと言われた時も多少の驚きはあったが、私はそんなことで驚く様子を見せるのが嫌だったので、内心を悟られないように、「ふーん」というように、あえて澄ました様子で振舞った。なんとも見栄っ張りな話であるが。

宮本 寛紀（アルフレッド家）

私は、Alfred の家にホームステイさせてもらうこととなった。みんなと別れ、Alfred と２人で家に向かったのだが、私は大きなスーツケースとリュックを持っており、その状態でバイクタクシーに乗ろうと言われた時は、非常に驚いた。

日本ではあまり聞き慣れない“バイクタクシー”だが、東南アジアなどに行ったことのある人は分かるはず。いわゆる原付バイクに二人乗りするのだが、運転者の前に大きなスーツケースを乗っけ、私は後ろにまたがったわけだが、この時初めて、スーツケースで来たことに後悔した。バックパックを背負っている状態ならまだしも、スーツケースをバイクに乗せた状態で２人乗りなんて（しかも夜!!）とてもヒヤヒヤした感覚を今でも覚えている。

なんとか無事に家の近くまで辿り着いたかと思うと、時刻は２３時過ぎであたりは真っ暗、さらに１５分ほど歩いたところにステイ先である Alfred の家はあった。

外見はとても立派な一軒家で、間取りで言うと 4LDK といった具合に羨ましいくらい広くきれいな家であった。彼曰く、まだ建設中らしい。（たしかに、次の日の朝に、ペンキを塗っている作業員や、何か壁に打ち付けている作業員がいた。）

夜遅くにも関わらず、Alfred の母親と弟（従弟でも young brother という単語を使うため実際の弟かどうかは定かではない）、まだ２歳くらいの小さな妹、そしてお手伝いさんが温かく迎えてくれた。Alfred は常に、“Be free, don’t mind”などと気遣ってくれ、逆に申し訳ないような気持ちになった。シャワー（シャワーといっても、たらいに水を入れてかぶるのみ）が終わると、夕飯をごちそうになった。夕飯は、ルワンダらしい料理でバナナを煮てあるもの、豆、ライスで、それぞれ、これでもかと言わんばかりに盛り付けてくれた。味はもちろん、美味しかった。食べ終わると、「おかわりは？ちゃんと食べないと元気がでないよ。」と言われ、すでに満腹であったのと、疲れていたのもあり、遠慮すると、「ルワンダでは、昔から、よく働いた人はたくさん食べるし、食べることができる。働かない人は食べられない。と言われているのだよ。」という話もしてくれた。

この日は、時間も遅かったためそのまますぐに寝てしまった。

次の日の朝起きると、隣で寝ていたはずの Alfred はいなく、弟に聞いてみたところ少し出掛けに行ったというので、弟と一緒に朝ご飯を食べ、散歩に行くことになった。

家の近くの道をひたすらまっすぐ歩き、戻るという単純な散歩だったが、１時間以上かけていろいろな話ができた。弟は、大学で、コンピューター関係について学んでおり、将来はエンジニアになりたいということ。他にも、日本の電化製品の性能の良さ、彼らの父はアメリカで仕事をしていること、日本で伝えられるアフリカのイメージなどなど、ホームステイの間しか一緒に

いられなかったがとても仲良くなった。

家に戻ると、Alfred も帰ってきており、出発の時間が来ていた。あまり母親と話すことは出来なかったが（母親は、英語を話すことができない）最後に感謝の気持ちをルワンダ語で“Murakoze cyane!”(Thank you very much)と伝え熱く抱擁を交わした。

その後、何かルワンダ語で言ってくれたが、分からなかったため Alfred に何ていったか、聞いてみたところ「気をつけてね。またいつでも遊びに来ていいんだからね。」と言ってくれたみたいで、とても胸が熱くなった。

やはり、ゲストハウスなどに泊るのもいいが、現地の人の生活を間近で体験できるホームステイをすることは、非常に有意義なことであり、いい経験となった。

Alfred が日本に来られることになった時には、逆に私の家にホームステイさせてあげたいとそのようにも思った。

コラム　キガリの街、人。と、エフレムの本音。

エフレムには友達がたくさんいる。キガリの街を歩いていると約 5 分に一回くらいは知り合い・友人に遭遇する。「おー、元気だったか。」の挨拶からはじまり、必ず 5¯10 分くらいは立ち話する。一日の活動の後、私がホームステイ先である彼の家に行く途中も何人もの友達に会い、彼らのおしゃべりに付き合った。

日本だったら知り合いにあってもせいぜい会釈くらい、ましてや小学校以来ずっと話したことのない友達だったら知らんぷりしてしまうこともある。だからエフレムが毎回すべての人々に笑顔で挨拶しておしゃべりに興じる姿は新鮮に映り、私も見習わなきゃ、と感心していた。

道の途中で出会った彼の友達の中には、来春、青山学院大学に一年間留学する予定の青年もいて、彼の好意で親切にも車で送ってもらった。日本ではこんなことないよなー、と思いながら私はエフレムに尋ねた。

「エフレムって友達のつながり大切にして本当にいいことだよね！いつもこんなにたくさん人に会うの？」

すると、「うん、そうだよ。でもさ…実際こんなに毎日人に会っていちいち挨拶するのは、結構時間の無駄だよね。約束の時間に遅れちゃうときもあるし…」という意外とぶっちゃけた答えが返ってきた。本当は面倒くさいとか思ってたのね…エフレム。（笑）

（井上）

【第３章】
ルワンダ現地活動　活動報告

1. 在ルワンダ日本大使館 ……94
2. ジェノサイドメモリアル（キガリ/ムランビ）……102
3. カバロンドセクター・イントワーリ小学校 ……108
4. キヨンベセクター ……112
5. トゥワ村・NONKO SITE ……119
6. Radio Salus ……130
7. Enas Coffee factory ……134
8. REACH ……138

1.在ルワンダ日本大使館

担当者：古屋 亮輔

1. 訪問日時・場所

日時：2010 年 8 月 23 日 11 :00~12 :00

場所：Plot no. 1236, Kacyiru,
South Gasabo, Kigali, Rwanda
（キガリ中心地より Kacyiru 行きのバスに乗り約 15 分）

参加者：古屋亮輔、海原早紀、池上純平
井上真希、宮本寛紀、岩井天音

2. 企画目的・準備

・日本大使館のルワンダにおける活動やプレゼンスを確認する
・日本とルワンダの外交上の関係・現状について理解を深める
・日本とルワンダやアフリカとの今後の協力関係について畑中大使のヴィジョンを知る
・日本ルワンダ学生会議と大使館との今後の関係について意見を述べる
・緊急時の対応や連絡など、滞在中の安全対策を確認する

3. 訪問先概要

2010 年 1 月に開設。日本大使館が開設される以前は、ルワンダと日本をつなぐ業務は在ケニア日本大使館が兼轄する形で行っていたが、今後の業務はルワンダ国内で行われることとなる。体制が十分に整うまでの間、査証業務については、外交・公用目的、在留資格認定証明書の提示があった申請及び人道的案件等緊急を要するものに限って発給され、右以外の申請は、在ケニア日本国大使館が対応する。(外務省ホームページより)

電話：+250 (0)25-250-0884
ファックス：+250 (0)25-250-0885
ウェブ：www.emb.rw-japan.go.jp

《面会した大使館員》
畑中邦夫　駐ルワンダ特命全権大使
近藤茂　参事官
飯泉文子　専門調査員

このビルの 5,6 階が大使館になっている

4. 当日活動概要

《スケジュール》
10:45　到着、挨拶
10:55　畑中大使・近藤参事官と面会、対談
11:55　終了、お土産を渡して記念撮影
12:00　昼食に出発

《対談内容（一部抜粋)》
※日本ルワンダ学生会議の簡単な活動紹介、滞在中のスケジュールなどを伝えてから質疑応答の形式で対談を進める

海原：ルワンダに赴任されて、ルワンダという国にどんな印象を持ちましたか？
畑中大使（以下「畑中」）：色々なところで話していますが、ルワンダはアフリカでないという印象です。ひとつは国としての歴史をもつ点。ケニアなど部族としての長い歴史を持つ国はありますが、この国は王国時代から数百年の歴史がありますね。特徴はすべてのルワンダ人に共通の言葉があることと、人口密度が非常に高いことでしょう。アフリカでそれだけ養える国はなくて、砂漠の国など、他の国では難しいです。この国では昔から 300 人(/km²) 近い人口がいますが、自然環境に非常に恵まれているから可能になっています。国民はずっと農業に従事している。他の狩猟採集を行う国などの人々とはまったく文化が違う、定住民族です。その点では日本人と同じでもあります。日本人に共通する価値観もたくさんあり、それは村落意識や共同体意識が強いからです。互いにどこのだれか知っている。だからこそ 94 年のジェノサイドが起きたことは不思議でもあります。石油もないし鉱物資源も多くは見つかっていない。人材を活かすしかなく、努力しなければなりません。その点では日本が伝えられる点も多いと思います。そのようなことも意識しつつルワンダの学生と議論していただきたいですね。
古屋：価値観が共有できるというお話がありましたが、これから日本・ルワンダが二国間関係を築く上でのヴィジョンを教えていただきたいです。
畑中：一般論として、日本は外に依存せざるを得ない国です。最近若者が内向きだと言われているようですがみなさんはどうでしょう？違うからここにいるんだと思いますが（笑)。ただ、もしそうなら日本の将来は危ういんじゃないでしょうか。外で色々な人と話して良い関係を作っていくしか方法がなく、日本だけで孤立していたらやっていけないのは明らかですから、世界の約 190 の国のひとつとして、ルワンダとも関係を築くのは重要です。しかしまだ目の前の援助や投資も不十分な経済環境で 1000 万の市場を活用できるのか、儲かるから入っていけるのか、という話でもないですね。ただ私は、東アフリカ共同体が成長して市場ができて共通の貿易政策が実現する、コンゴが落ちついて一体化するなどの変化があればより進めることができると思います。すぐにとはいかないかもしれませんが。
古屋：日本政府としては周辺地域の安定のための具体策があるのでしょうか？
畑中：安定はやはり非常に重要で、日本としてはやはり不安定要因のひとつである貧困に取り組みたいです。主義主張に関係なく、反政府の方に行けば飯が食えるといった選択肢しかない人もいますし、少年兵などもつきつめれば貧しくて生活できないことが要因になる割合が高いと思います。日本は先進国の当然の責務として経済協力を進めて貧困をなくすようにしたいと考えています。この国の水準ならそれが大きな目標で、同時に、徐々にインフラの整備なども進めながら投資環境を整えていくことも重要です。この国は政府がしっかりしてい

るから、周辺の問題を解決することが安定につながるでしょう。

古屋：ルワンダの学生とも話すのですが、日本の ODA は減少傾向にあり、経済大国なのにどうして援助をしないのかと問われます。その点どうお考えでしょうか。

畑中：一国民としては、ODA の金額を減らすのは情けない話だと思います。どうして外に依存している事実を理解しえないのか、と。やり方などに対して批判もありますが、改善すべきと思います。90 年代は世界一だったのに今は 5 番目になってしまったわけですから、国全体として外に依存しているという意識が高まらないといけないとは思いますが。ただルワンダ一国に関して言うと、5 年ほど前から JICA が来て活動しており、統計的には日本の援助は右肩上がりになっていますので、そこはルワンダの学生に胸を張って言っても大丈夫です（笑）。

池上：ルワンダと外交関係を築く上で、日本にとっての国益はなんでしょうか。

畑中：一つの大きな国益は国連です。一国一票で、かつルワンダは日本に対して協力的な国ですから、そのような国を大事にしたいですね。それが目の前の国益であり、長期的には、繰り返しになりますが世界の国なしで日本は生きていけないので、友好国をひとつでも増やすことは重要です。日本のルワンダ大使館も早くから設置してくれましたし、相互主義として外交関係を作ることも大事だと思います。

岩井：日本文化、特に漫画などのポップカルチャーなどが世界中に広まっていますが、まだアフリカにはなかなか広がっていないと思います。それらに限らず、さきほどの広報文化のお話のように日本文化をルワンダで広めるプランはありますか。

畑中：ひとつひとつやっていくしかありませんが、ルワンダ人は閉鎖的なところもあり、自然の要衝に囲まれ長年自分たちだけで暮らしてきたわけで、日本の島国根性と似たところがあります。ですから外に対する関心を見極める必要もありますね。また文化にもやっぱりお金がかかりますから、ある程度の余裕がないといけません。漫画を買うにもお金がかかりますからね。それに日本を紹介するのに、漫画から始めるべきなのか、何から始めればいいのかと。一部の国で漫画がすごく人気であることはもちろん承知していますが、自分がわからないと始められないですし、若い人が何を考えているのか、学生会議を通じて教えてもらえれば助かります（笑）。

古屋：漫画などのポップカルチャーももちろん誇れるものだと思いますが、私は漫画よりも日本の歴史などから学べることがあると思っています。ルワンダでいえば「平和」が大きなテーマですので、日本の戦後復興や国家再建のノウハウを伝えることができるのではないでしょうか。

畑中：まったくおっしゃる通りで私もいろんなところでその話をしていて、日本と共通の点がたくさんあるので我々の経験も役に立つんじゃないかな、と思っています。

宮本：日本のことから少し離れますが、NHK のドキュメンタリーでも中国のビジネス面での進出が取り上げられていました。ルワンダのみならずアフリカ全体に来ているようですが、生活されていてそれを感じることはありますか。

畑中：たとえば日本料理店はまだ一軒もないのですが中国料理は数件ありますね。道

路や建物の工事もやっているので存在感はあります。ここは資源もないのに来ているのですから、資源のある国ではもっと攻勢を強めていると見ています。
ただ我々は世銀、国際機関、英米独などと一緒に、OECD の開発援助委員会で一定のルールを作ってやっているわけですが、中国はそういうところに入っていないのでルール外のこともやっています。しかしけしからんとばかり言っていても仕方ないので、私としては同じアジアの国で、なおかつ中国も日本の援助を受けて今に至っているわけですから、一緒にやっていく方が前向なのではないかと思います。具体的にはこれから考えるところですが。
池上：経済に関して、日本の企業も進出してくるかもしれないと考えた場合、これからルワンダにはどんな企業が盛んに進出してくるとお考えでしょうか。
畑中：内陸国というハンデがありますから、それがハンデにならないような業種ではないでしょうか。
近藤参事官（以下「近藤」）：私は、民間企業は良いビジネスチャンスさえあれば必ず来ると思っていまして、その意味では大企業が 100 ドル札を回収するために来るというのは欧米などに先を越されていて難しいかもしれませんが、10 ドル札、20 ドル札を回収するビジネスであれば可能性があるかなと。ルワマシラボ前大使も中小企業を連れてきたいという話はしていました。日本の経済が右肩下がりな状況で、今までは 1 億人の市場があったから成功し、逆に衰退したのかと考えると、早く外に目を向けて中小企業でも海外に出てきてくれると嬉しいです。
古屋：民間企業を受け入れる下地作りといいますか、準備は何か行われていますか。
畑中：これからハードとソフト両面でやっていかないといけませんね。ハードの面では、いまだに停電が多いですからそんな状況ではなかなか日本の企業は来ないですよね。それらを直すことも必要ですし、ソフトの面では投資の許認可をスムースにするとか、税制の面ですね。アジアの国と同じ条件ならわざわざ日本から来ないですから、それ以上を目指してやってもらわないといけませんね。
古屋：そこで日本人に対してルワンダを売り込むことは非常に難しいと思うのですが、なぜルワンダに来てほしいかというアピールのために何かありますか。
畑中：やっぱりひとつの強みとして、こちらの人はしっかり教育すれば非常に規律正しい人が多いです。もちろんお金をかけて養成する必要はありますが、養成すればそれなりの水準になる人たちだと思います。そういう意味では工場を作った場合やりやすいと思います。
近藤：基本的には大使から話があった通りなのですが、みなさんはルワンダという国を選ばれたわけですよね。なぜルワンダを選んだかというのは、また来年来る人とも話をしたいですが、大使と一点だけ違うのはルワンダがアフリカの中でスペシャルかそうでないかという点です。アフリカには 53 の国があってサバンナ・砂漠などいろんなイメージがありますが、アフリカは言語、部族、身体的な特徴など世界で最も多様性に富んだ大陸です。その中でルワンダはこのような特殊な状況になっていて、これはアフリカのひとつの顔だと思います。そう

いったことを認識してもらいたいのと、あとはやはり歴史を知らなくてはいけませんね。今の様子だけを見てルワンダを理解するより、なぜ２つ３つの民族があると言われているのか、またジェノサイド後はどうなっているのか。今は平和に見えるかもしれないですが、私が最初にここに来た 16 年前、ここは何もないすごい状態でした。そういったことも全部踏まえた上でルワンダを見ていってほしいと思います。

畑中：まあみなさんも将来経験するかもしれませんが、自分の配属になった国というのはまずその国を愛することから始まりますので、私たちもひいき目に言っているかもしれませんが（笑）。

古屋：先日（2010 年 8 月）ルワンダで大統領選挙がありましたが、日本との違いは何か見られましたか？

畑中：やはりきわめて高い投票率ですね。みなさんの世代だったら、詳しくは知りませんがあまり選挙に行ってないですよね？ここでは最終的に発表された投票率が 97 パーセントですから、信じられないですよね。それから我々から見たところでは開票も秩序正しく行われていましたし、不正はなかったように思われます。ただ野党が立候補できなかったようなこともあるので、それはこれからの課題でしょうね。

古屋：行政府が現大統領への投票を促しているという話を聞き、国民の選択の自由が少ないのではないかと思ったのですが。

畑中：それに関しては私も驚いたのですが、日本とは違って役所の方も大統領への選挙運動をやるらしく、2 週間半ほど、午前中仕事をして午後選挙応援をする、ということでした。日本の公務員はそのようなことは一切やってはいけませんからね。

古屋：日本政府はルワンダの政治体制に対する不安のようなものを持っているのでしょうか？

畑中：日本も民主主義が進んでいないといわれることはありますし、これだけ投票率が低いと私も日本の将来が心配です。そう考えると、他国にアドバイスできるような状況ではないかもしれないですね。ただ今回の選挙は与党のみで行われたカガメ大統領の信任投票の性格がありますから、次の任期中にどれだけ民主化を進められるか、野党の活動が認められるかが大事ですね。しかし民主化も自分たちだけで進めることは難しくて、周辺にコンゴのような不安定な地域もありますし、周辺が不安定な中で過度に民主化を進めようとして国内まで不安定になったら元も子もないわけですから。そこはバランスが難しいと思います。

近藤：選挙当日の様子などを見るとルワンダは本当に頑張っていると思います。ここでは銃を持った本当の意味での戦争はありませんが、ジェノサイドイデオロギーとの戦いは今でも続いているわけです。そこで欧米と同じ民主主義をやろうとしたらまた独立前後のようにぐちゃぐちゃになるかもしれません。今カガメ大統領はそれをなくすために一生懸命やっています。民主主義はもちろん重要であり否定しませんが、欧米型の民主主義をそのまま導入するのは難しいので時間をかけてやっていくしかないんじゃないかな、と思います。

畑中：世代が変わらないと記憶からは消えませんし、これから何十年も、両方にとって不幸な記憶は残ると思います。ジェノサイド後に生まれた世代が主流になるまで、

時間はかかりますね。独立時の民主化で多数派が政権を取り、少数派を弾圧したところに問題があるのでしょうが、民主主義の原則からいえば多数派が優先されるわけですからね。部族をなくして一緒にやっていこう、ということがどれだけうまくできるかでしょうね。

井上：ルワンダでは議会で女性や障害者のための議席があらかじめ確保されており、意見を述べる場所があると思うのですが、その他に日本が政治面でルワンダから学べる点はありますか。

畑中：ご存じの通り素晴らしい女性はたくさんいて、女性議員の割合は世界一ですし、大臣にも女性がたくさんいますね。逆にいうと日本はどうしてこんな状況なんですか、ということですね。ひとつ言えることは、高学歴の女性がたくさんいて活躍していることです。日本で問題なのは女性が仕事を続けられないことで、一回やめると復職も難しいですし、管理職が増えないですよね。育児の環境などは公が整えないといけないと思いますが。

井上：制度上は育児休暇をとることができても、その影響で仕事が遅れてしまったりすることが問題だと思います。

畑中：確かに日本でも、たとえば男性と女性が同じように 30 年働いて同じように管理職になれば、給料は変わらないわけですね。その点では差別はないのですが、ただ平均給与を比べると、男性と女性で大きく異なりますね。

井上：ルワンダの大きな会社ではサポートなどがあるのでしょうか。

畑中：これは難しいところなのですが、例えばこの国なら大学を卒業したら新入社員の一部の給料でお手伝いさんを雇うことができるんです。そのため女性は結婚してもずっと仕事ができるわけですね。日本では新卒の給料より高くつくので雇えませんから、非常に平等な社会ですよね。

近藤：ルワンダではジェノサイドがあったので、憲法でも労働法でも何を見ても、差別に対してすごく厳しく書かれています。労働法だけ見ても部族、性別、妊娠の有無などで決して差別してはいけないとあります。そういった面ではアフリカの中で進んでいると思いますし、女性に関しては、94 年以降財産の所有も認められています。これはそれまでのルワンダとも、他のアフリカの国とも違います。しかし日本と比べればそれはベースラインのようなもので、この国で特別女性が優遇されているわけではないかもしれません。ただ、ルワンダの女性はそういったことに喜びを感じているようですし、何よりのびのびやっていますね。

（大使執務室にて記念写真。左端が近藤参事官、左から 4 番目が畑中大使）

5. <u>感想</u>

ちょうど 2009 年 12 月～2010 年 1 月に開催された第 3 回本会議の時期に日本大使館がルワンダに開設され、来日したルワンダ人学生を交えたムニャカジ在京ルワンダ

大使との会食でも、大使が日本とルワンダの外交関係・学生交流の発展に期待している様子が伝わってきた。それから日本ルワンダ学生会議のルワンダ側メンバーも国内で積極的に活動しており、今回はさまざまな面で私たち日本人メンバーの活動をサポートしてくれた。ルワンダ側メンバーも日本大使館との協力をヴィジョンのひとつとして模索しており、今回大使や参事官から直接お話を聴けたことは非常に有意義であった。もちろん、まだ開設から間もなく外交業務に忙殺される中で学生の要望に耳を傾けてもらうことは難しい。日本ルワンダ学生会議の活動を社会に認知させ、実績を重ねることで評価してもらえるようになりたい。

また今回の訪問では、外交団としてというより、ひとりの社会人としての畑中大使や近藤参事官の日本の若者に対する思いやルワンダの今後についての意見を聴くことができた。選挙の話でまっさきに日本の若者の低い投票率に言及されたように、私たちは責任ある社会の一員であることを改めて認識しなければならない。この点では私たち日本人はルワンダの大学生から学ぶべきことが多いだろう。彼らは自国の将来について真剣に考え、社会を引っ張っていく立場にあることを自覚している。そのように考える大学生が日本にどれだけいるだろうか。政治に関心がない、選挙にもいかない、ではあまりに無責任であると思う。

そしてもうひとつ印象的だったのが、大使が繰り返しおっしゃっていた「日本は外に依存しなければやっていけない」ということである。わかっているようで忘れがちなこの事実。私たちの生活は将来に向けて当然保障されているものではなく、外国との対話や協調の上に成り立っている。その前提にあるものこそ「相互理解」なのかもしれない。互いの価値観への理解。それは東アジアの身近な国でも、ルワンダのような遠く離れた国でも同じことだろう。

コラム「博物館」

ブタレでの滞在 4 日目、前日の深夜までピースコンサートに参加して疲れていたこともあり、この日の学生会議は午後からという予定になっていたのだが、前日の充実感が残っていたためか、メンバーの起床は思いのほか早く、学生会議が始まるまでの時間を利用して近場にある博物館に行くことになった。

このルワンダ国立博物館は、ルワンダという国、そして伝統文化を紹介するものだった。おおまかにいうと 3 つのセクションに分けられる。

第 1 のセクションは、ルワンダのジェネラルインフォメーションであった。写真やジオラマを用いて国土や気候、ルワンダの特色などが丁寧に紹介されており、特に部屋の中央部分に置かれた大きな立体地図模型にはそれぞれが見入っていた。展示品の中に人口ピラミッドの図があったのだが、その一般的なピラミッド型において、20-24,25-29 歳にかけての人口が不自然に少なく、それは 15-19 歳の多さと比較するとより明白であって、間接的に 16 年前の出来事を想起させた。

第 2 のセクションは農耕や狩猟に用いた道具や日用品、土壌などの紹介だった。「wisps of vegetable fibers」＝植物素材を用いて作られた道具や日用品が多いのが目についた。全体的に道具の種類が豊富なことや、アイデアに感心する点が多々あり、日本の歴史博物館とはまた違った味わいがあって見ているだけでも十分楽しめた。

このセクションにはバナナビールについての説明もあり、私達は非常に興味を持った。是非飲んでみたいものである。しかしながら、同行していた宗像氏曰く、一般家庭で作るバナナビールは「衛生的によくないのでおすすめできない」ということだった。現地で衛生指導を行っている宗像氏にそういわれてしまえば、その魅力的なドリンクは素直にあきらめざるをえなかった。

最後のセクションは伝統的な家屋や村の構造の説明と、ルワンダダンスの際に用いるような装飾品や伝統的衣装の展示だった。

写真のような形の家の内部は見た目に比してかなり広く感じられ、なかなか住み心地がよさそうである。

装飾品や衣装は動物の毛皮を使ったものであり、きれいに加工した毛皮を腰に巻いたりするようだ。また、動物の毛皮は楽器にも使われ、心からダンスと音楽を楽しむルワンダ人のルーツを感じ取れた。

せっかく博物館ということで何か珍しいものはないかと思ってみていると、過去の紙幣が全て並べて展示してあったのだが、最初まで遡ると、一番古いものは「Congo」「Rwanda」「Urundi」共通で一つの紙幣が使用されていたというらしい。実に興味深い発見であった。

最後に、博物館らしく数名はルワンダの伝統工芸品のおみやげを購入し、満足して午後の会議へと向かった（池上）

ルワンダ版マトリョーシカ

2.ジェノサイドメモリアル

キガリ虐殺記念館

担当者：岩井 天音

1. 訪問日時・場所

日時：2010 年 8 月 23 日 13 :30~16 :00

場所：キガリ中心地より車で 20 分
（Gisozi 地区）

参加者：古屋亮輔、海原早紀、池上純平
井上真希、宮本寛紀、岩井天音
Calliope, Ephraim

2. 企画目的・準備

・ジェノサイドの歴史について、日本で勉強してきたことをふまえて、もう一度理解し確認する。
・ジェノサイドの事実が当事国においてどのように展示されているかを知る。

3. 訪問先概要

正式名称：
Kigali Memorial Centre
（この他に Gisozi Memorial Site という呼称もある。）

2000 年にキガリ市議会がジェノサイドの遺品（武器、服、遺骨）の収集を開始し、その保存のために作られた施設が由来となっている。その後”The Aegis Trust”というイギリスの団体の援助もあり、虐殺メモリアルの建設と遺品やデータの収集が進み、ジェノサイドから 10 年後の 2004 年 4 月に開館した。

屋外には虐殺被害者約 100 万人のうち 25 万人が眠る共同墓地がある。公式ホームページにはこの共同墓地に関して、”A clear reminder of the cost of ignorance”（「無知でいることが何をもたらしたか、明瞭に気付かせてくれるもの」）との記述がある。

公式ホームページ（英語）
http://www.kigalimemorialcentre.org/old/index.html

4. 当日活動概要

《スケジュール》
13:30　到着、受付
13:35　見学開始
15:50　終了

私たちは受付でデジタルオーディオを借りて見学した。

展示は主に 3 つのパートに分かれる。またすべての展示物は英語・フランス語・ルワンダ語の 3 つの言語で表示されている。

建物の大部分を占める 1 番目のパートは、ルワンダのジェノサイドについて詳しく展示されている。16 ほどのセクションに分かれており、時系列順の展示になっている。展示物は、それぞれの時代に何があったかを説明するパネル、写真、映像などが主であった。またジェノサイド被害者の衣服や殺戮に使われた武器の展示、生存者へのインタビュー映像を流すブースも設けられている。

2 番目に、第一次世界大戦前後のアルメニア人虐殺・第二次世界大戦中のユダヤ人に対するホロコースト・カンボジアのポル＝ポト派による虐殺など、世界の他の地域で起こった虐殺についての展示がある。

3 番目のパートは “Lost Future”（「失われた未来」）と題され 、子供のジェノサイド被害者について個人に焦点をあてた展示になっている。好きな食べ物・好きな遊び・将来の夢など、各個人のことが身近に感じられる情報が載っている。

建物の中心には人間が互いに絡み合っているような形をした彫刻、そして様々な格言を載せたパネルがある空間が存在する。

屋外に出ると、庭園が広がる

5. 感想

岩井 天音

これは後述するムランビの虐殺メモリアルと比較してしまうためなのかもしれないが、ここは「綺麗にまとめられた」メモリアルであったように感じた。見学後にルワンダ人メンバーのカリオペとじっくり話す機会があったが、そこで彼は「このメモリアルは外交的で芸術的なものだから、これを見ただけじゃ虐殺の本当の悲惨さは分からないね」とコメントしていた。確かにデザイン的には美しい建物・分かりやすい展示なのであるが、なるほどカリオペの言う通り、虐殺の本当の悲惨さはただなんとなく見学するだけでは感じられないと思う。もちろんこのようなオフィシャルな施設は必ず存在するべきだし、当時の資料を多く保存しているという点で、このメモリアルは充分に意味がある。

渡航前に時間をかけて勉強してきたことについて、当事国で詳しい展示を見ることができた。この訪問によりジェノサイドについてより深い知識を得るだけではなく、自分が何故ルワンダに興味を持って行きたいと願ったのかを改めて考えることが出来たので、ルワンダに到着した次の日に訪れることが出来たのは良かったと思う。

海原 早紀

ギソジメモリアルでは、他の訪問者がほとんど外国人である中、私たちはルワンダ人と虐殺を想起する時間を共にできることを非常に貴重な体験だと感じた。

様々な展示の中でも、特に頭蓋骨を並べてある展示を見て困惑した。その人々の身元は確認できているのか、なぜその人たちだけ埋葬せずに展示するのか、家族の気持ちも考えたのか。死者に対する敬意が欠けている気がして、ルワンダ人はこのような展示の仕方をどう思っているのか、気になった。

ムランビ虐殺メモリアル

担当者：古屋 亮輔

1. 訪問日時・場所

日時：2010 年 8 月 30 日 14:30~16:00

場所：ルワンダ南西部、ギコンゴロの
中心街近く
（NUR よりミニバスに乗り約 40 分）

参加者：古屋亮輔、海原早紀、池上純平
井上真希、宮本寛紀、岩井天音
SUGEE, Maurice, Calliope, Pio, Ephraim, Alfred, Olivier, Noel, Christelle,Marine, Alice Nadine, Eugene

2. 企画目的・準備

・文献や映像、伝聞でしか知ることのできなかった「ジェノサイド」を再考する

3. 訪問先概要

正式名称：
Murambi Genocide Memorial Center

ムランビ虐殺メモリアルは、ルワンダ国立大学や国立博物館（コラム参照）のあるブタレから 40 分ほど離れたギコンゴロ(Gikongoro)という場所にある。現在ルワンダ国内に 6 ヶ所あるジェノサイドメモリアルのひとつである。メモリアルは受付や資料室のある新しい建物（写真）と 1994 年のジェノサイド当時学校であった複数の土煉瓦づくりの建物から成り、また敷地内の虐殺が実際に行われたという丘にはいくつかの石碑があり、犠牲になったフランス軍兵士を悼む碑と、そこにフランス軍のバレーボールコートがあったことを示す碑が並べられている。

学校だった建物には 4 つの棟に合わせて 20 ほどの部屋があり、台の上いっぱいに遺体が並べられている。遺体は状態を保存する薬剤のため白く変色しているが、それぞれにもがき苦しんで死んだ表情や骨を折られた痕跡、子供を抱いたまま殺された様子などがはっきり見てとれる。また、安置室に入った途端、薬剤と死臭が入り混じった臭いが鼻を突く。

保存されている遺体（※
（以下、ホームページより抜粋）

この場所では、世界がそばに立ってただ見ている間に 100 万人の命が失われた、ルワンダのジェノサイドの記憶を保存している。

これらの建物は中等学校を改装したものだが、1994 年のジェノサイド以来手つかずになっており 800 体以上の遺体がそのまま放置されていた。現在、これらの部屋では

保存された人間の姿を見ることができるが、彼らは尊厳をもって葬られている。

ムランビ虐殺メモリアルはその歴史的な意義から、メモリアルの中で最も知られ、訪問者の多い場所である。ここはもともとフランス軍の支配下にあった場所だが、3日間（1994年4月19~20日）で4万人以上が殺された。その犠牲者は当時「国立工科学校」の建設中であった。

1995年に生存者が「Amagaju」というグループを結成し、尊厳ある慰霊を行うため、ムランビ以外にも様々な地域から遺体を集めようと計画した。この活動中に、フランス人がバレーボールコートとして利用していた土地からもたくさんの遺体が見つかった。1996年4月に最初の慰霊活動が行われた。ムランビでは近代的な技術を用い、訪問者にこの凄惨なジェノサイドについて再考させている。

公式ホームページ（英語）
http://www.museum.gov.rw/2_museums/murambi/genocide_memorial/pages_html/page_intro.htm

（※）今回は遺体の写真を撮影しなかったため、昨年度渡航時の写真を使用しました。

4. 当日活動概要

《スケジュール》

14:45　到着、説明を聴く
14:55　見学
15:55　終了
16:00　キガリに向けて出発

《スタッフの説明より》

ここはもともとフランス軍の拠点のひとつであり、また工科学校の開校を予定された場所であった。しかし開校する前にジェノサイドが始まり、周辺から多くのツチが逃げ集まってきた。そこにやってきたインテラハムウェ（フツ民兵）が2週間にわたり周囲を包囲して水や食料を遮断、ツチが衰弱したところを一斉に攻撃された。この時に4万人が殺された。インテラハムウェによる攻撃が終わった後、フランス軍は残された遺体をヘリで運びだして森に落としたり、丘に埋めてその上にバレーボールコートを作ったりした。そしてフランス軍はこの場所が安全であると周辺のツチにアピールしたため、ツチは再びここに集まってきた。しかしインテラハムウェの再度の攻撃を受け、新たに1万5千人が犠牲になった。

5. 感想

古屋 亮輔

前回、2008年の渡航でも私はキガリから近いンタラマ(NTARAMA)、ニャマタ(NYAMATA)という二つの虐殺メモリアルを訪問した。ンタラマはもともと教会で、その天井は爆弾の破片を受け、穴が空いていた。ニャマタには被害者の服や頭蓋骨が並べられていた。当時の私にとってこれらの経験は、ルワンダ虐殺の悲惨さを実感するのに十分であった。しかし、このムランビ虐殺メモリアルにはその経験をはるかに超える「リアリティ」があった。

等身大の人間の肉体が訴えてくるものは服や骨よりもはるかに大きい。頭髪や表情、傷跡を見ると、現実に生きていた彼らが苦しみ、死んでいったことが嫌なくらいに伝わってきた。実際4部屋目あたりまで来る

とあまりの心苦しさと鼻を突く臭いに耐えられず、早く部屋から出たいとばかり考えていた。

しかし部屋から出ると、泣いている日本人メンバーと慰めているルワンダ人メンバーがいた。その様子を見て私は、リーダーとして、ここへ来た人間の責任として、ここで起きたことを知る者として、この部屋に背を向けてはならないと思った。

そこからはすべての部屋ですべての遺体をよく見た。「これが私たちの国の歴史だ」というルワンダ人メンバーの言葉を受け止め、この場所が伝えるものすべてを自分の記憶にとどめておきたいと思った。そしてもうひとつ気になったことがある。かつてバレーボールコートだったという丘で説明を聞き終えて移動しようとしたとき、近くで遊んでいた子供が最後尾の私たちのところに寄ってきて「100 フラン（約 15 円）くれ」とフランス語で話しかけてきた。その子供たちはこの近くに住んでいるようである。今回の学生会議で知ったことなのだが、子供たちは学校でジェノサイドに関する教育を受けることがないらしい。両親などから話を聴くから問題ない、とルワンダ人大学生は言うが、客観的な歴史を知らずに育ってきた子供達はこの場所がなんなのか、本当に理解できているのだろうか。もちろん、メモリアルの敷地までの間に仕切りはないため建物の中を見ることはできる。きっと何度も見たことがあるだろう。しかし、無数の遺体を見た彼らは、それを自分たちと同じルワンダ人が犯した過ちとして考えることができるのだろうか。「和解」という国家の大きなテーマのためにジェノサイドの深い部分に関する公教育を避けるということは理解できなくもない。しかしそれが子供たちの心理にどう影響を与えるのか。疑問であり、不安であった。

井上 真希

五万五千人もの人々が殺されたといわれるムランビ虐殺記念館にて、私達は無数もの被害者のご遺体と「対面」した。ご遺体が眠る小部屋に初めて入ったとき、私は五感を通して衝撃を感じた。静寂。窓から射し込む光。乾いたような、よく分からない異臭。自分を囲むようにして並べられた夥しい数の白く干からびた等身大の人・人・人。

その光景の余りの非日常性に、私はもう、どうしようもなくなった。その場から立ち去りたいという衝動があったが、それを堪えて一人ひとりをよく見てみた。ご遺体の中には乳児を抱きかかえる女性や、頭蓋骨を割られた者、ロザリオを握り締めている者もいた。彼らの顔には共通して、「まだ生きたい」という念がはっきり表されていた。「何故、私たちは殺されなくてはいけなかったの？もっと生きたかった。」彼らはそう訴えているように思えた。

いくつもの小部屋を回るうちに、色々な感情がこみ上げてきて、私は取り乱してしまった。悲しみで涙が止まらない私に対して、一緒にいたルワンダ人学生は優しく「大丈夫だよ」と慰めてくれた。「もしかしたら、ここにいる彼らも一緒に犠牲になっていたかもしれない」と考えると、本当に居た堪れなくなって、目が合わせられなかった。また、学生の中には「マキ、強くならなきゃだめだよ」と諭す者もいた。彼は、この地で父、母、姉、叔父、叔母、友人を失っていた。彼には虐殺された肉親達の遺体さ

えもどこにあるか分からないそうだ。「強くなれ」それは大切な人を一度に失った悲しみを乗り越えるために、彼が自分自身に繰り返し言い聞かせてきた言葉のように感じられた。

一人ひとりの命はかけがえのないものなのに、何故人間はこのような愚かなことをしたのか。私達にはこの疑問を徹底的に追及する使命がある。そして、私達はこの人類の過ちを二度と繰り返してはならない。私は平和への誓いをしっかりと心に刻んだ。

海原 早紀

遺体が安置されている部屋に入ったとき、悲しい歴史が目の前にあるのはわかるのだが、それを自分の中でどう解釈したらいいかわからなかった。そんな私にルワンダの学生は積極的に説明をしてくれた。「遺体が手を挙げているのは、降参のポーズだから」「こっちのは赤ちゃんを守るような姿だね」。そうやって一通り部屋を見学したあと、建物の周りの風景をぼんやり眺めていると、小さな子供たちが丘のふもとで遊んでいるのが目に入った。目の前には静かな丘の風景のなかで無邪気に声をあげるルワンダの子供たち。後ろには、無残にも殺された子供たちの遺体。ここで初めて「今自分の目の前にいるような子供たちが、ジェノサイドでは殺された」と気付き、その事実の重みがのしかかってきた。悲しみ、怒り、困惑、どの感情かもわからないような涙は初めてだった。こんなに平和な世界でも、こんなことが起こりうるという矛盾がショックだった。

ギコンゴロに来て、ジェノサイドがやっと本当に起こったこととして受け止められた気がした。あんなにきれいな丘の上に立つ学校が、50000 人もの人が死を遂げる場所になるなんて、人間のすることは本当にこわいと思った。私だって、当時のルワンダに生まれていたら殺しに加担していたかもしれない、と想像してしまうくらいだった。

岩井 天音

ルワンダと関わり初めて日も浅かった私は訪問先についての知識も乏しく、渡航前のミーティングでは「ギコンゴロって“骨”がたくさんある所だっけ？」などと軽々しく発言していた。今から考えると、私は本当の意味で虐殺の悲惨さを理解していなかったのだろう。

私がギコンゴロで見たのは「骨」ではなく「人々が生きた証」であった。確かにそこに並ぶのは頭蓋骨や骨格だったのだが、一つひとつの遺体からは悲痛な叫びが伝わってきた。気のせいではない、確かに訴えかけてくるものがあったのだ。

私が今にも泣きそうな面持ちで見学していると、ルワンダ人メンバーの Pio が横にやってきて”Be strong.”（「強くあれ」）と声をかけてくれた。ルワンダ人が隣にいてくれることは心強く、肩を抱いてくれる手がとても温かかったことを覚えている。後で聞いた話だが、多くのルワンダ人が日本人メンバーに対して”Be strong.”と声をかけてくれたようだった。しかし私には何故ルワンダ人学生がそのような言葉をかけられるのか分からなかった。「強くある」とは一体どういうことなのか？この言葉を本当の意味で理解するのには、時間がかかりそうだ。

見学中、通路から建物の外を見ると、やわらかな太陽の光が降り注ぐ中で子供たちが無邪気に遊んでいた。外に広がる光景と部屋の中にある史実のギャップ。それに気が付いた瞬間、私は涙が止まらなくなった。メンバーの中には肉親がここで殺された人もいた。16 年前にここで殺されたのは、もしかしたら今そこで遊んでいる子供たちだったかもしれない、今私の隣にいる大学生だったかもしれない。虐殺が奪った尊い命、その感触が私の中ではっきりと生まれた。それと同時にルワンダの"Never again"（虐殺を二度と起こさないこと）を心から願えるようになったと感じる。

3.イントワーリ小学校

担当者：海原 早紀

1. 訪問日時・場所

日　時：8 月 24 日（火）11：00~12：30
場　所：東部州カヨンザ郡
　　カバロンドセクター
参加者：古屋亮輔、海原早紀、池上純平
　　井上真希、宮本寛紀、岩井天音
　　宗像淳史、Ephraim, Pio, Alfred,
　　Maurice, Calliope, Christelle

2. 企画目的・準備

今回の小学校訪問は全て当団体の OB であり、現在協力隊員としてルワンダに赴任中の宗像淳史に全ての事前交渉をお願いした。

小学校の校長が国際交流に意欲的であると聞いて、日本についてのプレゼンテーションを用意していった。

3. 訪問先概要

（宗像 OB による情報提供）

イントワーリプライマリースクール（Intwari primary school、日本の小学校に相当、以下イントワーリ小学校）は、子どもに関わる各機関・団体との連携、発達/発育方針、教育/教科課程、アドボカシーなどを通じて教育及び子どもの権利を促進する父母主体の私立小学校である。ジェノサイドで家族を失った経験から次世代の子どもたちに同じような経験をさせたくないと想い、ウィヒルウェ・ジャンデデュー（UWIHIRWE Jean de Dieu）現校長が 2006 年に保育所、及び父母委員会（日本の

ＰＴＡに相当)の協力により 2007 年に現小学校を設立した。

現在、180 名の子どもが在籍し、1 学年それぞれ約 30 名で構成されている。教員数は、6 名（うち、ウガンダ人教師１名）でそれぞれ英語、フランス語、ルワンダ語、算数、科学、社会の授業を担当している。また、父母委員会が学校の活動を評価及び指導している。

ジャンデデュー校長は 1979 年生まれ。ストリートチルドレンセンターのボランティア勤務、エイズ蔓延予防対策などを行うカリブ基金の代表、保育所の発起人を経験。現在はイントワーリ小学校及びカバロンドセクター預金組合議長を務めている。

校長が現在最も力を入れたい授業、事業として国際交流事業があげられる。海外に住む同世代の子どもたちと手紙や絵画などを通じて、異なる習慣、風土、文化への理解、豊かな想像力の形成、ひいては貧困、社会的虐待など社会的問題への取り組みへの萌芽が期待されている。

4. 当日活動概要

・歓迎

正門を通ると、生徒が整列して歌で歓迎してくれた。

私たちが自己紹介をすると、子供たちは声をそろえて私たちの名前を呼んでくれた。英語で喋ったことはほとんど通じていることに驚いた。

まず、お互いの国歌を歌った。ルワンダの国家は、子供たちでも元気に歌えるような明るい曲、という印象だった。

・日本についてのプレゼンテーション

日本人４人から、日本文化について紹介をした。

（１）日本の四季　　（宮本）

それぞれの季節の写真を見せながら、特徴を紹介。春は、桜の咲き乱れる写真。夏は、日差しの照りつける海の写真。秋は、穏やかな紅葉の写真。冬は、雪の降っている山の写真。

特に印象的だったのは、「雪は知ってる？」と聞くと「もちろんだよ」といった反応をしてくれたことだ。

（２）日本の食事　　（池上）

まず、日本人の主食である米について、おにぎりの写真を見せながら紹介した。そして、日本は海に囲まれているので、魚が

豊富に獲れること。イカ焼き、寿司の写真を見せながら、様々な調理法があることを説明した。寿司は今世界中で有名かつ人気な日本料理であり、その国々の文化に合うようにアレンジされて普及していることも付け加えた。

（3）日本の衣と住　　（井上）

日本人は普段はルワンダの人々と同じような洋服を着ているが、着物といった伝統的な衣服も未だにお祝いのときやお祭りのときに着ていることを紹介した。

日本の家については、地震対策のため石ではなく、木でつくられていること、内装としては畳とか有名であることを説明した。

（4）日本のアニメキャラクターについて　（岩井）

日本の子供たちに広く有名なアニメキャラクターやマスコットキャラクターを紹介した。今回このトピックを選んだのは、ルワンダの小学生に、日本の同世代が親しんでいる身近な娯楽の対象を紹介したかったからである。具体的には「ポケットモンスター」より「ピカチュウ」と「機動戦士ガンダム」より「ガンダム」を取り上げ、イラスト見せながら「頬から電気を出す」「宇宙を飛ぶ」など簡単に特徴を説明した。

・ダンス交流

子供たちがダンスを披露してくれた。これはルワンダ王国時代、王様の前で披露された伝統ダンスである。

王様が飲み物を飲んでいて、その周りの家来が警護をしている。後日、INDANGAMUCO も同じスタイルで踊るのを見た。

お返しに、私たちもソーラン節を披露した。

・記念品交換

最後に子供たちの代表がスピーチをしてくれた。そして校長から「日本の小学校と関係を築いていきたい」という要望を受け、手紙を預かり日本へ届けることを約束した。現在、この小学校と長期的に交流を続けていける日本の小学校を探している。

私たちは日本から持参した手ぬぐいにメッセージを書いて贈呈した。

５．感想

岩井 天音

予定の時間からだいぶ遅れたにも関わらず、私たちがバスを降りて最初に目にした光景は、児童たちが私たちを興味津々の眼差しで見つめ、綺麗に整列をして待っている様子だった。アフリカに行った日本人が現地の小学生に歓迎される、という構図はドキュメンタリーなどで何回か見たことがあり典型的な図だなと思っていたのだが、子供たちが私たちを待っていたという事実が単純に嬉しく、色眼鏡で見ていた自分を反省した。

子供が踊るルワンダの伝統ダンスを見るのは初めてであったが、腰や手の動きは大学生のそれに劣らぬほどしなやかで美しかった。誇りを持って踊っていることが伝わり、ルワンダのダンスの伝統がしっかりと引き継がれていることが分かった。また、私たちが行った日本紹介のプレゼンテーションでは、屋外という環境もあってか若干集中力が切れていたようだが、子供たちは初めて見る日本の様子に興味を持ってくれたようだった。

小学校訪問の中で一番嬉しかったのは、児童から手紙をもらったことであった。一枚一枚、丁寧に書いてくれたことが分かる心のこもった手紙だった。今回は JICA 職員の方の協力の元に小学校を訪問出来た訳であるが、この手紙をきっかけにしてこれから先、団体として日本とルワンダの小学校間の交流にも関わることが出来たらいいと思う。

宮本 寛紀

この日は、宿を出発する時刻が 1 時間ほど遅れてしまうというハプニングがあったものの、無事に小学校に着くことが出来た。小学校の校門からきれいに整列したたくさんの子どもたちが見えた瞬間、思わず声を上げて感動してしまった。

彼らは見ず知らずの私たちに、歌を歌ってくれたり、伝統衣装をまとってダンスを披露してくれたりと、とても温かく迎えてくれた。

そして、私たちはソーラン節を披露することになっていたのだが、今回の渡航で、人前で踊るのはこの時が初めてであった。どんな反応をしてくれるのか、多少ながら不安でもあったが、なんとか盛り上がってよかった。踊り終えた後も、子どもたちが「どっこいしょ～どっこいしょ～」と満面の笑みで真似をしてくれ、本当に嬉しかった。ダンスや歌は、コミュニケーションの一つとして測りきれないパワーがあるように思えた。

また、ここで出会った子どもたちもそうだが、道を歩いていても子どもたちはいつでも笑顔でいて、輝いているように見えた。

4. キヨンベ (Kiyombe)

担当者：井上 真希

１．訪問日時・場所

日時：8 月 24 日（火）15:30~18:00

場所：東部州　ニャガタレ郡

　　キヨンベセクター

参加者：古屋亮輔、海原早紀、池上純平

　　井上真希、宮本寛紀、岩井天音

　　Ephraim, Pio, Alfred,

　　Maurice, Calliope, Christelle

２．訪問の経緯

キヨンベ村への訪問は私たちによって事前に計画されていたものではなく、ルワンダ到着後に Calliope に「Indangamuco の OB である Mwumvaneza Emmanuel 氏は村の村長(Executive Secretary)をしていて、私たちのことを歓迎してくれるというが、会いに行くか？」という声がきっかけだった。私たちは一般的なルワンダの村を見てみたいと思っていたので、この招待を受け入れた。

3. 当日活動概要

・キヨンベ村への道のり

Calliope からキヨンベ村への道のりはかなりあるとあらかじめ聞かされてはいたが、カヨンザ群のイントワーリ小学校からニャガタレ群に位置するキヨンベ村まで、実に 3 時間もかかった。キヨンベ村に続く道は、舗装が行き届いておらず、でこぼこ道や急斜面に面した細長い道などかなり険しかった。

・ 熱烈な歓迎

長旅からようやく解放され、やっとキヨンベ村に降り立つと、丘の上から村人のにぎやかな歓声が聞こえてきた。行ってみると、そこには村中の人々が集まってきていた。

そして、到着した私たちの姿を見て声をあげたり手拍子したり大歓迎をしてくれた。私たちが村役場見学をしている間もずっと集会場で待っていてくれた。

・村役場見学

Emmanuel 氏は村人たちによる歓迎会の前に、村役場の内部を見学させてくれた。案内してくれた村長室にはシンプルでデスクやパソコンが置いてあった。

前の写真で Emmanuel 氏が持っているのは、村長室に飾ってあるルワンダ政府から授与されたトロフィーである。これは、キヨンベ村が環境を配慮してビニール製の袋からバナナの皮など自然の素材から作った袋を使用するようになった最初の村として表彰されたときのものだそうだ。トロフィーを抱える Emmanuel 氏の顔はとても誇らしそうだった。

・ 歓迎会

村役場の見学後、村人による歓迎会が行われた。まず、村人代表の男性によって歓迎のメッセージから始まった。その後に Calliope によって NUR の学生と私たちが紹介された。

キヨンベの村人は盛り上がったとき、何故か”Aho!” (Oh yeah!”といった意味らしい) という掛け声をする。私たちは真似して自分の名前の後に、”Aho!”と叫んでみたのだが、これは非常にうけた。

村の側からは、村長のほかに販売部長と青少年の代表が紹介された。JRYC の代表として、古屋と Calliope が挨拶をした。

次に、村人による歓迎の歌・踊りが披露された。その場では分からなかったが、後に聞いたところによると、村人たちはみんな、「ようこそ、ようこそ。私たちはあなた方を誇りに思います。あなた方の訪問を

誇りに思います…。」といった内容の歌を歌っていてくれていたそうだ。踊りも両足を打ち付けるような激しいもので、私たちも巻き込まれ、共に楽しく踊った。

このように盛大に歓迎を受けた私たちは、何か御礼がしたいと思い、ここでもソーラン節を披露させてもらった。

・ 青少年協力団体の活動見学

歓迎会の後、キヨンベ村の青少年協力団体の一つである”INITANGO YUBUMWE”(the starting of unity and development)の活動を見学させてもらった。この団体は 17 才から 19 才までの女子のみで構成されており、下の写真のような小さな部屋でセーターやマフラーなど毛織物の製品を作っている。

生産した商品はキヨンベ村内や周辺の村で売りに出され、全体の収益は村の発展のために使われるそうだ。見学のおわりに INITANGO YUBUMWE の皆さんが私たちそれぞれにセーターやマフラーをプレゼントしてくれた。思いがけないご好意にとてもあたたかい気持ちになった。

この村には女子の協力団体だけでなく、男子だけで構成された”TWIKANGURE”というグループもある。彼らはなんともユニークなことに、キヨンベ村で頭剃りを無料で行うサービスをしているそうだ。

・宴会

訪問の最後にキヨンベの村人は私たちのために宴会を開き、ヤギ肉の串刺しや飲み物をふるまってくれた。

宴会は Emmanuel 氏の歓迎のことばに

よって始まった。初めて食べるヤギ肉やルワンダで定番のファンタオレンジを村人とおしゃべりしながら楽しんだ。私の隣に座っていた村人 Leonard は最初シャイで物静かだったが、話しかけるとあまり得意そうではない英語で学校のことなどゆっくり話してくれた。

宴会が盛り上がってくると、Emmanuel 氏がキヨンベ村民として、歌を披露しようと自ら立ち上がった。それに他の村人や Calliope、Ephraim らが加わって部屋の中へ彼らの歌声でいっぱいになった。それぞれが共通するルワンダの文化を誇りに思っている様子が伝わってきた。

次に、Emmanuel 氏がキヨンベ村の歴史的背景と現在について話してくれた。

<Emmanuel 氏のお話>

「キヨンベは人里離れた土地だといわれています。実際に過去の政権では見放されていました。ルワンダの歴史には今までに 6 名の大統領が存在するが、キヨンベの人々は現在のカガメ大統領たった一人しか知りません。しかし、過去 5 名の大統領ですらキヨンベのことを知らず、キヨンベはウガンダの一部の地域だと認識していました。一方、ウガンダ側はキヨンベをルワンダの一部だと認識していました。ゆえに、キヨンベは両国から忘れ去られていたのです。

しかし、これまでカガメ政権はキヨンベに対して取り組みを見せてきました。1990 年の改革の戦線の際に RPF（ルワンダ愛国戦線）がウガンダよりこの地域を通過したときが、初めてこの土地は認識されるきっかけでした。そして、現政権においてキヨンベはかつて取り残された地域として、発展のために取り組みが行われることになったのです。

以前、村民の中にはまるで動物のような生活をしている者もいました。彼らにとって食糧を得ることすら難しい状態でした。しかし、近頃のキヨンベ村民はあらゆる活動や発展をとても嬉しく思っています。最近では、小学校レベルから大学レベルまで教育を受ける機会があります。私たちに判明したことは、あらゆる進歩は教育を通して押し進められる、ということです。これは私がキヨンベの人々に言い聞かせてきたことです。青少年はこの機会を活かさなければなりませんし、私たちは青少年のアイディアを活かすべきです。

最後にもう一度歓迎の意を表します。あなた方がこのキヨンベ村を訪れたように、キヨンベの青少年も一度日本がどのような場所か見るために訪問する準備はできています。」

最後に JRYC を代表して Calliope がスピーチをして宴会は終わった。

<Calliope のスピーチ>

キヨンベの若者は自分たちの国や村の発展のために活動しています。貧困がなくなるために戦い、状況を改善しようとしています。JRYC メンバーにとって、日本での滞在の間何ができるか考え、アイディアからアクションへと一歩踏み出すことは課題です。それは我々が”take action”しなければいけないことを意味します。ただ歌ったり、踊ったり、お互い訪問し合ったり…といった文化交流も言うまでもなく重要ですが、我々は何か行動を起こさなければなりません。これは非常に大切なアイディアです。

JRYC メンバー、また、INDANGAMUCO のメンバーとしてあなた方に感謝し、またキヨンベ村に戻ってくると約束したいと思います。お互いアイディアや状況を共有するためのネットワークはとても大切です。だから今回のあなた方の歓迎にとても感謝しています。ここにいる日本人の学生も今日の旅を楽しんだことだと思います。

今日のことはまだただの始まりに過ぎません。私たちは更に活動を促進させ、ネットワークを発展させていきたいと思います。Ahoo!!

4. 感想

海原 早紀

到着するとすぐに、村人の歌声が聞こえてきた。老人から小さな子供まで、土埃が舞うくらいステップの激しいダンスを踊っているのに、インダンガムチョも圧倒されているようだった。英語がわからない大半の村人との直接会話できないのが残念だったが、私たちが喋ることやソーラン節には興味を持ってくれたようだ。

村のリーダーたちが自分の村に誇りを持って案内してくれるのが印象的だった。村長の部屋にトロフィーが展示されていたり、セーター作りのプロジェクトに取り組んでいたりと、常に村を上げて生活の向上に取り組んでいることを感じさせた。

今回、ルワンダ国民の大多数を占める農民人口の住む農村を訪問できることに、私は興味を持っていた。学生会議の活動ではどうしてもエリート層にあたるルワンダ人との交流になることが多いので、本当の意味でルワンダという国を知るために農村の人々がどのような生活をしているのか知りたかったからだ。そして実際訪問してみての印象は、「村としてまとまっていて、楽しそうに生活している」というところだろうか。私たちを客人として最高のもてなしをしてくれたので、良い印象しか残らなかったのだが、彼らの住居や食事、そして仕事場である畑を見学できなかったので、本当はどれだけ貧しいのか今回の訪問だけで判断することは難しい。

井上 真希

キヨンベ村の人々はみんな本当に暖かく私たちを迎えてくれた。日本からはるばるやって来たとはいえ、本当はただの学生なのに、ここまで歓迎してくてる様子を見て、何ともいえない気持ちがした。私たちが歩いて移動するときには、数えられないほど多くの子どもたちがぞろぞろついて来た。

宴会が開かれる建物まで歩く途中で、ある青年と目が合ったので、「ソーラン節はどうでした？」と話かけてみた。すると、「はい、とても楽しみました。でもあなたと友達になりたいのです。どうやったらなれますか？」という返事がかえってきた。私は反射的に「もう友達だよ！」と答えた。すると、彼と周りの子ども達が笑ってくれ、彼は名前を教えてくれた。このときのことは強く印象に残った。なぜなら、私と彼の間で小さな相互理解が芽生えた気がしたからである。

歴史的にルワンダとウガンダ両国から見放され、長いこと発展に縁がなかったキヨンベ村は現在あらゆる画期的な取り組みを取り入れ、日々進歩している。私が出会ったキヨンベの青年も今後の村の発展を支える力となっていくのだろうか。そう思いを馳せながら村を後にした。

コラム ドキドキ!!バス移動

ルワンダでの移動手段といえば、タクシー（見た目は、日本でいう小型バスくらい）である。仕組みは、行き先が決まっていて乗り込んだり、１台を貸し切れたりする。特に、キガリ市内ではたくさんのタクシーがあり、１人 150RWF(ルワンダフラン)=30 円くらいで乗れる。何がドキドキなのかというと、これでもかと言わんばかりに人が乗り込んでくるため、車内はパンパンで、常に隣の人と密着！！「これ以上乗れないだろう」という段階から３、４人乗ってくるのは当たり前。最初はビックリしたが、後半になると逆に、その状況が心地よくもなってきた。また、歌が大好きなルワンダ人メンバーは、１人が歌い出すと、次から次へと続き、最終的に全員で大合唱になっていたことも面白かった。

※ちなみに、この写真はまだまだ余裕がある車内。

コラム　「アフリカンタイムの伝染」

世界中にはその土地や気候、文化に根付いた習慣や暮らしがあるのはもはや当たり前のことであるが、それは時間という概念においても例外ではないらしい。しばしば時間の概念の違いは「P タイム」と「M タイム」の対比などを例にして挙げられるが、これは、私達の持つ「ジャパンタイム」がルワンダに流れる「アフリカンタイム」に屈するまでの物語である。

アフリカンタイムは、活動初日から猛威を奮っていた。その日、午前中に日本大使館を訪問する予定だった私達は、ルワンダ人メンバーと St.Paul で待ち合わせをしたのだが、予定時間になってもルワンダ人メンバーが全員集まらない。そうはいっても訪問の予定時間は決まっている。「大丈夫だろうか？」まだその時はそう思っていた。

心配する我々の心配をよそに、徐々にアフリカンタイムはその勢いを増していく。その翌日のこと、朝から小学校訪問の予定だったのだが、またもや St.Paul での集合時間に人が集まらない。結果的に、私達が小学校に到着したのは予定時刻より 1 時間以上経過した頃であったと思う。だが、その車中ではそれほど悲観的な空気ではなく、むしろ楽しい雰囲気が圧倒的に勝っていた。「しょうがない、なんとかなるだろう。」今思えば、この時すでに伝染は始まっていた。

アフリカンタイムは、場所を選ばない。それはブタレでの学生会議でも同様であった。8 時に会議開始と言っていても、徐々に人が集まりだしてプレゼンテーションが始まるのは 9 時前後になる。それでも数人のルワンダメンバーはきちんと時間通りに来ていて、それに関してはむしろこちらが驚いた。ランチタイムともなれば、強制的に切り上げるまでずっとゆっくりし続けるのではないかと思うほどのんびりしていた。

そして、アフリカンタイムのそうした努力の積み重ねはついに結実する。

ある日の朝、会議の開始予定時刻である 8 時になっても、私達はまだパジャマを着て部屋の前でのんびりしていた。そして、誰一人として焦る様子はない。「朝ごはん買いに行こう」とまでいう始末である。「どうせアフリカンタイムの 8 時だから、まだ 1 時間くらいあるよ。」ついにジャパンタイムが屈した瞬間だった。

ただし、アフリカンタイムによってもたらされた良いこともあった。遅れてくるルワンダメンバーを待っている間、先に来ていたルワンダメンバーとの他愛もない会話やちょっとした遊びなど、リラックスした非常にいい交流となっていた。もし全員がジャパンタイムで全て行動していたら、こういった穏やかな時間は得られなかったかもしれないと考えると、結果的にはこれでよかったのではないかと思う。

最後になるが、このコラムを読んで、間違った誤解をしないで頂きたい。これは決して私達が怠惰になったというのではない。あくまでも「現地の慣習に適応した」ということなのだ。「郷に入っては郷に従え」とは、よく言ったものである。

（池上）

5.トゥワ村（NONKO SITE）

担当者：海原 早紀

1. 訪問日時・場所

日　時：2010 年 8 月 25 日 11：30~13：30
場　所：NONKO SITE
（キガリ中心部から車で約 15 分）
参加者：古屋亮輔、海原早紀、池上純平
井上真希、宮本寛紀、岩井天音
Pio, Alfred, Ephraim, Maurice,
Calliope, Christelle

2. 企画目的・準備

・目的

ルワンダについて勉強をすると必ずツチ・フツの対立構造を学ぶことになるが、第３の民族のあるトゥワに関しては、歴史的な記述から排除されているように思える。

本企画ではトゥワの村を訪問、住民へのインタビューを通して、彼らの生活・文化・社会的地位・経済状況などについて学ぶ。また、今回の訪問を実現させてくれた NGO「COPORWA」に話を伺うことによって、彼らの活動について学び、これからトゥワの人々の生活を向上させるにはどんな政策が必要なのか考えることが目的である。

・準備

トゥワ訪問の希望をルワンダメンバーに伝えると、準備は全て現地で済ませてくれた。許可がないと村を訪問できないので、NGO「COPORWA」と連絡を取って、インタビューの質問まで細かい打ち合わせをしてくれたようだ。CORPOWA は全国のトゥワを支援しているが、今回は滞在していたキガリから近い Nonko という村を選んでくれた。

3. 訪問先概要

・トゥワ

ルワンダの人口の１％ほどにあたる民族である。トゥワの人々には様々な呼び名がある。「土着民族」(indigenous population)、「バトゥワ」(Batwa)、「焼物師」(potters)、「ピグミー」(Pygmies)、「歴史的に差別されてきた人々」(historically marginalized population)。昔から森に住み狩猟採取の生活をしていたが、自然保護や国立公園の設立を理由に森から追い出されてしまった。土地を奪われ、新しい生活を強いられた彼らは貧困・差別に苦しんでいる。現在の収入源は、伝統的な陶芸で壷やレンガを作って売ること、わずかな家畜を持つことだけである。

・NONKO 村

今回訪問した NONKO という村には 16 の家族、68 人が住んでいた。陶器（壷）を売って得る収入が主で、農業を営む土地はない。牛や鶏といった家畜はごく少数であった。

村の土地は 60 年代に裕福なトゥワの男が所有していたもので、ルワンダ内戦のときに彼が逃げた後、その子供たちが他のトゥワの人々と分け合うようになったそうだ。キガリから車で走って 30 分程度、大通りから小道に入ってすぐの林の中に村があった。

上の写真の道を登ると、村が現れる。

・COPORWA

この村を支援している「COPORWA」(The Community of Potters of Rwanda)はルワンダ全国のトゥワの権利の主張・保護、生活の向上を目指して活動する NGO である。活動分野は人権、教育、暮らし、文化、HIV/AIDS、ジェンダー、環境、と多岐に渡る。

4. 当日活動概要

まず、ルワンダ学生・CORPOWA の職員が私たち日本人を紹介してくれた。もともとトゥワの人たちは内向的で、自分たちについて他人にたくさん話すような文化はない。しかし今回は情報をできるだけ提供してくれるよう頼んでくれた。私たちが今日トゥワの人々の問題を解決できるわけではないが、問題を把握することで将来解決に繋がる提言ができるかもしれない、メッセンジャーだと思って今の情況を話してくれるよう、お願いした。

・インタビュー

次に村人から立候補者を募り、インタビューを実施した。

インタビュー質問

（1）毎日の生活について。何をして過ごしていますか。

（2）あなたにとって一番大切なものは何ですか。

（3）最近嬉しかったこと、悲しかったことを教えてください。

（4）選挙には行きましたか。

（5）今一番欲しい物はなんですか。

（6）あなた自身は「ルワンダ人」だと思いますか。

※自由な対話形式でインタビューを実施したため、全ての質問に対する答えを得ることはできなかったが、質問以外の話も聞くことができた。（1）～（6）上記質問以外の内容は（Q）で記載する。

MUKACOMITE　女性 32 歳

（1）毎日の生活は決して良くない。眠る場所も快適ではなく、食事は一日一回。一種類しか作っていないが、壷を売って暮らしている。一つの壷を作るのに 3 日かかる。ムリンディという市場に壷を売りに行くが一日に２，３個しか売れないので、一日 700RWF 程度の収入しかない。

牛と鶏は、近所の村人に借りている牛。その彼の世話をする代わりにもらった。生まれる子供はもらえることになっている。夫、3 人の子供と、もう一人義母の子供を養子にとって暮らしている。実子のうち 2 人と養子が学校に行っていて、もう一人はまだ赤ん坊。

（4）選挙には行った。現在の政府がもっと助けてくれることを願う。ジェノサイドのときはもっと生活が厳しかった。例えば

家を壊されたりした。
（５）欲しい物は、良い家と、違う職業につけるようにお金。でも町の人とは一緒に住みたくない。
（６）フツ、ツチ、トゥワはみんなルワンダ人で、違いなど無い。彼らが持つものは、分け合っている。今の政府は前と違う。例えば前の政府は学校に入学するとき人種を聞かれたが、今は無い。

MOKABIHOYIKI Claudine　女性 45 歳
MOKA MUGENZI Dorothee 女性 22 歳
（親子）

（１）普段の生活は良くない。例えば、子供を病院に連れて行くこともない。日曜日には陶器を売りに行く。Dorothee の息子の一人は勉強、働くことを拒否した。雨が降ったとき、家の中まで浸水してしまう。
（４）選挙にも行ったし、現在の政府には満足している。

HABIMANA Sudi　男性 28 歳

（１）普段は壷(pot)や(stove)を造っている。それを作る粘土が大事。壺は 100RWF で、(stove)500RWF で売れる。
（２）自分にとって大切なことは、創造的な生活を送っていること。働いていること。
（４）選挙にはもちろん投票した
（５）今欲しいのは、生活に最低限必要なもの。電気、家屋、医療、教育。
（６）自分のことは”ルワンダ人”だと思っているルワンダは好きで、ルワンダで生まれたが、前までは政府に見放されていた。国が持っている資産の恩恵を受けていない。

MPAGAZEHE Jean Paul　男性 25 歳

（１）陶芸品(pot, stove)を造っている。
（３）最近は happy ではない。たくさんの問題を抱えているから。
（５）今、最も欲しい物は家。住んでいる家は自分たちで作ったものだ。
・家族構成は、6 人（父・母・姉妹・兄弟）だが、2 つの家族で同じ家に暮らしている。

UWANTEGE Josionne　女性 38 歳

（１）陶器を造っている。
（２）宝物は無い。食べていく土地も無い。
（３）売れしいときは、陶器が売れたとき。悲しいのは、子供も夫もいないこと。
（４）はい。
（５）土地がほしい。
（６）私はルワンダ人ではない。’Batwa’という呼び方は「人間」を意味してない。土地を所有していないということも、死んだとき埋めるところがないので人として思い出が残らないということだ。現状は集合墓地を sector に勧められて買わなければいけない。
（Q）政府の対応についてどう思うか。
政府はいろんな約束をするが、口約束だけ。他の村ではもっと支援を受けているところもある。

NYIRABABIRIGI Madaline　女性 65 歳

（１）陶器造り
（２）大切なものはなにもない。
（３）子供が小さな家を買ってくれたことは嬉しかった。悲しかったのは息子が学校を中退してしまったことだ。
（４）はい。

（5）子供が教育を受けることを続けてほしい。
（6）私はルワンダ人です。

Amani　男性 19 歳
（NYIRABABIRIGI Madaline の息子）

（1）今は stove を造っている。
（2）教育を受けていたことが一番幸せなことと思っていたが、もう学校に行っていないので何もない。
（3）学校に行きたい。生物と化学が好きだった。
（4）はい。
（Q）誰も彼が学校に戻れるように支援しないのか。
学校の教育費さえも、誰も出してくれない。

RUNGAMBAJE Azadieli　男性　39 歳

（1）子供が生まれてから教育に関しては何もせず、ただ文化のみを伝える。薬もないので、病気になったら非常に困る。
親が 2 人、子供が 7 人
（Q）誰かが病気になったらどうするのか。
A.　ベストを尽くすべく病院に行って薬をもらうこともあるが、薬草を使うこともある。
（Q）　職業は何か。
A.　皆がやっているような伝統的な陶芸・カラバシュ。作ってから村の外に売りに行く。
（Q）　固有の文化はあるか。
おなかいっぱいになったりして楽しくなったら踊り始めること。
（Q）それはルワンダのダンスか、それともトゥワだけのものか。
A.　ルワンダ人みんな同じ。
（Q）社会的地位はどのようなものか。
A.　ID をもっていて政府が進める社会的活動には全部参加できる。
はじめてこの場所に来た時は誰も援助してくれず、何の権利もなかったが、今は政府のことを知っているし政府も自分たちのことを理解している。状況はこの 2 年間のうちにも変化している。
（Q）　民族による差別はあるのか。
A.　最近は状況が改善されている。何年か前は難民のようにテントで暮らしていたが、今ではすべてが変わり、家を建て、物を所有し、いくらか改善している。
（Q）　ジェノサイドのときは何をしていたか。
A.　ジェノサイドの前にこの地へ来て、ジェノサイドのときビチョンビというところに逃げ、ジェノサイド後にまた戻ってきた。

（Q） 何か理由があって戻ってきたのか。
A. 1993~5 年に親戚である彼（オレンジの服の男を指差す）と、ビチョンビから来ていた彼の親戚とで逃げた。ジェノサイドが終わってから彼がこの村の人にいるまた別の親戚に会いに行くというから一緒に戻ってきたところ住む場所を与えてもらったのでそのまま暮らしている。
（Q） ジェノサイドのときに攻撃されるなどの被害はあったか。
A. 何人かの親戚が死んだ。
（Q） 彼自身は攻撃されたか。
A. あざけりを受けることがあった。

（３）最近楽しかったこと、悲しかったことは何か。
A. 今が楽しい。たくさんの人が来て自分の生活や価値観について話ができるから。悲しいことは貧しいこと。手に入れたいものを手に入れられないし、学校に行くこともできなかった。今は政府の支援を待っている状況だが、支援は約束されているし、改善されつつある。

（Q） 子供に将来何を望むか？
A. 今はあらゆる情報を得ることができるが、10 年前は学校に行っても拒否されるため、学校に行けということもできなかった。だが今は政府がアドバイスして学校側の意識をリフレッシュさせようとしており、少なくとも学校側は何をすべきかわかっている。彼ら（トゥワ）自身も学校に行く意味を理解している。
とはいえまだ貧しく発展の余地が大きいため政府はより一層の援助を計画している。
小学校の授業料が無料なのも政策のひとつ。

（Q） 子供には、一生懸命勉強し、キガリなどこの村を離れた街で働いてほしいと思うか。
A. 彼らが勉強を続けてキガリなどの街で働くようになればそれは幸せなことだ。ただしそれはチャレンジである。少し前は政府が独立した共同体での生活を求めていたため生活がすべて村の中で完結しており、彼ら自身も村の中での生活を望んでいたため。

（Q） 今まで仕事や勉強のために村を離れた人はいないのか。
A. 友達もこのすぐ近くにしかいないし、むこうに見える人（山の上に住んでいる他人）を訪ねるのも怖いからいや。ガードマンがいたりするし何を話せばいいかわからないから怖くていや。

（Q） 日本のことを知っているか。
A. 日本という名前だけは聞いたことがある。日本人と中国人の区別ができない。中国人は道路工事をしているのを見かける。

（Q） 情報はどうやって入手しているのか？
A. ラジオがある。テレビはない。

（Q）選挙には行ったか、どこで投票するのか。
A. 行った。セクターのオフィスが近くにある。

・COPORWA 職員 Mr.NIYOMUGABO へのインタビュー

Q.　NGO について教えてください。

COPORWA はルワンダの土着の人々（トゥワ）のために活動する NGO。トゥワの劣悪な生活環境を見て、トゥワのリーダーが団体を創設した。当時は CAURWA と言う名前で 1995 から 2007 年まで活動していた。名前の変化は、政治体制の変化が理由で、これ以降政府はトゥワのアイデンティティを認めるようになった。

1994 年以前のトゥワの人口は約 5 万人だったが、ジェノサイドの後は 3 万 5 千程度になっていた。生活が良くないので、人口が増加する兆しもない。そこで、土着民族のリーダーが団体を創った。

Q.　どんな活動をしていますか？

国家政府、地域政府へ働きかえるアドボカシー活動をしている。

ジェノサイドの前は、高等学校への進学者は 3 人、大学へは 1 人しか進学していなかった。今では、高等学校へ 160 人、大学へは 28 人進学している。政府(Ministry of Local Government)に援助をもらっている。他の土着民族関連の NGO とも協力関係があり、ブルンジやウガンダのトゥワ関係の NGO、そして IPACC (Indigenous People of Africa co-ordination committee)との協力関係もあります。African Human Rights の専門家が一人 COPORWA で働いているし、African Commision on Human and Peoples' Rights の職員もいる。今、私たちは法的に認可されている。

活動領域は 5 つ、教育、人権、暮らし、文化、財政。トゥワはひどい差別を受けていたので、差別の無い国家をつくりたい。

Q.トゥワの人々が抱えている問題について教えて下さい。

まず、トゥワの人々が自分たちで成長しなくてはいけない。高等学校の進学者が 160 人ではとても少ない。

陶芸も伝統的で価値が無い。COPORWA はその陶芸を現代的で売れるものにするように彼らの考え方を変えたい。

トゥワ全体を代表する人が全国で一人しかいない、これも問題である。

職業については、教育を受けている人が少ないから陶芸以外の仕事につけないのが問題。また、森に住んでいた人たちが自然保護の政策のため強制的に森から追い出された問題もある。

また、差別に関しては、ルワンダ人との結婚も難しい。この場合も教育を受けているかどうかが鍵になる。

Q.ジェノサイドの時のトゥワの人々の情況を教えてください。

たくさんの人が殺された。人口はジェノサイド前後で 5 万人から 3 万ほどに減っている。

誰がジェノサイドで殺されたのかいまでも把握されてないが、当時トゥワはツチ・

フツと都合よく解釈された。

私にとって、あなたがツチであろうがフツであろうがもう関係ない。ただ、トゥワのアイデンティティを認めてほしい。人権侵害があってはならない。彼らの民族性に敬意はらってほしい。

今の政府は社会的弱者のために様々な政策をたてているが、トゥワに関するプログラムは十分ではない。VISION2020 へ働きかけなければいけない。

Q. 他のルワンダ人との交流はありますか？

トゥワの人々は必ずトゥワで集まって暮らす。このようにキガリに近いところでは、市場に行ってルワンダ人と直接売り買いするが、田舎のほうだとそれも難しい。

Q 今後どのような目標を達成していきたいですか？

生活を向上させ、農業を普及すること。伝統的な陶芸造りから売れる商品生産への移行。発展への基本的な解決策である教育の意義を子供の親に判らせること。お互いを尊敬し合い人権が守られることを追及する。

Q.トゥワの文化はどんなものがありますか？

ルワンダ人の文化とは違った、文化があります。言葉のアクセントも独特だし、ダンス・歌も美しいです。

この後、実際トゥワの人々のダンスと踊りを見せてくれた。私たちも NUR の学生と一緒に日本語の歌を披露した。

・村の視察

この後実際に村の中の家を見学した。敷地は非常に狭く、土地が欲しいと皆が口にする理由が目に見えてわかった。

住居と陶芸の作業場が混在している状態だった。

家の中は、何人もの家族が寝るには狭すぎるような環境だった。

陶芸の現場も見せてもらった。下の写真は型を作っているところ。みんな裸足で作業をしていて、傷があっても保護をしてないので、衛生面が気になった。

原材料は町の工場現場から余った素材をもらってくるそうだ。下は完成した陶芸品。

子供たちは私たちに興味を持って、カメラをむけると笑顔を見せてくれるが、栄養失調でお腹が膨らんでいるように見えるのが気になった。

5. 感想

岩井 天音

今まで途上国と呼ばれる国を訪れた時、そこで人々の生活を垣間見た私は大抵、目の前の光景をただ単に受け入れてきたように思う。何故なら日本人の水準から考えると「可哀想」な生活をしている人々を「可哀想」と形容することは、ただの先進国の都合の良い感情でしかないと思っていたからだ。しかし、トゥワの村で私は「可哀想」だと感じた。破れた服、語ることが出来ない将来への希望、私の部屋の半分以下のスペースに家族 6 人が住んでいるという現状。これをただ単に「目の前の現実」として受け入れるのには若干抵抗があった。

もちろん世界にはもっと貧しい環境で暮らしている人などたくさんいるだろう。でもだからこそ、昨今のルワンダの発展から「取り残されている」ということが気になった。

物事を二極化するのはある意味分かりやすい。しかしそこに第三者があるとき、それがスケープゴートにされることは多い。

身体的特徴からもトゥワの人は差別されることがあるという。貧困を脱するといった目に見える変化だけではなく、トゥワの人々が本当の意味でルワンダ社会の中で生きていけるようになるにはどうすればいいのか。私の中でまだ答えはないが、今回トゥワの人と出会ったことでルワンダ社会の見方は少なからず変わった。

古屋 亮輔

一般に、彼らはピグミー系トゥワ族と表現される。ピグミー系は身体が小さいと聞いたが、見たところ特別に外見上の特徴はない。何が他のルワンダ人と違うのだろうか。確かに彼らは貧しいが、政府は彼らを「トゥワとして」扱い、援助する必要があるのか。ニュースで見た数少ない情報では彼らは絶滅寸前で、社会の隅に追いやられて貧困・差別・排斥に直面しているとあったが、果たしてメディア越しに伝わってくるそれらの情報は真実なのだろうか。１ヶ所を訪問しただけではわからないが、私がインタビューした男性は少なくともここ数年の社会の変化に満足しているようだった。ただの貧困にも見えるし、もっと深く根を張った問題が隠れているようにも見える。また、一緒に行った大学生たちが彼らについてどう思っているのかも本当のところはわかっていない。ただ、大学生と村の人々との間に明らかな貧富の差があることだけは明らかである。彼らは自分たちの国の貧困・格差問題に対してどの程度関心をもっているのだろうか。まずはそこについて本音で話し合ってみたい。そして、水準の違いこそあれ、どの国にも貧困・格差の問題はある。私たち日本人も問題を共有し、共に解決策を模索することができると思う。

宮本 寛紀

トゥワ族の人々が暮らしている村に行くと決まってから、私の頭の中では、都市から離れたとても奥まったところまで行くのであろうと思っていた。しかし、そのようなことはなく首都キガリから少し車を走らせて、小道を歩き、丘を登っただけでその村はあった。“村”という表現が正しいのかどうかも分からないくらいこぢんまりとしている印象を受けた。

そして、そこで暮らす人々も私がイメージしていたそれとは違い、見た目も他のルワンダ人と何ら変わりなく思えた。ただ少し違っていたのは、英語やフランス語が通じないということだ。その日まで、ルワンダ国立大学生と行動を共にしている中で、当たり前のように英語で会話をしていただけに、やはり大半の人に教育が行き渡っているわけではないのだということを痛感させられた瞬間でもあった。

その後、インタビューや、そこで暮らす人々の生活ぶりを見させていただきながら、感じたことがある。それは、「一体、私たちはどのように思われているのであろうか」ということだ。そこで暮らす人々からすれば、カメラをぶら下げた外国人が入ってきて、唐突に話を聞いたり、家の中を見せてもらったり…。かといって、何か援助をしに来たわけでもなく、こちらの用が終われば去っていく。もちろん、失礼にあたらないよう言動や行動には、十分な注意は払っていたものの、何か私自身の行動に違和感を抱いたのは事実である。

海原 早紀

ルワンダでここまで貧しい人と話したのは初めてだった。土地も無い、食べ物もない、と真正面に立っている人に言われて、なんと返したらいいのかわからなかった。笑顔で会話するわけにもいかないし、悲しい顔をしても失礼な気がした。具体的になにか彼らの生活を救うことができない自分が訪問していることにひどく違和感をひどく感じた。

家の小ささも信じられない生活環境だった。歩いていたら、NUR の学生に「そこは踏んじゃいけないよ」と言われて、実は私は彼らの火興し場に気付かず踏みそうになっていたことがわかった。さらに「これが彼らのキッチンだよ」と言われて、他の地面と変わらなく見える焼け焦げた灰がたまっている汚い地面が「キッチン」であるということが、私にはショックだった。

トゥワは、世界中の「少数民族」と同じ問題点に直面していた。ルワンダで進む近代化に遅れていること、そして差別の問題。そしてその延長線にある、貧困や雇用問題。

しかし貧困に関しては、他のルワンダ人も抱えている問題であるから「少数民族」だからといって特別に支援を約束するのも、国としては難しいのではないだろうか。

ルワンダの国会では女性枠、障害者枠などの議席が確保されているが、トゥワのための議席はない。トゥワが迫害されているのは明白だ。もちろんトゥワの国民は選挙権も、立候補の権利もあるが、今まで議員になった人は確認できない。「ルワンダは一つ」と掲げる政府なら今後トゥワの政策を拡大してくれる、と NPO の職員もトゥワの村人も期待しているようであったが、今後どうなるのか、注目したい。

池上 純平

帰国してから、私は以前読んだルワンダに関する文献を読み直してみた。しかしながら、その中に私達が見てきた姿を落とし込んだような、直接繋がるものを見出すことはできなかった。私達がこの目で見てきたものは一体何であったのだろうか。彼らは確かに目の前に存在していたし、個人差はあれ、そこに苦悩を抱えていた。絶対数が少ないことでその存在意義が変化するのだろうか？それは違う。トゥワ村に関しては、帰国してから改めて今回の経験の尊さを実感させられた。

この報告書を読んでくれた方は、トゥワの村の様子や彼らが置かれている境遇についてある程度理解して頂けていることだろう。彼らの声を聞いて、その背景を想像しているかもしれない。そこから何を考えるかは個人次第であるが、この訪問から私達が得てきたものは、立体的なルワンダを描く上で欠かせない 1 ピースになるのではないかと感じている。

コラム　「あれっ道が明るくなってる」

８月 30 日の夜、ブタレでの５日間の滞在を終え、キガリへと戻ってきた私達は、何かしらの違和感を覚え、そしてすぐにあることに気付き、ささやかな驚きを体験した。そこにはあるはずがないものがあったのである。その驚きを述べる前に、少々事情を説明したい。

キガリで私達が滞在した St.Paul というゲストハウスはキガリの「シティ」と呼ばれる中心部から徒歩数分の距離という非常に立地が良い場所にあり、その前は整備された大通りとなっていた。

ルワンダに到着したその日、空港から St.Paul に向かうタクシーの車中、ちょうどその大通りに差し掛かったとき、あるルワンダ人学生が古屋に向かって「リョースケ、この道も大きくなっただろう」と言っていた。古屋は２年前にも渡航しているためだ。その時私は、「ルワンダは発展途上だし、インフラ工事も進んでいるんだな」という簡単な印象しか持たなかった。まあ２年あれば道路くらい・・・と。この時、私はルワンダの実力を完全に見くびっていた。

その大通りというのは、道路そのものは確かに整備されていたのだが、道路沿いの照明と言えば歩行者用の照明がちらほら。夜ともなるとやはり月明かりと車のヘッドライトが頼りという、見通しが悪い場所だった。また、「中央分離帯」の部分はまだ整備中であり、何やらスコップを用いて手作業で土を掘り返していたり、お世辞にも効率が良いとは言えない作業を繰り返していた。少なくとも、私達が最初にキガリにいた数日間の間は。

さて、ここで話を最初に戻すが、この日私達はシティの中心でバスを降り、St.Paul へと歩を進めて例のごとくあの大通りに差し掛かった。ところが、である。やけに見通しがいい。「あれ？道が明るくなってる・・・。」なんと、中央分離帯の部分にそれはそれは立派な照明がそびえ立っているではありませんか。

しかも一本や二本ではなく、見渡す限りずらっと大量に。わずか５日前まではただ土をほじくり返していただけのあの場所に。そし

て周りには丁寧に芝生まで植えてある。これには、メンバー一同驚くしかなかった。ルワンダの底力恐ろしやと感じた瞬間であった。

後日談だが、この驚きを現地の日本人の方に伝えたところ、どうやらこの通りはカガメの大統領就任パレードで通る道であり、そのために人員を動員させて急ピッチで作らせたということらしかった。しかしながら、「なるほど」と感心する私達にもう一言。「あの照明はボルトで端を留めてあるだけだから･･･。」

もし地震がきたら・・・。改めて、ルワンダ恐ろしやと感じたのであった。　（池上）

6.Radio Salus

担当者：宮本 寛紀

１．訪問日時・場所

日　時：2010 年 8 月 30 日 14:00~14:30
場　所：Radio Salus
（NUR から車で 5 分ほど）
参加者：古屋亮輔、海原早紀、池上純平
井上真希、宮本寛紀、岩井天音
Alfred, Maurice, Alain, Eugene,
Pie, Olivier, Alice and so on

２．企画目的・準備

ルワンダでの重要なメディア媒体であるラジオ。ジェノサイド時には、ラジオの放送によって民衆を扇動したというようなことも言われており、時には誤って利用されてしまっていた。しかし、現在のルワンダにおいても、メディアの一つとして大きな役割を果たしているラジオはどのような放送を流しているのか気になり、ラジオ局に訪問し、インタビューをすることで考えたいと思った。実際に訪れた Radio Salus というラジオ局では、JRYC メンバーの一人である Pie が学生ボランティアとして携わっているということもあり、訪問が実現した。

３．訪問先概要

Radio Salus は、2005 年に UNESCO の支援を受け、ルワンダ国立大学が設立したラジオ局。毎日 24 時間、休まず放送を続けている。詳しい内容は、インタビューの中で紹介しています。

４．当日活動概要

当日は、午前中に大学で学生会議を行い、午後の 14 時から Radio Salus を訪問し、その後、すぐにギコンゴロの MURAMBI メモリアルに行く予定だったため、Radio Salus には 30 分という短い訪問になってしまったが、ここでは Tabrice さん(3 年前にルワンダ国立大学を卒業し、現在は Radio Salus のスタッフとして働いている方)にインタビューをした内容を紹介します。

《インタビュー内容》

Q.どのような情報を流しているのですか？ルワンダ国立大学のことについて？それともルワンダ国内のことですか？（宮本）

A.すべてです。教育的なものやエンターテインメント、ルワンダ国内のニュースも国際的なニュースも流しています。国際的なニュースは、インターネットから情報を得ています。多くの学生がジャーナリズムを専攻しており、彼らが News Room という部屋でパソコンを使って行っています。

Q.ルワンダ国内のニュースはどのように情報を得ているのですか？（井上）

A.学生ボランティアが、自分たちで持ってきます。

Q.どれくらい地域で、Radio salus が流す放送を聞けるのですか？（宮本）

A.現在、ルワンダには transmitter(送信機)

があります。ルワンダ国内はもちろんのこと、タンザニアでも聞けるようになりました。

Q.どれくらいの人がここで働いているのですか？（海原）

A.13 人程の常備スタッフがいます。それに加えて、約 100 名の学生ボランティアが訪れます。13 人のスタッフは給料をもらっていますが、学生ボランティアは、あくまでも学ぶために、手伝いをしに来るので、ボランティアでやっています。卒業後も、Radio Salus で働きたい学生がいれば、スタッフになれる人もいます。

Q. Radio Salus の次の段階（将来の展望）は何かお考えですか？（海原）

A.UNESCO が様々な計画をしています。たとえば、テレビ局を作ることなど。

Q.ラジオを放送するときの、重要なポイントや気をつけていることなどはありますか？（宮本）

A.放送を聴いている人々は、その情報を信じるので、もちろん、間違った情報を流してはいけないということです。

Q.今までの放送で、間違った情報を流してしまったことはありますか？（海原）

A.ありません。時折、放送された内容に納得のいかない人々がいて、ここを訪れる人いることはいます。

Q.毎日 24 時間放送していると聞きましたが、よく起こる停電時にはどうしているのですか？（岩井）

A.ここには、自動の発電機が備わっているため、停電時にはそちらで補います。

Q.放送言語は何語ですか？（宮本）

A.主に聞いている人は、ルワンダ国内の人なので、ルワンダ語がほとんどです。いくつかの番組は、英語やフランス語によるものもあります。週末は、90%程がルワンダ語によるものです。

《Radio Salus の施設紹介》

① News Room

ここでは、主に学生ボランティアがインターネット上で様々な情報を得たり、調べたりする作業を行っている。

② Broadcast Room

ここでは、実際にリポーターがマイクに向かって話し、放送を流している。このような部屋は、2 つありそれぞれ扉は２重で、しっかり防音対策がなされている。

③ Technical Room

ここでは、サーバーや電源を操作する装置がある。自動的に作動しているため、普段、人はあまり入らない。

《Radio Salus のプログラム》

実際に、どのような番組が放送されているのかというと、音楽番組、スポーツ番組、”Amakuru” というニュース番組（Amakuru は、ルワンダ語で How are you?という意味の語）、tigo というルワンダで有名な携帯電話会社が提供している番組、農業に関する番組、ローカルな土地問題に関する番組などなど、多様な番組が再放送もしながら、放送されている。

５．感想

井上 真希

Radio Salus は主に学生によって組織されているにも関わらず、ルワンダ国内で多くの国民に支持されている。早稲田大学にもいくつか学生によるラジオサークルがあるが、リスナーはほとんどが学生に止まるだろう。

ルワンダ国民の Radio Salus への信頼は、国立大学がサポートしているという事実からだけではなく、国民の関心に根ざした番組が多くある、という点からきていると考えられる。例えば、Radio Salus にはスポーツや音楽番組の他に、農業にまつわる番組や地元の土地問題に関する番組などがあり、農民が国民の大半を占めるルワンダらしい志向が垣間見ることができる。

また、国内ニュースはレポーターを現地に派遣して取材して入手するなど、プロさながらである。放送機材の問題などの課題はあるが、これから更に Radio Salus には発展していってほしい。

宮本 寛紀

私は個人的に、ラジオを聞くという習慣が無いため、ラジオ局に訪問するということで、どのようなことを聞き出せるのか、イメージがしにくかった。しかし、ルワンダの学生は、毎日のようにラジオを聞いており、生活の一部として、欠かすことの出来ないような存在であることを知ってから、Radio Salus を訪れたことで、どこか身近に感じることができた。

インタビューの中で、将来のヴィジョンを聞いたところ、テレビ局もたくさん開局していきたいと考えているらしく、携帯電話の普及率の早さからも分かるように、テレビもすぐに広まっていくのではないだろうかと思えた。テレビが広まれば、ラジオのメディアとしての立ち位置も変わってくると思う。

また、学生ボランティアの話を聞いていると、ルワンダには、ジャーナリストになりたいという学生が非常に多いことにも気付かされた。学生のうちから、このようなラジオ局に携わっている学生は、とてもスキルアップになっていると思う。

それらも含めて、ルワンダのこれからのメディアの展望に期待したい。

コラム EXPO2010

帰国間近ということもあり、比較的自由なスケジュールが組まれていた 8 月 31 日午後。ルワンダの友人の提案で私たちはキガリで開催されていた EXPO2010（国際見本市）に足を運んだ。正式名称は"13th Rwanda International Trade Fair"と言うそうだ。

駐車場の入り口でチケットを購入→5メートル先でチケットもぎり→更にその5メートル先でチケット回収→という効率が悪そうな方法を経て、私たちは会場に到着した。

まず目に付くのが企業のブース。おなじみの Rwandatel、tigo、MTN（いずれも携帯電話会社）を筆頭に、各スポンサー企業が自社の製品をアピールしていた。

奥には大きなホールが二つあり、民芸品や食料、雑貨などを売る小さなブースが所狭しと並んでいる。また屋外には移動遊園地（と言っても空中ブランコだけだが）、レストラン、ビアガーデンなどがあった。客層は家族連れが多く、来場者はいずれも展示やショッピングを楽しんでいたように見えた。あとで調べたことだが、今年は大小合わせて約 200 のブースが、アフリカ各国のみに留まらず韓国や中東地域からも、合計 25 カ国から出場したそうだ。

さて我々日本ルワンダ学生会議御一行は、すかさず空中ブランコに向かう！！……あれっ？！みんな乗らないの？ということで 2 人だけが空中ブランコにチャレンジ。ちなみに 30 席ほどあったように見えたが、乗っていたのはルワンダ人の子供 4 人と青年が 2 人、そして日本人が 2 人だけであった。ただし、ブランコの周りに集まる観客は大勢いた。

始動時はスイッチをポチッではなく、なんと手動。これ壊れるんじゃないの…と一抹の不安を抱きながら我々の空中ブランコは始まった。初めこそは童心に帰り素直に楽しんでいたものの、繰り返される景色にだんだんと飽きはじめてきた。ふと一緒に回っているルワンダ人を見ると、子供すら無表情でしっかり前を見据えながら乗っているではないか…！ルワンダ人の真面目気質は空中ブランコにも現れるのかと考えながら、無事に 5 分ほどの搭乗は終わった。

ブランコを楽しんだあとは、いつものコース。すなわちビール。この日はウガンダのビールを楽しんだ。「もうすぐ終わっちゃうね。」などと残り少ないルワンダ滞在に哀愁を覚えつつ、キガリの日は暮れていくのでした。

（岩井）

7.Enas Coffee factory

担当者：宮本 寛紀

1. 訪問日時・場所

日　時：2010 年 8 月 31 日 10：00~12：30
場　所：Enas Coffee Factory
　　(キガリ市内のコーヒー加工工場)
参加者：古屋亮輔、海原早紀、池上純平
　　井上真希、宮本寛紀、岩井天音

2. 企画目的・準備

ルワンダの主要な 1 次産品であるコーヒー豆はどのように生産、加工され市場にでているのかを、実際にコーヒー加工工場を訪問し、インタビューをすることで探る。

ルワンダの国連開発計画環境ユニットで環境コンサルタントとして働いてらっしゃる三戸俊和さんに工場を紹介してもらい、当日も引率していただいた。

3. 訪問先概要

キガリ市内にある Enas Coffe という会社の工場。チェリーと呼ばれる赤い果実の状態の豆を洗い、発酵させる作業を行っている工場と、外皮（外側の殻）を取り除き、分別して、袋詰めする作業を行っている工場の 2 つに訪問した。

4. 当日活動概要

《スケジュール》

10:00　三戸俊和さんと合流
10:30　Enas coffee factory①　訪問
11:30　Enas coffee factory②　訪問
12:30　昼食

《Enas coffee factory ~AGRO~》

私たちがはじめに訪れた工場では以下のような作業がなされていた。
以下の作業の流れはすべて、工場長である Mark さんが事細かく説明してくれた。

1. パーチメントホッパーやハラーと呼ばれる機械が 3 種類ほどあり、どれも外側の殻を取り除いている。

2. 次に、ブローワーと呼ばれる機械が、取り除いた殻や小石などを豆と別にするために風で飛ばしている。
（飛ばした後の殻は、捨てるわけではなく、肥料や固形燃料に加工して利用されている。）

3. そして、殻の取り除かれたグリーンビーンと呼ばれる状態になった豆を、グ

レイダーと呼ばれる機械を使い、3つのサイズに分別する。グレイダーは2種類あり、2段階に分けてより正確に分別される。

豆のサイズには3つのグレードがあり、グレード3はサイズ12、グレード2はサイズ13~15、グレード1はサイズ16~18。大きい豆ほど評価が高い。15と18のミックスが最も人気なサイズブレンドとされている。）

4. 以上の作業を終えた豆は、一つ一つ手作業によって最終確認して袋詰めする。（ここでは、合計500名ほどの人が働いており、ほとんどが女性。1日のノルマが1袋と決まられており、普段は、大体の人が7時～14時の約7時間働き、給料は1,000RWF/day）

5. 最後に豆の品質を確認する。（豆の湿度が10%~12%が理想的とされており、10.5%が最も理想的な湿度。）

以上の流れで、選別された豆をOCIRcafeというルワンダのコーヒー協会を通して、世界中の市場に出されている。

この工場では、これらの他にも、ルワンダコーヒーは無農薬で生産されていること、一番狙っている市場はアメリカであることなどもインタビューを通して知ることができた。

《Enas coffee facotry ~washing station~》

次に訪問した工場は、上に紹介した工場の前の段階で、チェリーと呼ばれる赤い果実の状態のコーヒー豆を何度も洗ったり、発酵したりといった作業を行っているwashing stationというところであった。

しかしながら、コーヒー豆になる前の赤い果実の収穫時期は3月中旬~6月中旬のため、私たちが訪問した8月終わりには、チェリーと呼ばれるその果実は収穫されておらず、washing stationとしての作業は行われていなかった。そのため、こちらでも、上に紹介した工場と同じ作業をしている女性が数十名いた。ただ、washing stationとして稼働しているときの手順について、詳しく教えていただけたので紹介します。

1. 収穫されたチェリー（赤い果実）を、収穫してから 2 時間以内に持ってきて、水と一緒に流しながら、重さによって分別する。同時に、ピーリングマシンと呼ばれる機械によって、赤い果実の部分をとる。（ピーリングマシンはケニアから取り寄せたものである。）

2. 赤い果実をとったあとは、発酵をさせる。この発酵の作業は 2 回行われ、1 回目は 12 時間、2 回目は 24 時間行う。

3. 最後に、もう一度洗いながら水と一緒に流し、底に残ったもの（重くて品質のいいもの）を次の工場に持っていく。

また、これら一連の流れはブラジルやグアテマラなどの手順を参考にしている。

《三戸俊和さんのお話》

ここまで、2 つの工場の作業について、コーヒー豆がどのように市場に出されるかを紹介したが、引率してくださった三戸俊和さんから、それらの他にも様々なことを教えていただけた。

- 前から政府によって、空港の近くに自由貿易地区を作り、東アフリカのハブ重工業地帯にしたいという構想があるが、あまり進んでいない。
- ルワンダコーヒーは、焙煎される前の生豆（グリーンビーン）の状態で、市場に出される。
- 各国で行われる世界的なコーヒー品評会(cup of excellence)がルワンダでも行われている。味を見分ける審査員(cupper)を招待する（宿泊費なども出さなければならない）ため、アフリカでは、お金のあるルワンダでしか行われていない。審査員のグループには、日本の代表団もいるという。
- ルワンダのコーヒー農場は他国と比べて狭く、味がそれぞれ個性的になると高評価を得ている。
- ルワンダコーヒーは、昔（1960～70 年代）は品質が悪かった。なぜなら、政府の政策も関係していて、下の階級の悪い豆を作った方が税金もあまりかからなかったり、生産するのが楽であったりしたため、あまり品質を良くしようという動きは無かった。しかし、1994 年以降は、政府もしっかり考え始め、アメリカの USAID や日本の JICA などの支援もあって、今のような品質のいいコーヒーができるようになった。

5. 感想

宮本 寛紀

今回コーヒー工場を見学させていただくにあたって興味があったのは、単に作業過程の見学というよりも、主要な輸出品目であり、外貨獲得手段であるルワンダコーヒーの流通事情であった。その観点から言っても、工場長や三戸さんからルワンダコーヒーの収穫から出荷までの一連のお話を伺えたことで、非常に価値ある訪問となった。また、「ルワンダコーヒー」にも生産地によって違いがあり、外国からのゲストを招き、「cup of excellence」という大会を通じて品質を高めあっているという話からは、ルワンダ人農家のコーヒーに対する誇りを感じとることができた。

二ヶ所の作業場を訪れ看過できないと思った点は、ルワンダでのコーヒー生産は想像以上に多くの雇用を生み出しているということである。顧客へのニーズに応えるため、高品質を保つための生豆の選定には多くの女性たちが作業にあたっていた。

コーヒーがルワンダ人にとって日常的に親しみがなく、ほとんど輸出用作物であること、またリスクを受けやすい一次産品に頼っているという事実だけ見て、以前はルワンダのコーヒー産業の展望に不安を覚えていたが、実際に現場で話を聞き、働く人々を見て、ルワンダコーヒーの成長に希望を感じ取れた。様々な問題はあるだろうが、国際的な知名度があがることを祈りたい。

最後に、当日付き添って下さった三戸さん御夫妻には大変御世話になった。案内して下さっただけでなく、お二方の日常生活や仕事の話、ルワンダ人と共に働くための心構えなど、非常に面白い話をたくさんして頂いた。改めて感謝申し上げたい。

池上 純平

私は、コーヒーは黒い（茶色い？）豆という印象しかなく、赤い果実からいくつかの段階を経て、白や緑になって、市場に出され、さらに焙煎することで、私の知っているようなコーヒー豆になっているということを全く知らなかったため、単純にとても勉強になった。

また、生産段階を見るだけでなく、どのような人々がどのように働いているのかといった様子を見ることができ、とてもいい経験をさせていただけたと思う。

ルワンダでは、コーヒーはあくまでも輸出用の産品の一つとして考えられており、あまり地元の人は飲まないと聞いていたし、一緒に行動していたルワンダ学生もコーヒーを飲んでいるのは見ていなかったが、最近では国内でも売り出しているということを知り、どこか安心した。長年、コーヒーや紅茶の一次産品が輸出の上で、収入のトップを占めていたが、近年では国の収入のトップが、観光産業（主にゴリラ関連）であるという話も聞き、コーヒーのような国際市場で価格が決定する、変動のある、不安定な産品に頼るよりは、いいバランスがとれるのではないかと思った。

これから先、世界中で、もっとルワンダコーヒーが、認知されることを期待したい。

8.REACH

担当者：池上純平

1. 訪問日時・場所

日　時：2010 年 9 月 1 日　7:15~18:00

場　所：Kirehe　District,
Kigarama Sector,
Rugando Cell

参加者：古屋亮輔、海原早紀、岩井天音
池上純平、Ephraim

2. 企画目的・準備

1994 年のジェノサイド後、国家再建に向かうルワンダが抱える大きな課題が、「虐殺の当事者同士が再び同じ村や町で暮らさなければならない」という問題である。

それまで身内、隣人同士であったものが、ジェノサイドという大きな潮流の中で加害者と被害者に分断されてしまった。しかしながら、ルワンダでは多数の加害者を拘留しておくのは金銭的にも物理的にも不可能であり、現在では加害者を公益労働刑に従事させた後、社会へ復帰させている。

では、被害者と加害者が向き合っていくということ、社会で共存していくとは何を伴うことなのか。加害者の「心」を変えることの重要性とそこでの被害者の「心」の葛藤、一度失われた「社会＝人間」の平和を構築することの困難さ、そしてそれでもなお乗り越えていかなければいけないルワンダという国が抱える現実。

このような問題をより深く理解するため、平和と和解を支援する活動を行っている佐々木和之さんを訪問し、現場の見学、そして虐殺の当事者の方々のお話を聞かせていただいた。

3. 訪問先概要

NGO「REACH」
佐々木和之さん
Fidele MUGENGANA(コーディネーター)

佐々木和之さんのプロフィール

1965 年横浜市生まれ。鹿児島大学農学部卒業、コーネル大学国際農業・農村開発修士課程修了。ブラッドフォード大学平和学博士課程修了。1988 年国際飢餓対策機構からエチオピアに派遣され、約 8 年間農村自立支援活動に従事。エチオピア在住の 2000 年にルワンダを訪問し、紛争の深い傷跡に衝撃を受ける。同年 10 月からブラッドフォード大学平和学部博士課程に在籍し、ルワンダの紛争問題と平和構築について研究。2005 年からルワンダの現地 NGO「REACH」（Reconciliation Evangelism and Christian Healing）の職員として、大虐殺後の和解と共生の歩みを支援するプロジェクトを展開。日本バプテスト連盟国際ミッションボランティア・洋光台キリスト教会員。

『佐々木さんを支援する会』HP
http://rwanda-wakai.net/

【REACH の家造りプロジェクト概要】

Gacaca 裁判を終え公共労働奉仕刑が決定した受刑者の奉仕内容は必ずしも決まっていない。REACH はその労働奉仕刑を請け負う形で受刑者による虐殺生存被害者の為の家造りのプロジェクトを担っている。

心の問題に直接アプローチする和解セミナーと、実際に罪の償いをする機会を与える家造りプロジェクトを主たる活動とし、虐殺後のルワンダにおける被害者・加害者間の和解を目指している。家造りは、大工の経験がある受刑者も現場に入れ、加害者が被害者である受益者の為に労働奉仕を行う。

4. <u>当日活動概要</u>

① REACH「償いの家造りプロジェクト」に体験参加

② プロジェクト参加者である、奉仕労働従事者、受益者の両者にインタビュー

【現場１】

REACH のプロジェクトによって家が改修された現場。改修が行われる以前は崩れかかっていたのだが、今はきれいに再建されていた。夫婦と子供たちが住んでいたが、夫婦は互いに再婚であり、共にジェノサイド時に相手を殺害されてしまった。現在子供は 8 人（連れ子も含み、1994 年後に生まれたのは 5 人）。

夫は 1994 年の後遺症で今も苦しんでいる。

（佐々木さんの解説：再建に必要なセメント、石、ドア等の材料費は REACH が組織として支援。大工も一人は雇っているが、他は以前公益労働刑に従事していた人々がボランティアで労働。この村での共存を望んでおり、彼らのこのような行いに対し、この夫婦や村の人たちは評価をしている。）

この家に住む女性。笑顔が印象的だった。

【現場２】

18 歳の孤児の少女のために家を建設中の現場。この村に以前プロジェクト参加者がおり、当初はボランティアで違う女性の為に家を建設する予定であったが、彼女の姪が孤児であり、週替わりで親戚の家を転々とするような境遇であったため、その姪の女の子のために家を作ることに。また、家が完成したら、同じく孤児である友人の少女と一緒に住む予定。友人の少女は障害があり、水を汲みに行く等ができず、一人では暮らせないため。

（佐々木さんの解説：以前は刑務所にいた男性でも、今はこうして家造りなどに参

加しているのを、周囲の人たちが見ているということがすごく重要。彼らも普通の人達だと認識してもらえることができる。昼休みのご飯などはケースバイケース。毎日は負担が大きいので難しいが、被害者側が思いやりを持って提供することもある。現在は午前中のみであるが、以前は午後 3 時くらいまで活動しており、彼らは自分たちで材料を持ってきて現場で料理したりしていたが、そこに被害者側が手伝うこともあった。）

受益者インタビュー

ムサビエ・イマナ・センティア（18 歳女性）

センティアさん（右）

質問 a-1　誰と住んでいるのですか？

A.　いとこと住んでいます。

質問 a-2　今勉強はしていますか？

A.　いいえ、今はしていません。

質問 a-3　普段何をしていますか？

A　食べ物（農作物）を作っています。

質問 a-4　このプロジェクトをどう思いますか？

A　私を保護してくれますが、今は水や家を作るための木がないのが心配です。

質問 a-5　今抱えている問題はありますか？

A. 胃の病気になっています。しかし病院に行けていません。

質問 a-6　家造りを行っている男性たちをどう思いますか？

A　私を助けてくれている友人だと思っています。ただ、彼らのモチベーションが下がっているのではないかと心配しています。この村では他に彼らがお金を得ることができる仕事があったが、今はボランティアでやっているから。

（佐々木さんの解説：REACH のプロジェクトでは労賃を出すことはしてないので、恐らく他の建設現場での大工としての仕事があるのだろう。）

質問 a-7　家造りが終わって家が完成したら何をしたいですか？

A.　友人を呼んで、一緒に住んで支えてあげたい。また、裁縫ができるので、服を作りたいです。

質問 a-8　家造りの他に彼ら（プロジェクト従事者）にしてほしいことはあるか？

A　今はとにかく家造りを終わらせることだけです。そして、勉強もしたいのです。

質問 a-9　1994 年にはあなたに何が起こりましたか？

A.　当時は 2 歳だったから、詳細は覚えていません。殺された家族のこともあまり覚えていません。でも、テレビなどでジェノサイドのことを知り、父や母が殺されたということを知りました。今は、当時の情報を集めたいと思っています。

インタビューでは緊張していたようだったが、普段はよく笑う少女だった

質問 a-10　ここで働いている人たちが1994 年に何をした人達か知っていますか？

A.　はい、全部知っています。

質問 a-11　和解できたのですか？

A.　今は問題ありません。確かにジェノサイドの後は難しかったが、数年前に彼らを赦そうとして、気持ちが落ち着きました。

質問 a-12　クリスチャンですか？

A　はい。

質問 a-13　キリスト教の教えはどうあなたを助けましたか？

A.　クリスチャンだから赦すことができたし、今は彼らの幸せを祈っている。
そして彼らは私を助けてくれると約束してくれました。

質問 a-14　ジェノサイドを克服するためには過去を忘れることが最善だと思うか？

A　はい。そして祈り、歌うことで幸せになります。

質問 a-15　和解には何が必要だと思いますか？

A　加害者と全てを共有し、ジェノサイドのイデオロギーをなくすことです。そして教会へ行き、祈ることです。　（了）

建設現場にいた大きな牛

【現場 3】

この現場で働いている人達は、GACACA 裁判で有罪になったが、自白したことで減刑になり、REACH が 2007 年から 2009 年まで行っていた、「労働奉仕刑になった人々が家を造る」プロジェクトに参加していた人々。彼らは昨年終わったのだが、自分達の村に帰ってきて、今はボランティアで女性の家を造っている。中心となっているのは、NHK のドキュメンタリーでもクローズアップされた男性。彼は以前、ある女性の妹の殺害に関与し、その女性の為の家造りを行っていた。そして村に帰ってきてから周りに声をかけて家造りを始めた。

被害者女性（受益者）インタビュー

ムカガタレ・サラビエン (57)

質問 b-1　この家造りプロジェクトに関してどう思いますか？

A.　このプロジェクトの前は何もなかった。住むところも。誰も訪ねてこなくて、退屈でした。ここの人達はみんな死んでしまったから。でも、今年になってこのプロジェクトが始まってから、人が訪れてくれるようになり、話をしたりすることで、気分もよくなり、今は幸せです。

質問 b-2　問題はないのですか？

A.　水を汲みにいけません。子供に汲みに行ってもらっています。食べ物もありません。

質問 b-3　家造りをしている彼らとの関係は？

A.　彼らのうち何人かは 1994 年当時近隣に住んでいた人です。そして 1994 年に加害者側になった人もいます。しかし今はすべてを共有しているため、感情は落ち着いています。

質問 b-4　彼らを赦せたのですか？

A　この人達やその家族、親戚は私の所へ来て謝罪し、家造りに参加しています。だから私はこの人達を赦すことにしました。（佐々木さんの解説：この人達が殺人を犯したかどうかは分からない。殺人犯の多くは逃亡してしまっていることもある。とはいえ、ここにいる人達は、この村の家を焼いたり破壊したり、物を奪ったりしたことは事実であり、彼女にとって加害者であることに変わりはない。）

質問 b-5　1994 年、あなたに何が起こったのですか？

A　突然 10 人ほどの集団がやってきて、私や、近所の子供たちを強制的に森に連れて行きました。そこで彼らはナタで私達を切りつけました。そのパニックの中、私は顔を切りつけられ、そのまま地面に倒れてしまいましたが、その結果生き残りました。彼らは全てを切り裂き、一緒に連れてかれた 15 人は全員殺害されました。私一人が死体の下で生き残ったのです。加害者たちはその後数日間はこの辺に留まっていました。

今でも何かをしようとすると、後遺症で頭の中がひどく痛み、苦しんでいます。医療の保険を受けて病院で治療も受けていますが、痛みは常にあり、消えることはありません。日差しの下を歩くだけで、耳の中から血が出ることもあるのです。

インタビューは JRYC ルワンダメンバーのエフレム（左）の通訳によって進行された。佐々木さんも同席して下さり、解説をして頂いた。

質問 b-6　彼らの家造りという行為は、あなたがジェノサイドを乗り越えるのに十分だと思いますか？

A　最近、家造りの進行が遅れていているのです。それに加えて、彼らのモチベーションが落ちてきていることを心配しています。なぜなら、役人がやってきて、彼らにいろいろな他の仕事を与えるからです。私が彼らに「これをして」と指示はできないのです。役人はその代わり（プロジェクト従事者を他の公共事業に借り出すことの見返り）に、私の家造りに必要な木材を準備してここに持ってきてくれると説得し、約束してくれましたが、ルワンダではもうすぐ雨季になってしまいます。私は、もしそれまでに家が完成しなかったらと恐れています。

質問 b-7　なぜモチベーションが落ちていると感じるのですか？

A　ここのリーダーが、家造りの作業に必要なものは自分達で持ってくるように周りの人達に伝えているのですが、最近何人かしか持って来ず、他の人達は持ってきません。

（佐々木さんの解説：彼らも最初は彼女を助けるのに熱心だったのだが、今はプロジェクトの進行が遅れているので、佐々木さんも雨季の心配をしている。建設現場に屋根を設置して雨から家を守り、作業を継続できるように話し合っている。しかしながら、このプロジェクトに従事しているここにいる彼らが、彼女の家造りプロジェクトを優先していることは事実で、本当に彼女を助けたいと思っているし、責任を感じていることは彼女に理解してもらいたい。ただこの集落のリーダーが、彼女の家以外に他に 3 件の家を同時に建設するように彼らに依頼しているので、彼らは大変忙しくなってしまい、作業が遅れてしまっている。また、政府の事業で小学校建設にも携わらなくてはいけなかったこともあった。当然彼らは彼女の家造りが課されていることは知っているのだが、多忙になってしまったので、彼女には彼らのモチベーションが下がっているように見えるのかもしれない。）

質問 b-8　REACH の和解のためのセミナーには参加しましたか？

A　はい。たくさんのことを得ました。神に祈り、そして加害者を赦すことを学びました。今は彼らのためにも祈れます。そのおかげで今は問題がないのです。

質問 b-9　この家造りに参加している全員がこのプロジェクト、行動の意味を理解していると思いますか？

A　はい、全員が理解しています。

１つ１つ手作業で土レンガを積んでいく

質問 b-10　個人的に話すことはありますか？

A　はい。彼らは隣人、近所の人だから。でも、私を直接ナタで切りつけた人もこの中にいます。家造りに参加しています。

（佐々木さんの解説：先程の質問の時点では、この中に直接の加害者はいるか話の中では判断しかねたが、恐らくこの中に殺人を犯した加害者がいるというのが事実だろう。）

質問 b-11　子供達（彼女は未婚なので、孤児となってしまった、姉／妹の子供達）に、ジェノサイドの事実や REACH の取り組みについては伝えましたか？

A　はい。この従事者の中に親を殺した人もいると伝えています。でも、心配はいらないと言っています。

人が多くいるためか、建設現場には子供達が集まって遊んでいる。建設している男性達の間とは流れている空気が全く違う

質問 b-12　ジェノサイドの直後は憎しみがあっただろうが、その後、心の変化をもたらし、彼らのために祈ろうと思ったきっかけやターニングポイントは何だったのか？

A　最初は、すれ違っても目を合わすのも嫌でした。しかし、加害者（家族を殺害した人とは限らないが）のうちの数人やその兄弟、親戚達が「赦して下さい」と謝罪に来てから変わった。もちろん彼らが何をしたのか忘れたわけではないし、しっかりと理解している。でも、謝罪の後に赦したことで、今は精神が安定しているし、生活を楽しめている。赦し、彼らと話したことで、私と子供達の環境が改善されたように感じている。

ただ、まだ問題も抱えています。私を傷つけた本人（今は病気らしい）や家族を殺した当事者達がまだ直接私に“言葉”で謝罪に来ていません。水を持ってきてくれたり、プロジェクトに参加したりして行動では謝罪の意を示してくれています。でも、行動だけです。私は言葉での謝罪を待っています。彼らは私の目の前に来て謝ることを恐れているのかもしれません。

質問 b-13　あなたが今育てている子供達が将来成長して、もしあなたの家を破壊したり、家族を殺した当事者の子供と結婚したいと言ったら、どう思いますか？

A　この子達が大きくなって自分達で選んだのなら、私には何もできないと思います。幸せに感じるでしょう。問題ありません。

質問 b-14　1994 年のような悲劇を二度と繰り返さないためには、何が最も重要だと思いますか？

A　ジェノサイドは恐ろしいものでした。私達のそれぞれが「二度と起こさない」と思うことでしょう。こうやってルワンダやジェノサイドについて知りたいという人が訪れてくれて、話をしてくれるのはすごく幸せなことです。　（了）

土レンガは、赤土とわらを練り型に流しこみ、日干しにして作る。1つでも見た目以上に重い。
雨期に入るとレンガを天日干しできなくなってしまう。

加害者男性インタビュー

タデュ・ハビヤカリ　45歳

質問 c-1　1994年のジェノサイドの際、あなたは何をしたのですか？

A　近隣の人々を殺した集団の中にはいましたが、直接殺してはいません。

質問 c-2　子供はいますか？

A　はい

質問 c-3　自分がしたことを子供に伝えましたか？

A　はい。拘留中、GACACA裁判にも子供は来ていて、全てを見ていました。過去の過ちを認めたことも知っています。アドバイスをもらって、家族に自分から話したこともありました。そのため、子供たちは私が1994年に行ったことをすべて知っています。

質問 c-4　先程のサラビエン（被害者女性）の家族に対し、何をしたのですか？

A　1994年当時、彼女の家族を攻撃し、殺した集団の一人でしたが、殺してはいません。

質問 c-5　では、その集団の中での役割はなんだったのですか？

A　襲撃の際、私は殺害に加担することになっていました。しかし危害は加えましたが、実際には誰も殺していないのです。殺害の様子を見ていました。

刑務所から出てきて、REACHのセミナーに何度か参加して、そして「私に何ができるか？」という手紙をREACHに書きました。私は家を破壊したが、どうしたらよいかと。

その後REACHのスタッフが私を招いてくれて、プロジェクトを紹介してくれたのでこのプロジェクトに参加しました。私はヴァレリアという女性の家造りを行うことにしました。家造りをして女性のことを思い出すと、怖くなりました。でもヴァレリアの家造りが終了すると、少し気持ちが落ち着いたのを感じたのです。だから今もこのプロジェクトの参加を続けています。

今はサラビエンの家造りに参加しています。彼女の所に来て、何も示さないまま、ただ「あなたの家族を殺した集団にいました。赦して下さい」と謝罪することはすごく怖かったのです。だから、まずは家造りを終わらしてから、ちゃんと言葉で謝罪したい。REACHのアドバイスがあったからこそ家造りを通して和解に近づけているし、彼女とも話せるようになった。そういう機会やアドバイスを与えてくれたREACHにはとても感謝しています。

質問 c-6　先程サラビエン（被害者女性）は、彼女は家造りの行為には感謝しているが、あなたのような当事者による言葉での謝罪を求めていると言っていたが？

A. この家造りに参加している人の中には、彼女の家族を殺した人が６，７人いる。家造りが終わったら、彼らは彼女に言葉で謝罪する計画をしています。

質問 c-7　なぜあなたたちは人を殺したのですか？多くの人たちが殺されている間、どう感じていましたか？

A、分かりません。私達は長い間、政府に扇動されていました。政府は互いの民族を敵だとみなして、憎しみ合うように私達を仕向けていたのです。

質問 c-8　では、それまでの民族対立の扇動は間違いだった、自分が行ってきたことが間違いだったのだと気付いたのはいつですか？

A, コンゴからルワンダへの難民の問題や、刑務所・GACACA での経験を通して、人々から教わりました。そして REACH のセミナーに参加したことで、自分が間違っていたと気付きました。

質問 c-9　いまだに罪の意識はあるか？

A、はい。

質問 c-10　その意識は、被害者に謝罪することで消えると考えていますか？

A　働いていても、寝ていても、何をしていても自分が行ってしまったことへの罪の意識に苛まれて気分が悪くなります。でも、まずは彼女の為に家造りをして、彼女に幸せや感謝を感じてもらい、謝罪して赦してもらうことが必要です。しかしどうなるか分からないという恐怖を感じています。

（佐々木さんの解説：消えるかどうかはわからないし、消えてしまっても困る。しかし、楽にはなるのだろう）

質問 c-11　この家造りの現場で一緒に働いている全ての人が、自分たちがしてしまったこと、そしてこのプロジェクトの意味を理解していると思うか？

A　はい、私達自身でも話し合いを行いました。

家造りは大変な作業であり、生半可な覚悟では毎日続けられない。

質問 c-12　ジェノサイドを二度と起こさないためには、何が最も重要だと思いますか？

A　今の新しい政府は過去の政府とは全く違います。以前は差別のせいで、仕事もできず、学校にも行けなかった。今は階級を作らず、みんなを平等に扱います。そして、ジェノサイドのことをよく理解することが大事。

質問 c-13　自分の子供への将来の希望、望みはなんですか？

A　私達のようにならないでほしい。いい学校に入って、結婚して、そして働いてほしいです。そう願っています。　　（了）

5. 感想

海原 早紀

被害者の女性に会ったとき、生々しく残る彼女の顔の傷を見て、「この人はジェノサイドの被害者である」というリアリティが一気に襲ってきた。森で殺害されそうになって、死体の山のなかで一人生き延びたという体験談は本当に奇跡的だと思った。

加害者側に関しては、当時の自分を客観視できるようになっていることに感心した。当時自分があんなことをしたのは政府が憎しみを植えつけたからだ、今はジェノサイドの結果を理解することが大事だ、と冷静に振り返っているのが印象的だった。そして親のようになって欲しくないから子供たちにちゃんと伝える、という意識は大変前向きであった。

とはいえ、罪の意識は消えていないようだった。そして被害者の方も身体的、精神的苦しみはまだ続いている。その被害者、加害者が同じ現場にいて話をする環境にいるということが、どれだけ大きな意味を持つか、実感した。互いに顔を合わせることは、和解の最初のステップでありながら一番難しいはずだ。さらに進んで謝罪がなされたからと言って、全てをナシにすることはできない。それでも、双方の当事者を一緒にして、赦しを生むのが REACH のプロジェクトであった。

また、和解はそう簡単ではないことも２人と話していて実感した。被害者の女性は謝りに来ていない男性をまだ待っていた。そして、今回インタビューした彼らは REACH に支援されて和解が進みやすい環境にいたが、そうでなければ、一生謝りたいけど謝れない、赦したいけど赦せない、そんな思いをもっている人たちがいてもおかしくない。ルワンダにおける和解はまだまだ「進行中」だった。

岩井 天音

REACH の活動、特に家造りに関しては、NHK BS 世界のドキュメンタリー（『“償い”と“赦し”の家造り　～ルワンダ・大虐殺からの模索～』）を何回か見たことがあったので、知識としては知っていた。しかし理解できない点もいくつかあった。例えば「キリスト教に基づいた“和解”の精神」や「加害者のために祈る」という行為である。私はノンクリスチャンであるので、何故「キリスト教」を持って赦せるのか分からなかった。

しかし今回 REACH で実際にこの目で見学すると、虐殺被害者と加害者の和解はキリスト教という土台があるからこそ出来るのだ、ということを改めて学んだ。というのは「キリスト教があるから赦せる」という単純な図式ではなく、「人間の力では赦すことはできないから神様の力を借りて赦そう」ということを被害者の方のお話を聞いた中で感じたからである。人間の無力さを認めた上で、神に祈る。それは絶対的な信頼を持った行為になるのではないだろうか。今はそう理解することが出来た。

古屋 亮輔

私は 2008 年の渡航でも佐々木さんのお世話になり、REACH が主催する和解のためのセミナーを見学した。だが直接「加害者が被害者に償う」現場を見たわけではなかったため、日本のドキュメンタリー番組でも取り上げられている家造りプロジェクトの現場を見てみたかった。

初めて現場を訪れてまず思ったのは、そこは地域の子供が普通に見に来るような、「ただの建設現場」だったということである。佐々木さんは加害者が身近で働いている様子を子供たちが見ることで、彼らもルワンダ社会に復帰していることを理解できると言っていた。しかし、これは今回の活動の中で何度も考えたことだが、子供たちは彼らがどれだけの罪を犯し、どんな経緯を経て働いているのか知っているのだろうか。REACH のみならず、虐殺加害者はルワンダ中で罪を償うために働いている。働く現場を見せることも大切だが、彼らの犯した罪と現在の労働奉仕との関係をしっかり伝えることがルワンダ社会の将来のためには必要だと思う。

また作業を手伝ってみて非常に驚いたのが、土でできたレンガひとつひとつの重さだった。淡々と運んでいる作業員の様子からはまったく想像できない重さを実感し、「無償で」このプロジェクトに参加している加害者たちは真剣に自分たちの罪を償おうとしているのだと感じた。

インタビューでは、まず被害者女性の頬の大きな傷に思わず目を止めてしまった。これまで何人ものルワンダ人と関わってきたが、「94 年に被害を受けた」と明らかにわかる人を自分の目で見たのは初めてだったと思う。改めてこの国でかつて起きた出来事の恐ろしさを見た。

そして、インタビュー中被害者の女性が終始厳しい表情であったのに対し、加害者男性は罪の意識を感じつつも何か悟ったような、すっきりした表情をしていたことがとても印象的だった。個人の性格にもよるのだろうが、ふたりの表情はルワンダの加害者と被害者の心境を表しているような気がしてならなかった。

プロジェクトに参加している加害者も被害者も、「すべてを共有しているから問題ない」と口をそろえる。しかし、対話を重ね、赦したと自覚していても両者の深層心理には微妙な違いがあるように思う。表面には表れないこの差をどう埋めるか、それが今後のルワンダの課題になるのではないだろうか。

池上 純平

現場からキガリへと戻る佐々木さんの車中、荒れた道に体を揺られながらずっと 1 つのことを考えて続けていた。「どうして手を差し出さなかったのか。」

REACH の現場は、私にとって、初めてジェノサイド加害者と対談する場となった。REACH を訪問したのはルワンダを離れる前日であり、私達はそれまでに多くのことを現地で学んだ。そして、この直前には実際に被害を受けた女性にも話を聞いていた。だからこそ、彼と直面した瞬間、体の中に得も言われぬ緊張感が生じた。自然と手に力が入るのが分かった。

インタビューを通して、彼が本当に過ちを反省していること、そして自発的に被害者の為に行動していることが伝わってきた。もちろん、それは同時に自分自身の為でもあるのだろうけれど。

私が「あれ？」と思ったのはインタビューが終わった後だった。先述したように、私達は被害者女性と対談したのだが、その際、全員が握手をして終わった。しかしながら、この時、誰も加害者男性とは握手をしていなかった。

ここから先は、参加したメンバーの総意ではなく、あくまで私個人の解釈であることを記しておく。「なぜ握手をしなかったのか。」もしかしたら、うっかりしていただけなのかもしれない。日本に帰ってきてこの話をした時、そう言う人もいた。確かに、本当にそうだったのかもしれない。でも、少なくとも私にはそう思えなかった。そこにはもっといろんな感情が存在していて、その帰結だったのじゃないかと。

恥ずかしながら、このことを佐々木さんに伝えたところ、こういうお答えを頂いた。「もしかしたら、『同じ人間』としてではなく、『加害者』としてみていたのかもしれませんね。しかしそれは無理からぬことだと思います。話を直に聞き、言葉を交わし、肌を触れ合わせる中で、彼らも私たちも同じ人間であることに気付くのですから。」

共生してくとは、突き詰めていけば、目の前の相手とどう接するかということだと思う。「互いを知ること」の意味の大きさに気付かされたと同時に、こういった 1 つ 1 つの理解が重ねられていくことを願った。

最後に、我々の活動にご理解を示していただき、ご多忙の中現場に同行させてくださった佐々木さん、フィデールさんなどの REACH スタッフの皆様、インタビューに応じて下さったセンティアさん、サラビエンさん、ハビヤカリさんなど、協力して頂いた皆様にメンバー一同心より感謝申し上げます。

ルワンダの社内事情
～Rwandatel の事例より～

今回の渡航で最も悔しかったことは、訪問先の候補として挙がっていた Rwandatel という通信会社へ行くことが叶わなかったことでした。

ルワンダでは農業に次ぐ経済発展の担い手として IT 産業を掲げており、たしかに国内では携帯電話の普及はすさまじいものでした。街を歩けば、MTN（南アフリカの会社）、tigo（ルワンダの会社）、Rwandatel（一番新しく、一番安い）といった通信会社のパラソルに売り子が立ち、どこにいてもプリペイドカードが買える状態でした。

ルワンダの将来を考えるにあたって、是非ここを訪問して働いている人に話が聞きたいと私たちは考えました。現地の OB を通して事前に企画書を送ってもらいました。

到着してから毎日毎日電話してもアポがとれません。理由は、ボスから許可がおりたのにそのサインが入った企画書を秘書が紛失してしまった、ということでした。

最後の訪問チャンスを次の日に控え、もう電話では埒が明かないと判断した私達は、企画書のコピーを持って直接 Rwnadatel のオフィスへ突入。行ってみると、「申し訳ないけど対応できないわ。秘書のいる本部オフィスまで行ってみる？」

これこそ、たらい回しですね、と言いたくなるのを我慢して本部で行きました。

Ecobank Building というガラス張りのビルで、入り口にはガードマン、レセプションでは identification を要求されるほど管理の厳しい、新しく立派なオフィスビルでした。上層階の Rwandatel へ到着すると、秘書のおねえさんは「まだ見つからないの、ちょっと座って待ってて。」でも企画書は見つかりません。もうこっちは必死なので「あなたでもいいから、ジェネラルな話題だけでもいいから、ちょっと話を聞かせてくれ！」と頼み込んでも絶対ダメ。ボスのサインがないと絶対ダメ。結局訪問を断念しました。

とにかく今回学んだのは、ルワンダ社会が「報道」に少しでも関わるようなことに対して敏感だということ。例え、大学生数人がインタビューして団体の報告書やビデオにするだけでも、ボスの許可を必要とする頑固な体制。ビデオ撮影においては他にも街中で撮影していると注意される場面がたびたびありました。ルワンダは厳しい報道規制で有名ですが、こんな些細なことにまでも、ルワンダの窮屈さを見てしまいました。

（海原）

【第４章】
学生意識調査アンケート結果

学生意識調査アンケート「政治」

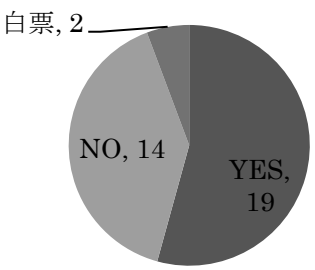
2009 年は学生生活および恋愛についてのアンケートを実施し、ルワンダの生の声を集めることができた。2010 年は両国ともに国政選挙が実施されたことを踏まえ、政治に対する意識・行動について学生間で違いはあるのか、18 の質問を用意して調べることにした。

担当：古屋 亮輔

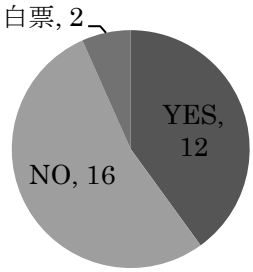
有効回答数：日本 35　ルワンダ 44

Q.1　投票しましたか？

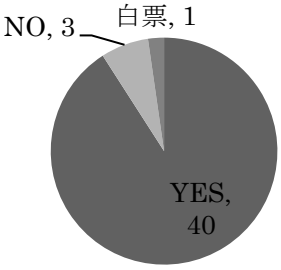
日本：2009 年衆議院選挙



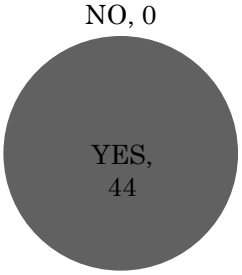
2010 年参議院選挙



ルワンダ：2008 年下院選挙

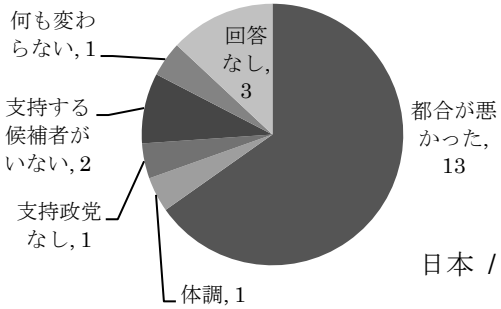


2010 年大統領選挙

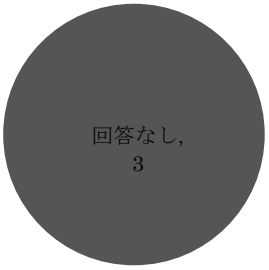


Q.2　投票しなかった理由は？

都合が悪かった / 体調が悪かった / 支持する政党がない / 支持する候補者がいない
投票しても何も変わらない / 忘れていた



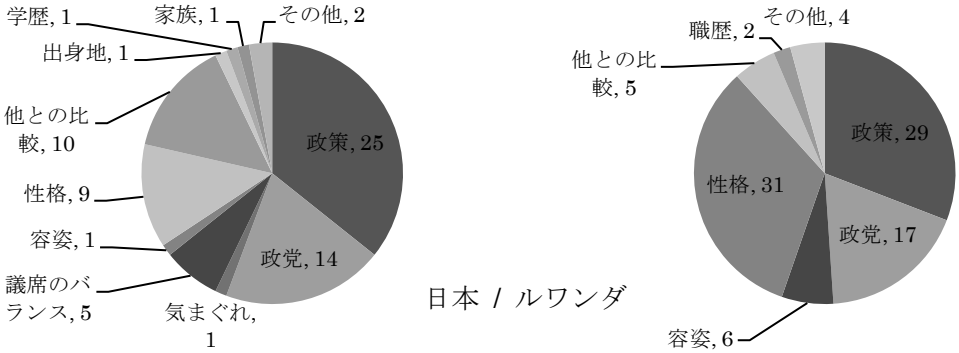
日本 / ルワンダ



Q.3　支持する政党はあるか？

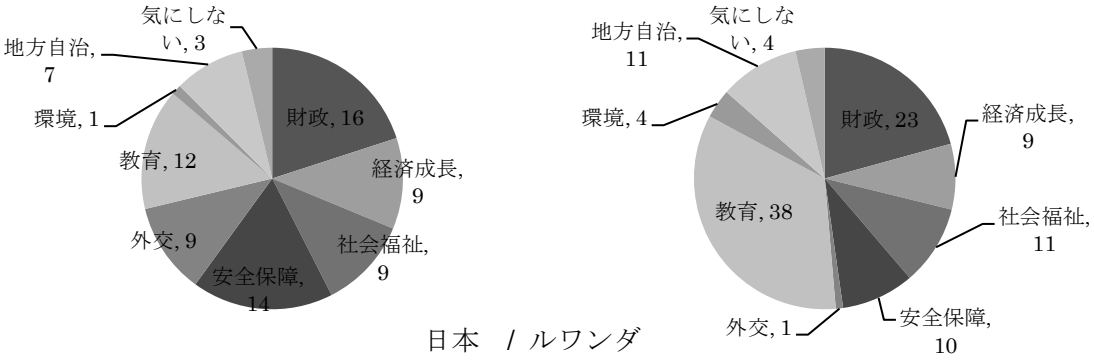
Q.4　投票先を選ぶ基準は？（３つまで）

政策 / 政党 / 議席数のバランス / 気まぐれ / 候補者の容姿 / 候補者の性格
他の候補者と比べて良い候補者 / 候補者の（出身地 / 学歴 / 職歴）
（家族の / 友人の / 先生の）助言 / その他



Q.5　選挙のとき重視する政策は？（３つまで）

財政 / 経済成長 / 社会福祉 / 安全保障 / 外交 / 教育 /
環境 / 地方自治 / 政策は気にしない、関心がない / その他

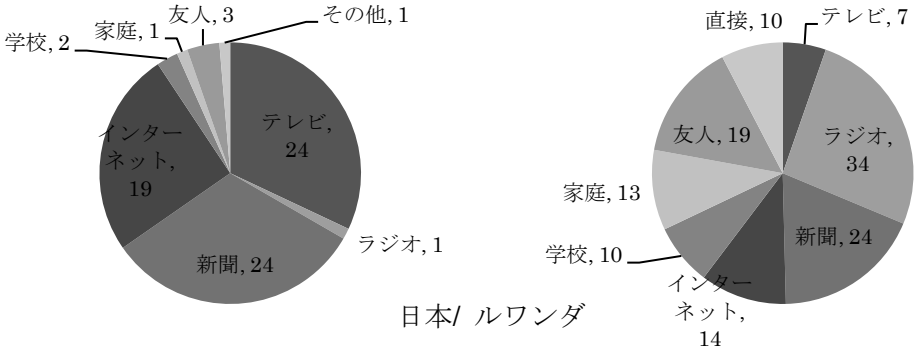


Q.6　日頃政治に関心を持っていますか？

日本 / ルワンダ

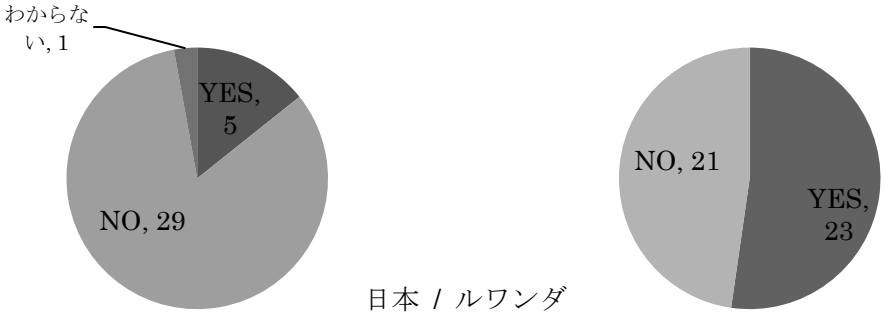
Q.7　政治に関する情報をどうやって入手しますか？

テレビ / ラジオ / 新聞 / インターネット / 学校 / 家庭 / 友人 / 直接 / その他



日本/ ルワンダ

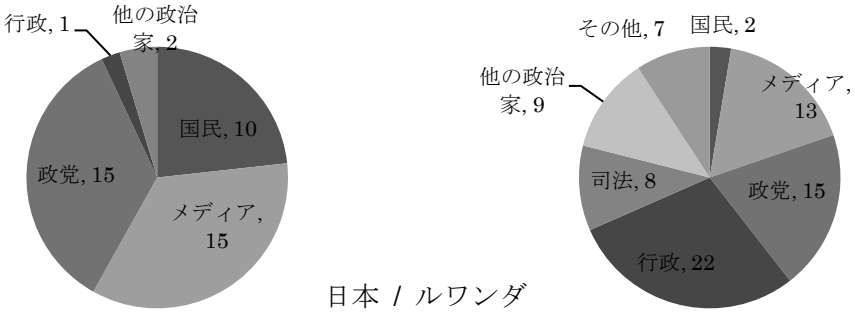
Q.8　政治家は自分の思想・良心に従い自由に発言していると思うか？



日本 / ルワンダ

Q.9　思わない場合、制限するのは？

国民 / メディア / 政党 / 行政 / 司法 / 他の政治家 / その他

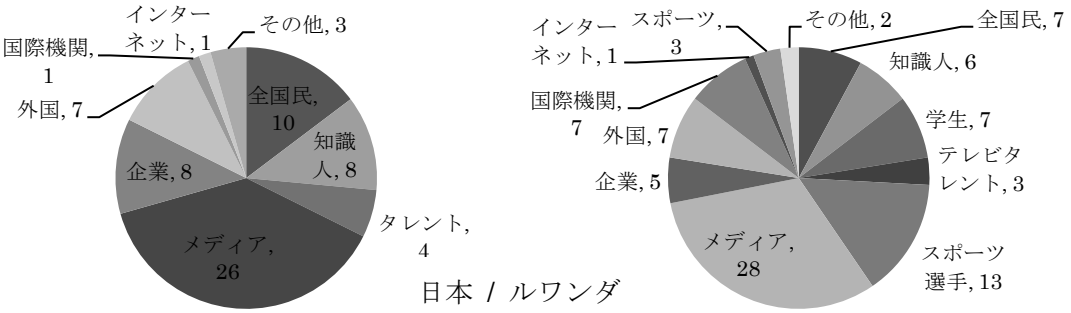


日本 / ルワンダ

Q.10　政治を動かす力が大きいのは？（３つまで）

全国民 / 知識人 / 学生 / テレビタレント / スポーツ選手 / メディア

企業 / 外国 / 国際機関 / インターネット / スポーツ / その他



日本 / ルワンダ

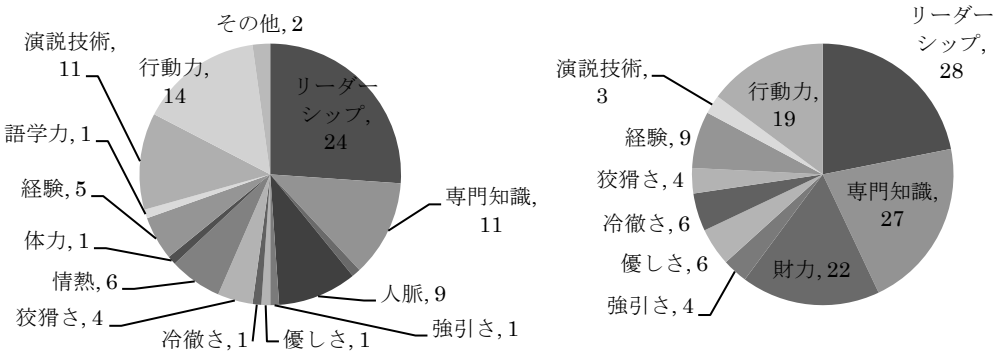
Q.11　国の政治は機能しているか？

日本 / ルワンダ

Q.12　政治家に必要なものは？（３つまで）

リーダーシップ / 専門知識 / 財力 / 人脈 / 強引さ / 優しさ / 冷徹さ

狡猾さ / 情熱/ 体力 / 経験 / 語学力 / 演説技術 / 行動力 / その他



Q.13　秘密投票は確保されていると思うか？

日本 / ルワンダ

Q.14　国民全員にとって一票の価値は平等だと思うか？

日本 / ルワンダ

Q.15　投票の自由はあると思うか？

日本 / ルワンダ

Q.16　国の民主主義は機能しているか？

日本 / ルワンダ

Q.17　政治は生活に影響を与えているか？

日本 / ルワンダ

《感想》

この活動に携わっている者なら「ルワンダの大学生は国のエリート」とは誰もが想像できることであり、私自身も彼らはきっと数年後には国を動かすような立場にいるのだろうと思っている。だから政治に関してもきっと日本の大学生より関心が強く、主体的に考えているのだろうと想像していた。しかし実際にアンケートをとってみると日本・ルワンダの学生の間に期待していたほどの大きな差は見られなかった、というのが率直な印象である。「日頃政治に関心を持っていますか？」に対する回答の割合は日本とほぼ同じだったし、「政治は機能していか？」「投票の自由があるか？」「民主主義は機能しているか？」といった質問でも No と答える学生は日本と同じくらいいた。結局ルワンダの学生も政治へのアクセスは日本人と大して変わらないし、政府への不満を少なからず持っているのだと思う。

その中でも結果に比較的大きな差が表れた事項を以下に挙げてみる。

Q.4（投票先の基準）で「政策」と同じくらい「候補者の性格」を重視している。
Q.5（重視する政策）でほとんどの学生（44 人中 38 人）が「教育」にチェックを入れていた。
Q.9 政治家の発言を制限する力として「行政」「司法」が多い一方「メディア」が少ない。
Q.14「一票の価値」に対する考え方。

といったところだろうか。個人的には重視する政策で「教育」を挙げていた点がもっとも印象的だった。本人たちが大学に通っているという状況も影響しているとは思うが、自分たちの生活に直接関係しない教育が重視されているのは意外だった。政治リーダー教育、ジェノサイドに関する教育、外国語教育など、政治家も先を見据えていなければ支持されないのだろう。目先の景気や「政治とカネ」とか言って安易に投票先を決める日本人にも見習ってほしいものだ。

昨年の「学生生活」「恋愛」に続いて「政治」をテーマにしたが、ルワンダ人メンバーも興味を持って回答してくれた。この結果はルワンダにも是非伝えたいし、これからも相互理解を目指して様々な角度から互いの価値観や社会を分析したいと思う。

そして何よりアンケートに協力して下さったみなさん、どうもありがとうございました。

《協力》

早稲田大学、横浜市立大学、大阪大学、ルワンダ国立大学のみなさん

コラム　乗り継ぎの楽しみ方　～アディスアベバ編～

ルワンダでの濃密な日々が終わり、古屋・池上・海原・岩井の４人はまったくのプライベート旅行であるトルコ・イスタンブールに向かっていた。キガリを出発し、飛行機からは降りられないがウガンダのエンテベ空港に寄り、そこからエチオピアのアディスアベバ、イスタンブールというルートである。これはその道中アディスアベバのお話。

私は正直、エチオピアという場所がどのような場所なのかまったく想像がつかなかった。知っているのは「世界最貧国のひとつ」「陸上の長距離に強い」「コーヒーの原産地」「ウンコアンデナマットーはアムハラ語というエチオピアの言語である」ということくらいだった。お恥ずかしい限りである。だからアディスアベバ空港を経由して少しでもエチオピアの空気を感じられるというのはとても楽しみであった。もちろん、空港に立ち寄るだけでその国のことがわかるとは毛頭思っていないが。

さて到着して飛行機を降り、ターミナル行きのバスで空港入り。近代的で綺麗な空港内には免税店、おみやげ屋、レストラン、両替所などがズラリと並んでおり、おみやげ屋にはルワンダで売っているのとまったく同じ「アフリカっぽい」キーホルダーやアクセサリーがたくさん置いてあった。そんな中私たちの目を引いたのが、エチオピア伝統衣装の店である。

白地に幾何学模様の装飾をあしらった見慣れぬ伝統衣装。店内には他にも赤・黄・緑の国旗カラーの派手なニット帽やバンダナなどがズラリと並んでいた。初めて目にするこれらの服に私たちはミーハー丸出しの大盛り上がりで、そこらへんの服を次々と試着室に持ち込んでは互いに披露しあった。値段も 10 ドル前後と手頃であったため、古屋・岩井は果たしてそれを日本で着る機会があるのかなどと余計なことは考えず、それぞれ気に入った服を購入した。

買い物の後はビールを飲んだり花札をしたりで時間をつぶし、イスタンブール行きの飛行機を待った。
「搭乗ゲートを通ってから搭乗券を発行する」という不可思議なシステムを採用していたり、アナウンスなしで搭乗時間が２時間遅れたりといささか不便な部分もあったが、アディスアベバでの乗り継ぎはバカンスの始まりらしく非常に楽しいものとなった。

（古屋）

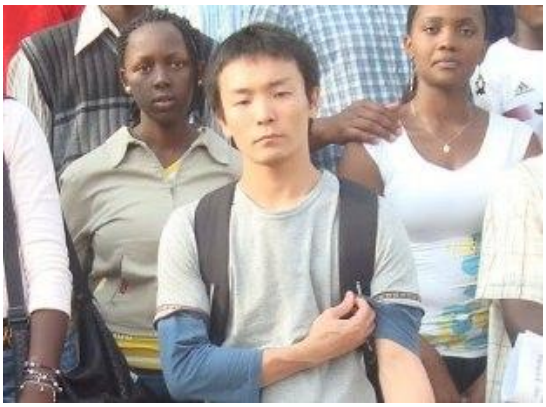
【第５章】

参加メンバー　感想

古屋亮輔 早稲田大学法学部 ……162
海原早紀 早稲田大学文化構想学部 ……164
池上純平 早稲田大学大学院政治学研究科 ……166
井上真希 早稲田大学社会科学部 ……169
宮本寛紀 横浜市立大学国際総合科学部 ……174
岩井天音 国際基督教大学教養学部 ……176

古屋 亮輔

早稲田大学法学部 4 年



大学 2 年生だった 2008 年の夏。単に「時間の余裕があるから、行ったことのない場所に行ってみたい」というだけの理由でルワンダ・プロジェクト、現在の日本ルワンダ学生会議に入った。ルワンダのことなど大して知らず、好奇心と偶然に導かれてやって来たこの場所に、今度はリーダーとして戻ってきた。

さて、私にとって 2 度目のルワンダ渡航の目的は何だったのだろうか。現在のルワンダ社会を自分の目で見る、虐殺後の社会を知る、学生交流、異なる価値観に触れる、など団体自体の渡航目的として挙げられるこれらの目的も、前回の渡航で既に達成しているような気がした。つまるところ、私個人の目的としては、

「友達に会いに行く」

これだけのことだったのだ。もはや目的というほどのものでもない。この 2 年間で、ルワンダという国は私にとってそれほど近い場所になっていた。

しかし改めて彼の地を踏んで見たものは前回とだいぶ違った。新しい発見や出会い、前回との違い、自分自身の変化。来る前に考えていたよりずっと多くのものを得た。

例えば「子供の笑顔」。2 年前の私は、子供はいつも笑顔で希望に溢れている、という単純な感想をもった。まあそれは確かにそうなのだが、ではその先の問題として、無邪気に笑っている子供たち、ルワンダの将来を担う彼らに対して大人たちは歴史をどう伝えていくべきなのか。現在の公教育でジェノサイドが教えられることはないと、今回の学生会議で知った。子供たちのニュートラルな民族意識を保つことも必要だろうが、現実にジェノサイドの「当事者」と共に暮らしている以上、ルワンダ人同士がかつて殺し合った歴史を単なる「過去の出来事」として伝えることはできないはずだ。口述伝承に頼る現状のまま子供たち自身が国を動かす時代が来たとき、果たして現在の安定は保てるのだろうか。楽観するだけではいけないと思うようになった。

そしてここに記さなければならない最大の変化。キガリの虐殺記念館を訪問した時だった。今回はカリオペとエフレムが同行してくれたのだが、そこでルワンダ人と一緒に虐殺の展示を見ていることに、私は言い知れない違和感を覚えた。自分自身が経験したジェノサイドを客観的に、平然と見ているルワンダ人ふたりの姿と、解説付きで同じものを見る日本人の姿があった。見ているものこそ同じだが、日本人が記念館に行くのとルワンダ人が行くのとでは、その意味が同じであるはずはない。そこからは街を歩いている時も、各所を訪問する時も、「ジェノサイド」という言葉が私の頭のどこかを巡るようになった。

その絡みつく違和感の正体に気付いたのが、ギコンゴロのムランビ虐殺メモリアルを訪問した時だった。どうしようもないリアリティを目の当たりにして感情を堪えき

れない日本人と、それを支えるルワンダ人。日本人に対してメモリアルの感想を求めるルワンダ人。

私は、彼らが過去にジェノサイドを経験したのだと気付いた。

彼らはジェノサイドを経験し、それに関するあらゆる感情を経験し、それから未来に目を向けた結果として今を生きている。今私たちと話をしている。私の認識は「この平和な国で本当にジェノサイドがあったのか」から「この国はジェノサイドという過去を確実に経験し、今がある」へと変化した。

彼らが日常的にジェノサイドのことを考えているわけではない。国家としても、国民としても、16 年前の出来事は乗り越えつつあるのだと思う。しかしその出来事は、間違いなく今のルワンダ人のメンタリティに根を下ろしているはずである。「相互理解」「文化交流」「将来への可能性」私はそんなポジティブな面しか見ていなかった。見ようとしていなかったのかもしれない。この団体に入ってからの 2 年間が無駄だったとまでは言わないが、私は決して避けては通れない事実に目を向けていなかったように感じた。移動中のバスではそんな悔しさが込み上げていた。

昨年の報告書を読み返してみるとわかるが、今年の渡航はだいぶ方向性が違う。ジェノサイドや和解といったテーマから少し離れ、学生との交流に更に重点を置き、ルワンダ社会の将来をより考えるためのプログラムだった。しかしその結果として逆に深くジェノサイドについて考える機会を得、考える必要性を感じた。それも今思えば当然の結果であったような気がする。

とここまでジェノサイドの話ばかり書いたが、忘れてはならないのは今回のルワンダでの活動が「とても楽しかった」ことだ。全力でソーラン節を踊り、濃密な学生会議をして、アフリカンタイムの中で文字通り時間を忘れ、コラムに書いてある通り話のネタがいっぱいの 2 週間を送った。渡航メンバーが確定してから約 3 ヶ月の準備期間も含め、「とても楽しかった」。そして、渡航メンバーのリーダーとしてもっとも誇れる点は何かと訊かれたら私は間違いなく「日本人メンバー同士が仲良くなったこと」と答える。

幼稚な答えかもしれないが、常に一緒にいた日本人同士の仲が良いからこそ、感想を共有したり、感情を隠す必要がなかったり、本気の議論ができたりするわけだ。私が全力でルワンダを楽しむことができた要因は他ならぬ、メンバーに恵まれたことである。

私はこの経験を一生忘れることはないだろうし、他の 5 人もきっとそうなんだと思う。面と向かってはなかなか言えないので、この場を借りて改めて 5 名の渡航メンバーに言おう。

「むらこぜちゃーね」

海原 早紀

早稲田大学文化構想学部 3 年

私は「相互理解」「対等な関係」といった理念に惹かれてこの団体に入った。以前の私にとって、テレビに映る肌の黒い貧しい人々はリアリティが伝わってこない「アフリカ人」であったし、その人たちと関わるチャリティやボランティアにも違和感があった。しかしこの団体は、私が無関心だった世界について全く違った視線で語っていた。「アフリカ人」とまじめに向き合い、そして今までの人生で完全にシャットアウトしてきた世界に触れたとき、自分はどう変わるのか、試してみたいと思った。

そして今夏初めてルワンダに渡航した。

ルワンダはまさに発展途上の国で、ガラス張りのギラギラしたビルからふと目を落とすと子供がお金をねだってくるというような状態だが、そんな経済的ギャップの問題とは別に、ルワンダはジェノサイドを乗り越えるという課題を抱える。現在でもトラウマに襲われる人は多いというが、私が出会って話したルワンダの人々の生き様はたくましかった。

それを強く感じたのがギコンゴロメモリアル。ショックを受けている私を支えてくれたルワンダの友人たちは忘れられない。

涙している私を抱きしめて慰めてくれたクリステラ。こんなにも、誰かに寄り添うのが必要と感じたのは久しぶりだった。それでも「you have to be strong」と言って、他の遺体も全部しっかり見せられた。

アルフレッドは親戚をここで亡くしたそうだ。遺体を見せものの様に扱っていることについて聞くと「歴史を記憶に残すためだから、しょうがない」と答えた。

そして、モーリスはギコンゴロのミイラを前にして、「This is our history」と言っていた。見学後に率先して私たちの意見を聞きに来たのも彼だった。私たちに知ってもらいたいという気持ちが強いのだろうか。

冷静な彼らを見て、人間は時間が経てばやはり辛い記憶は薄らいでいくのかと思ってしまったが、そんなはずはない。皆が過去を背負いながら前を向いて歩いていると私は感じた。そして、きっとお互い支えあって生きてきたのだ、と。自殺に関する学生会議で、ルワンダメンバーが友人の悲しみを共有することに積極的だったことを思い出す―「You can't hold other peoples' problems in your heart, but you can hold them in your hand」（誰かの悩みは解決することができなくても、それを一緒に持ってあげることはできる。）ルワンダでは、加害者・被害者に関係なく、皆が同じジェノサイドという惨劇を目の当たりにしたのだから、それを共有することで、未来を見られるようになったのではないかと思った。皆が家族のような存在だと言うインダンガムチョメンバーのように、私も辛い現実を前にして、友人に支えられることで救われたのだ。

生涯忘れないと思うほどの経験を味わった渡航だったが、果たして私が目指していた「相互理解」はルワンダで実現されたのだろうか。実は、活動を続ければ続けるほど「相互理解」がわからなくなる。現地で貧しい人を実際に目の前にして、理念が単なるきれい事のように思えてくることもあった。実際に見に行って、学んだ様々な現状を自分の手で解決することができない、そのもどかしさをメンバー全員が一度は感じたのではないか。

それでも、この「相互理解」という言葉を掲げているのは、逆に皆がそのきれい事に思えるような理念を信じているからだ。お互いを一人の人間として尊敬して付き合わない限り、本当の意味での協力関係が生まれるはずがない。「違う」ことを前提にして交流すると自分にはなかった価値観を素直に受け入れることができ、知らない世界を見てショックとも言える体験をすることは、私が将来生きていく過程で必ず社会に還元されていくのだと思った。

日本人を、ただのお金をホイホイくれる援助者だと思わないで欲しい、ルワンダ人を、ただの助けてあげなくちゃいけない貧民と思いたくない、私はそう願っている。

ルワンダという国を知ってから 2 年。友達との再会や新たな出会いがあり、ルワンダがより一層身近になった。

しかし、同時にルワンダ人とは住む世界が違うと感じるのも確かだ。日本に住んでいれば、努力さえすればどんな夢でも持てるが、ルワンダで一番エリートのはずの NUR の学生でさえ仕事が見つからないと皆口にしていた。そして普段から貧しい人々に囲まれて暮らしていることも決定的に違う。トゥワ村でモーリスが学校を中退したアマニ少年のために何かしようと動いたように、私達とはどこか感覚が違う。またある学生会議では、私が議題であった無職の老婦人を自立させるアイデアを思いつかない、と言った時「じゃあこの人は死んじゃうね」とピオに言われた。会議の場ではあったけれども、それがルワンダの現実なのだ。

しかし、今回の渡航を通してその住む世界の違うルワンダと、日本に住む私は「繋がっている」と感じた。よく言われる「ジェノサイドのときに国際社会は無関心だった」この意味が良くわかった気がする。当時の人々はやはり「繋がっている」感覚がなかったのだ。私も二年前にはリアリティを持てなかったアフリカの人は確実に世界の反対側で存在していた。経済面でルワンダと日本が関係しているだけでなく、私の感覚として NUR の学生でいえば、同じよ

うにテストに終われ、恋愛に悩み、サークル活動に励む。そして一般的な農村の人々においても、子供たちは珍しいものに群がり、老人は尊敬され、皆ビールと歌を楽しむ。彼らが今この瞬間に世界の反対側で暮らしているのが目に浮かぶようになった。

ルワンダで出会った友達、見たもの感じたものを忘れずにしたいと思う。そして両国の学生が「繋がっている」活動を今後も続けていきたい。

池上 純平

早稲田大学大学院政治学研究科修士 1 年

私はルワンダについて雄弁に語れるほど、ルワンダのことをよく知らない。そして、学生会議に参加したのも今年の 4 月からである。この団体に根付いている理念や歴史などを理解するには不十分な時間だった。だから、この感想はあくまで団体の視線と一致しないところもあることを理解して読んでほしい。

「喜怒哀楽」という表現で感情を表すなら、このルワンダでの 12 日間ですべてが全力で稼働していたし、もはやこの枠では区分できない程に心が動かされた日々だったように思う。そして、私にとってこうなることは意外だったのだが、多くの時間が「喜」と「楽」で埋め尽くされた。なぜならば、ルワンダ人の優しさを様々な側面で感じ取れたからである。彼らはその文化故にあらゆることに大胆で細かいことは気にしない側面があると同時に、人やその感情に対して驚くほど繊細で、気を遣い、相手を思いやる。ブタレで朝食をとっていたある朝、店員である少女のあまりの心遣いに、少し申し訳なく感じてしまうことすらあった。そんな心を持つ彼らと一緒にいることで温かい気持ちになることが多かった。そして彼らの屈託のない笑顔はほんとに美しい。

眩しいほどの日差しと心地よい気候、そして彼らがいれば毎日笑顔でいられた。

ルワンダの子供にしてもそうである。小学校でソーラン節を披露した際、踊りだすや否や皆大笑いしだした。「よほど奇妙な動きに見えるのだろう」と思い踊っていたが、最後に子供たちと一緒に踊った時にそれは勘違いであると気付いた。彼らは決して可笑しさの笑いをこちらに向けていたのではなく、単純に目の前で繰り広げられる踊りに喜び、興奮していたのであって、笑うことはその直接的な表現であったのだ。その気持ちを受けて、こちらにも喜びが生じないわけがない。言葉が通じないせいもあってか、そんな素直な彼らを愛おしく感じたし、この子たちがルワンダの将来を担っていくならこの国は心配ないんじゃないかとすら思えた。

そもそも、私が学生会議に参加させてもらったのは、「人」のことをよく知りたいという想いからだった。確かに個人でルワンダへ行っても様々なことを吸収することはできるだろう。でも、学生という立場で彼らが何を感じ、考えているのかよく知りたかったのである。

学生との交流はその一瞬一瞬が脳裏に焼き付いているし、彼らの姿勢や言葉も含め、「考えさせられる」出来事など言い始めたらもはや限がない。その中で、私の周りに流れる時が止まったかのように感じた瞬間があった。ギコンゴロのメモリアルでのことである。

ここまで、あえてジェノサイドという言葉を使うのを避けてきた。それは、ルワンダはまずジェノサイドありきの国ではないと伝えたかったからだ。しかしながら、現在のルワンダをルワンダたらしめているものはジェノサイドという歴史であることはやはり否定できない。

報告書にも詳細があるが、ギコンゴロは最もジェノサイドを「感覚的」に感じる場所であった。そして、そこにルワンダメンバーと同行できたことは非常に価値があった。楽しい瞬間を過ごすのは簡単だが、彼らが過去とどう向き合っているかを言葉以外で知るにはいい機会だったからだ。彼らの心の中にどういった感情が交錯しているのか、同じ空間を共有しなければ分からないこともあるだろう。

メモリアルにおいて、多数の死体が置いてある部屋を順番に見ている途中、1つの部屋から渡り廊下に出た瞬間、少し離れた所からこちらを見る視線に気付いた。それは、それまでの学生会議でも積極的に話したことのないメンバーのものだった。そして彼の視線を受け入れた時、私はその場で足を止めてしまった。「お前は今、俺たちのことをどうみているんだ？」2 つの目がそう言っていた。何かを訴えかけるでもなく、憐みの目でもない。ただ、静かにそう言っているように見えた。もしかしたら私の先入観がそう思わせただけなのかもしれない。ただ、この瞬間だけは、彼がそう言っていることに間違いはないという確信があった。彼らにとって、ジェノサイドは直接的に責任を負うものではない。家族を殺された被害者もいる。ただし、もっと広い視点で見たとき、不幸にもジェノサイドの当事者は「ルワンダ人」であり、その結果である死体を見ている我々は「日本人」である。そこを問われているのだと思った。「俺たち『ルワンダ人』のことをどう見ているんだ」と。私はルワンダ渡航に関して、向こうのことを知りたいという気持ちが強かった。

だから、1 年に 1 度やってくる、平和な国から来た日本人が「自分たちをどう見るのか」というルワンダ人の興味・関心にはさほど注意を払っていなかった。だからこそ、その視線にどう応えていいか分からなかった。ただ無垢に悲しむことが、彼らの目にどう映っていたのか。被害者であり加害者でもある「ルワンダ人」の目に。その答えを出せなかった私は、しばらくして彼が苦笑いを作りながら「次へ行こう」というジェスチャーをして立ち去るまで、視線を外すこともできず、ただその場に立っていた。

あえて反論の余地があることを承知で書きたい。おそらくジェノサイドという事実は私達の正義感に訴えかけるだろうし、和解のプロセスを見れば誰でもその複雑さ・困難さを実感し、日本に持ち帰るだろう。「ルワンダという国が抱える問題はこんなにあるのだ」と。だが、それが一体彼らのために、何になるというのだろう？この事実に直面して、悲しむ以外に、報告書に感情的な感想を書く以外に、一体何ができるのか？

この答えを見つけることが彼らの気持ちに応える方法なのだろう。これは決して周囲に対する否定ではなく、自分自身に対する問題提起でもある。

ルワンダというと、やはり「ジェノサイド」や「平和構築」などという言葉が伴う。これは私に限らずのことではあるが、ルワンダへ行くというと、「危険じゃないのか」、「もう平和なのか」などと聞かれる。では聞きたい。「平和」とはどんな状態なのか？ジェノサイドが起きた国は平和ではないのか？戦争がなければ平和なのか？私は学者ではないし理想論者ではないから、そんなことを聞かれたら「知らない」と答える。

ただ、私が思う「平和」とは本来「心を穏やかに、和ませること」であると思う。その観点から言えば、私が接したルワンダ人はみな「平和な心」を持っていた。彼らはちゃんと自分達の歴史を理解し、受け入れ、そして将来へ視線を向けていた。それは彼らの心の底に根付いていて、切り離せないものだろう。社会が人間の集まりで構成されている限り、彼らのような心を持った人間が創る社会なら、明るい希望に溢れていると思えた。

さて、少し小難しい感想になってしまったのだが、私がこの 12 日間どう過ごしていたかというと、様々なことを共有してくれるルワンダ人と、理解ある日本人メンバーのおかげで、毎日幸せといえる時間の中にいた。何にも代えがたい時間である。最終日、空港に見送りに来てくれたエフレムやモーリスを前に、目頭が熱くなるのを感じていたが、必死で堪えていた。わずか 12 日間でそんなに感情的になっている自分に驚いた。それほど想いが積み重なっていたのだろう。「喜」「楽」「踊」「歌」「幸」・・・これ以上にあの日々を表現してくれる文字を開発したいくらいである。

最後に、ルワンダ渡航に参加させてくれた JRYC 日本メンバー、現地で素晴らしい時間を共有してくれた JRYC ルワンダメンバー、そして様々な経験をさせてくださった日本大使館の方々、三戸さん夫妻、佐々

木さんに感謝申し上げたい。そして、ルワンダ人の素晴らしさとその奥深い魅力を私に教えてくれたヒーローである宗像氏にも。

井上 真希

早稲田大学社会科学部 2 年

・「相互理解」とは？

「相互理解」とは一体何なのか？私たちは「相互理解」を通して、何を実現させたいのか？

初めてのルワンダ渡航において、私はこの日本ルワンダ学生会議(JRYC)が掲げる団体理念について、何度も何度もあらゆる場面で考えさせられた。

私は 2009 年 12 月の第三回学生会議に参加し、そのとき初めてルワンダ人の学生と交流した。去年の私は JRYC が何故わざわざ「相互理解」を団体理念として掲げるのかが理解できなかった。約 2 週間の交流を経て、私は確かにルワンダ人の学生たちと友人関係は持てたと思う。しかし、あの時点では私と 5 人の学生の間には「相互理解」はなかった。

今回、初めてのルワンダへの渡航を通して、多角的な視点から自分なりに「相互理解」について考えてみた。ここでは、まず私がルワンダで体験したことの中で、特に印象に残ったことをいくつか挙げる。そして、最終的にそれらの体験から私が現時点でどのように「相互理解」について考えているのか述べたいと思う。

・ルワンダの発展と政治

私たちがルワンダに到着したのは夜だった。宿泊先の St.Paul 教会まで行くミニワゴンの窓の両脇からは、真っ暗な中に丘に立ちそびえる家々の明かりが無数にぽつぽつ見えた。それは、まるで満天の星空のようでとてもきれいで、同時に一つ一つの光がキガリの発展のしるしのように感じられた。

翌日、胸をわくわくさせながらキガリの街に繰り出した。今までにメディアの報道や先輩からの話の通り、キガリはまさに発展の真っ最中であった。というのも、キガリの街には多くの建設途中の建造物があったり、舗装工事中の道路があったりと、とても早いペースで街の整備が行われていた。また、キガリの中心地は非常に人が混み合っており、車もせわしなく通り過ぎる。確かに目覚しい発展を遂げるルワンダの一面がそこにはあった。

ホームステイの項目でも言及したが、キガリに住む Ephraim はこの街の変化を目の当たりにしてきたゆえ、現政権に多大な信頼と期待を抱いているようであり、「カガメ政権に 90~100%満足」と言っていた。

日本で暮らしていると、直接的に政府から恩恵を受けることなどほとんど感じたことがないが、一方、ルワンダでは国民、特にキガリに住む人々にとって今の政権の政策によってどんどん自分たちの住む環境が改善し、国がますます発展するのを日々実感することができる。だからこそ、政治への関心は老若男女問わず高いのだろう。実際に今年の 8 月に行われた大統領選挙の投票率約 95%だったと公表されている。

大統領選ではカガメ大統領が約 93%を獲得し勝利したが、海外メディアや人権活動団体からは、政府反対勢力への弾圧や言論の自由の欠如などを自由に批判されていた。選挙前も 1 ヶ月に一度くらいの頻度でキガリ市内において爆破事件が起きていた。実際に私たちが市街を歩いていたとき、Calliope から「ここのバス停はこの前の選挙シーズンのときに爆破があったところさ。」と教えられ、その報道の現実味を感じた。

海外メディア等では「カガメ政権は独裁」と酷評されることもある批判的な意見について Calliope に意見を聞いてみた。すると、「ルワンダはまだ欧米流の民主主義を実行できるほど成熟した社会ではない。だから、現時点ではカガメ大統領のような強いリーダーシップが必要だし、国際社会はルワンダ流の民主主義を認めるべきだ。」という意見していた。この

Calliope の意見は、カガメ大統領以外にルワンダ国民を統一し発展へ押し進められるリーダーはいないゆえ、ある程度の強引さからもたらされる不平等は認めるべき、と私には捉えられた。

一方、ジャーナリスト志望で NUR のラジオ局、Radio Salus で活動する大学生、Pio は同じ質問に対して「選挙自体は民主的に行われたが、選挙前のカガメ大統領の反対勢力に対する一連の対応は納得がいかない。ジャーナリストとして、本当ならば言いたいことも、言ったら殺されるかもしれないから怖くていえない。」と答えてくれた。また、一般のルワンダ国民の政治を見る目に関して、「彼らは、自分達に見える事実のみに拍手するだけで、隠された真実について分析しようとはしない。ここで政治について語るときは、常にポジティブでなくてはならない。」と言った。このように Pio が指摘することは客観的であり現状をよく捉えているように思えた。

どちらの価値観も一理あるが、ここで重要なのは、Calliope や Pio のように現在の政治状況について独自の見解を持つことができるのは、大学でトップレベルの教育を受けることができ、インターネット等を通して幅広い情報を得ることのできる一部のエリートだけだということだ。Pio の指摘のように、一般のルワンダ人の多くは現政権に関する不利なことはメディア統制で知る由なく、単純に良い面だけを評価して投票に赴いたのだろう。選挙システムは確かに民主的だが、メディア統制や政府の情報の不透明性によるルワンダの社会は民主的とは思えない。しかし、Calliope の指摘するように、ルワンダを欧米スタンダードの民主主義にするには早く、ある程度の規制があったほうが社会を統制するために都合が良いのだろうか？

私自身、勉強不足でルワンダと民主主義に関する自分なりの観点はまだまとまっていないが、疑問に思っていたことに対して生の意見を聞くことができたのは非常に意味のあることだと思った。そして、ルワンダ人を理解するにはこの複雑な社会構造を理解しなければいけない必要性も実感することができた。

・虐殺の影響

ルワンダを理解するにはやはり虐殺の歴史を深く知らなければならない。ムランビ虐殺記念館で私が感じたことは既にその項で言及したが、改めて強調させてほしい。

私は一人ひとりの遺体を前にして、本当の意味で追悼や平和の意味について考えさせられた。一緒に記念館を回ってくれた NUR の学生もこの地でもしかしたらこうなっていたかもしれない、私と出会うことはなかったかもしれない…と思うとどうしようい悲しみを感じた。そして、机に並ぶ干からびた遺体と彼らの今の元気な姿と重ね合わせると、この虐殺

という歴史的事実のリアリティが増した。そして、16 年前に家族と平凡な毎日を送っていた自分自身と、一方で家族を殺され小さい身にも関わらず苦境を強いられた彼らとの相違に罪悪感のようなものすら感じた。

ギコンゴロで実際に家族の多くを失ってしまったある学生は今でも当時の出来事を思い出すとあまりの悲惨さに気絶してしまうそうだ。まだ小さかった彼はそのとき全てを失った。彼にとって神だけが唯一の救いだった。

彼のように虐殺の体験によって深い傷を負った人々はまだ大勢いるだろう。宗教はそういった人々にとって心の救いとなっているのも事実であるが、それだけではないだろう。

虐殺という負の歴史からルワンダの人々を救済へ導き、和解と連帯へ押し進める要素とは何だろうか。

今回、ピースコンサートにてその答えの一つを改めて知った。それは、伝統文化がルワンダの人々にもたらす力である。

・伝統文化の力

ピースコンサートは長時間だったのにも関わらず、大勢の観客が始めから最後までずっと楽しんでいた。中でも、INDANGAMUCO をはじめとする伝統的なダンスと歌はとても盛り上がった。ステージ最前列にいたおじさんなどは、あまりに興奮しすぎてステージ付近で勝手に踊りだして警備員に止められたほどである。（笑）そのくらいルワンダの人々は伝統的な芸能を今でも心から楽しんでいるようだった。

キヨンベ村やトゥワの村にいったときもそれぞれが独自の伝統舞踊と歌を誇らしげに披露してくれた。

ルワンダの人々にとって、そういった伝統文化は民族的概念や虐殺の歴史を忘れさせ、和解や連帯を押し進める原動力になっているに違いないと感じた。

・Take Action

キヨンベ村とトゥワの村での Calliope のスピーチは非常に印象に残った。キヨンベ村では、「貧困問題に立ち向かい、村の発展を支える活動を行う青年たちを見習って私たち JRYC メンバーも何か行動を起こすべき」と主張し、トゥワの村では「私たちはメッセンジャーであり、今すぐには（トゥワの人々の）問題を解決できないが、将来的には力になりたい」と JRYC に新たな提案をした。

これらの提案に私はかなり考えさせられた。キヨンベ村は招待されたので許されると思うが、トゥワの村では村民の生活地帯に踏み込んで行き情報収集として一方的に利益を得たような気がした。

Calliope は JRYC メンバーが将来的に彼らの問題を解決し、生活状況を改善できると伝えたが、実際そのような確証は私たちにない。それならば、ただひたすら恵まれない生活環境を話してくれたトゥワの人々に対して非常に理不尽なことをしてしまった。私たちとトゥワの人々との間にその点においての「相互理解」が欠けていたと、私は思う。しかし、彼らに対して安易に支援活動などはしたくないと思った。

Calliope の言うように、私も"Take Action"したい気持ちは十分にある。だが、それは私たちがルワンダ人の学生との交流やルワンダへの渡航を重ねて、もっとルワンダの社会について理解し、キヨンベやトゥワの人々との「相互理解」を築くことができてからでないといけないと思う。そして、今の私たちが彼らのためにできることとは、私たちが見て聞いて感じたことを JRYC メンバーの間で継続的に話し合っていくことだと思った。

・最後に

今回の渡航を通して、虐殺の歴史を乗り越え発展へと日々進歩するルワンダと共に、未だに消えぬ虐殺の被害の跡や都市部との格差の現状が明らかになった。しかし同時に和解や連帯を押し進める伝統文化の力や国の発展のために精力的に活動する若者の力も知ることができた。そして、私たちも JRYC のメンバーとして、その原動力の一つでありたいと感じた。

この第四回学生会議では、全体を通してルワンダ側 JRYC メンバーと共に行動し、共に考え、共に議論し合うことができた。学生会議では日本とルワンダを歴史的、社会的、ときには主観的な視点から考察し、お互いの国に対しての理解を促進することができた。各訪問地では一緒にいてくれたからこそ明らかになったことが多くあったし、ピースコンサートも彼らと共に創り上げたからこそ素晴らしいものになった。

私が考える「相互理解」とは、お互いの歴史的、社会的バックグラウンドをよく認識した上で対等に意見を出し合い、尊重できるような関係である。そして、JRYC がこの関係を築く対象はまず NUR の学生であるべきだが、今回キヨンベ村やトゥワの村などで、多くのルワンダの人々に出会い、彼らとの間にも相互理解も私たちは目指すべきなのではないか、と実感した。

そして、私は JRYC メンバーとして彼らとの「相互理解」を実現・継続することによって、ルワンダのより良い未来を共に築くアクターでありたいと思った。

最後になったが、ルワンダでの旅の中で共に協力し合った 5 人の日本人メンバーやルワンダ人メンバー、そして支えてくれた私の家族にはとても感謝している。

MURAKOZE CYANE! ☺

宮本 寛紀

横浜市立大学国際総合科学部 2 年

「なんでルワンダなの？」
「何しに行くの？」
ルワンダに渡航すると決めてから、私の周りの人々は、声を揃えて同じような質問をしてきた。そして、それらの質問に対し、私も自分なりに答えは持ち合わせていた。しかしながら、そのようなやり取りを繰り返しているうちに、なぜだか自分自身の中でも疑問が湧いてきていたのも確かである。

とても安いとはいえない旅費、夏休みの 2 週間（準備期間を含めれば、3 ヵ月以上）という時間を費やしてまで、行きたかった理由はなんなのであろうか？

もちろん、行きたいと思う理由はいくつかあった。94 年のジェノサイドを乗り越え、様々な面において発展してきたと注目を浴びる「ルワンダ」という国を自分の目で確かめたかったし、JRYC のルワンダ人メンバーとたくさんディスカッションをしたり、伝統ダンスも生で見たかった。とはいえ、これらの理由は、周りの人々からの質問に答えるために、自分で“用意した答え”のような気がしてならなかった。もっと深く自分に問いかけ、本当に行きたい理由があるのか、それは一体何なのか、分からないまま出発の日を迎えていた。

今思えば、それほど深く考える必要は無かったと思う。行きたいから行く、今が行ける時だから行く。ただ、それだけのことであったように思える。もちろん、目的や目標を持ち、団体としての活動にも積極的に参加することが念頭にはあるが、それだけでは続かなかった気がする。単純にルワンダという国そのものが好きなのだと再認識した。

報告書の様々な欄に、感想を書いているため、ここでは、全体を通して感じたことを書きたいと思う。

まず、感じたこと（考えたこと）は、“対等な立場”ということについて。この団体の理念にもある対等な立場とはどういうものなのか、それは可能なのかということをとても考えさせられた。トゥワの村やキヨンベ村を訪問した時が特に印象深い。私たち日本人は、現地の人々にとって、どう見られ、どう思われているのだろうか。アポイントメントを取ってからの訪問とはいえ、ある日突然、カメラをぶら下げた外国人が訪れ、話を一方的に聞いたり、写真やビデオを撮って、帰っていく。失礼にあたらないよう配慮はしていたが、どこか自分の中で腑に落ちないことがしばしばあった。よく思われたいとかそういうのでは無く、ただ単に、一個人としてそのような行動はどう思われているのかが気になったのである。しかしながら、それを言い始めてしまうと、何も出来なくなってしまうというジレンマも同時に感じた。やはり、どこかに訪問するときは、目的をしっかり持ち、私たちにとっても、訪問先にとっても、メリットのあるように心がけないといけないと思う。これは、来年度以降の渡航にぜひとも活かしていただきたい。

学生会議における“対等な立場”については、しっかりと確立できていたと自信を持って言える。日本の学生とルワンダの学生が、一つのテーマに関して、お互いの意見を交わし合う。時には批判的になり、時には感心するという､ディスカッションの理想のカタチになっていたと感じた。

次に、ギコンゴロの MURAMBI 虐殺記念館での光景は、今でも目に焼き付いている。これからも、忘れることは無いであろう。無数に置かれたミイラ化した遺体は、当時の悲痛な叫びが伝わってくるかのような表情を残したままであった。一緒にいたルワンダ学生メンバーの中にも、実際にその場所に身内の遺体があると言っていた。その記念館に着くまでの車内では楽しそうに歌を歌い、にぎやかに話をしていたメンバーたちから笑顔は消え、言葉を無くしてしまっていた。遺体の置かれた部屋はいくつもあり、正直、すべてを見て回るのは辛かったが、何のために来たのか自分に問いかけ、ジェノサイドの悲惨さをしっかりと目に焼き付け、世界中のどこにおいても、二度とこのような過ちが起こることのないよう強く祈った。そして、今の私に出来ることを考えたときに、ここで見たこと、感じたことを出来るだけ多くの人に知らせることではないかと思う。そのための手段の一つとして、この報告書を書いている。

最後に、ルワンダの伝統ダンスについて書きたいと思う。私は去年(2009 年)の年末に、第 3 回本会議の一環として東京で開催したコンサートに、スタッフとして参加し、初めてルワンダの伝統ダンスを目にしたのだが、その頃から、常々抱いていた現地で本場のダンスを見るという念願が叶った。ルワンダ国内においても有名な INDAMGAMUCO によるダンスパフォーマンスは、見るものを圧倒し、心から感動した。コンサートの終盤には、私たちもルワンダの伝統衣装を身にまとい、一緒に踊らせてもらったわけだが、その時の一体感は言葉では言い表せないほどのものであった。音楽の持つ力は、計り知れないと痛感させてくれた瞬間でもあった。

日本では、アフリカと聞くと､「貧困」「飢餓」「紛争」「HIV/エイズ」など、どうしてもマイナスなワードが連想されがちである。たしかに、それらの諸問題は現実として起きており、今でも苦しんでいる人々はたくさんいる。しかし、ルワンダというアフリカの一国を訪れ感じたことは、アフリカには、もっとプラスの面がたくさんあるということ。それを、多くの人々に知らせたいし、知らなければならないと思う。“アフリカ”と簡単に一言では言えないほど、多種多様な国家が存在しているが､少なくとも､ルワンダについてのプラスな要素はたくさん発見できた､とても貴重な経験になった。

これから先も、この団体として、一個人として、ルワンダに関わっていきたいと、そのように思う。

岩井 天音

国際基督教大学教養学部 2 年

渡航前、ルワンダが良い意味でも悪い意味でも「身近」になりすぎて、自分の中にある二つのルワンダのイメージがかけ離れていることに度々もどかしさを感じていた。

私がルワンダに行きたいと願ったのは、やはり 100 日間で 100 万人が殺されるというジェノサイドが起こった国を自分の目で見てみたい気持ちがあったからだ。私のルワンダの最初のイメージは「信じがたい虐殺が起こった国」だった。もっとも、ほとんどの人がこれにあてはまると思う。

しかし実際にこの団体で活動する中で、自分が持っていたルワンダのイメージを段々と忘れていった。例えば渡航経験者と話をした時「ルワンダは平和だよ」という言葉を何度も聞いた。自分自身も対外的にルワンダのこと説明する機会があると、実際に行った経験もないのに「虐殺から 16 年経った今は平和で、」と語ることがあった。ルワンダは「復興も進んでいて平和で治安の良い国」、これがこの数カ月でルワンダに対して得た新たなイメージだった。

もちろん当初抱いていたステレオタイプなイメージからの脱却は好ましいことである。しかしこの二つのイメージがかけ離れすぎていて、私はいまひとつルワンダがどういう国なのか分からなくなってしまった。「ジェノサイド」と「平和な現在」――その間を埋めるミッシングリンクは何か？これが分からないことがもどかしさの原因であったと思う。

そしてその答えに近づく大きなカギとなったのが、ルワンダ人学生と共に訪れたギコンゴロの虐殺メモリアルであった。

ルワンダに滞在して一週間あまり、もちろん自分が充分にアンテナを張っていなかったせいでもある訳だが、ジェノサイドの面影はさほど感じられなかった。「ルワンダは平和だよ」という感想を自分のものとして獲得しつつあった。

しかしついに私の中でジェノサイドの事実と向き合い、今の状態が「ジェノサイドを乗り越えていく中で築きつつある平和」であるということを実感できる日がやってきた。

大学のあるブタレでの楽しい 5 日間の後、私たちは首都キガリに戻る前にギコンゴロの虐殺メモリアルを訪れた。おびただしい数の遺体が並んでいるこのメモリアルで、私は虐殺の奪った命の重さをはっきりと感じた。そして涙が止まらない私の横でルワンダ人メンバーは”Amane, be STRONG”と言ったのだ。聞いた当時は何故ルワンダ人がこう言えるのか分からず、「強く」あることは一体どういうことなのか、だいぶ考えた。今でも完全に理解しているとは思えない。しかし「強さ」こそ「ジェノサイド」と「平和な現在」を結ぶ言葉なのではないか、と考えている。

ルワンダ人が「加害者を赦す」とか「虐殺のことを思い出すのは辛いけれど、今は理解して受け入れている」などと発言して

いるのを見聞きすると、それは無理やり自分の感情を押し込めて納得させているだけなのではないか、と思っていた。しかしギコンゴロで”Be Strong.”と言った彼らを見て、その考えは変わった。「強さ」とは、「前を見てしっかりと歩み続けること」なのだ。だからあの”Be Strong”には、日本人にもこのメモリアルに広がる光景を目を反らさずに見てほしい、そしてそれを伝えてほしい、という想いが込められていたのではないだろうか。

その点でとても印象的だったことがある。訪問が一段落した後、ルワンダ人メンバーが私の持っていたビデオカメラとボイスレコーダーを貸してほしいと真剣にお願いしてきたのだ。いつもの「代わりに撮るよ、カメラ貸して」と笑顔で話しかけてくれる時の眼差しとは違うことがはっきりと分かった。何をするのだろうと不思議に思っていると、ルワンダ人メンバーは日本人にカメラを向けインタビューをし始めた。「虐殺メモリアルを見てどう思ったか？」とだけシンプルに質問し、カメラとレコーダーを片手に日本人の横に寄り添うように座った彼らは、率直な感想を聞きだそうとしていた。私はいつも「撮る側」だったので、彼らの行動にとても驚いた。どう感じたかをシェアしたい、この虐殺の事実をもっとたくさんの人に広めてほしい、そんな想いが伝わってきた。

さて、私たちは「相互理解」を掲げて活動している訳だが、私は今年度の本会議は大変充実したものであったと感じる。何故ならルワンダ人学生と共に過ごす時間が予想以上に多かったからだ。各訪問先に同行してくれて解説してくれたことにはとても感謝しているし、長時間のバス移動中の何気ない会話はルワンダへの理解、そしてメンバー個人への理解を深めるのに貴重な時間であった。各訪問先も印象的だったが、私はやはり団体名にも入っている「学生会議」が一番好きだった。

従来トピックとして挙がることも多かった「経済政策」や「政治問題」などは基礎知識がないとディスカッションも盛り上がらない。しかし今年は「日本の歴史」や「日本の産業」など基本的且つ多くのルワンダ人が興味を持っているトピックを選んだ。確かに専門性はないかもしれないが、日本人とルワンダ人の考え方や着目するポイントが大きく違って興味深い比較ができた。

日本から遠いアフリカで、しかもルワンダというマイナーな国で、日本人とルワンダ人の大学生が顔を突き合わせてディスカッションする。10 年前だったら考えられなかったことかもしれない。私にとってただ単純にそれはとてもエキサイティングなことであった。「学生会議」はこれからも活動の核として更なる発展を出来るよう努力していきたい。

“Be strong.”と声をかけてくれたルワンダ人学生たちのことを私は一生忘れないだろうし、これから先も更に関係を深めたいと考えている。「相互理解」という理念は難しく、時に私を悩ませる。しかし実際に渡航を経験した今、ルワンダとそこに住む彼らのことをこんなにも素直に「身近」に感じられる。私はそのことがとても嬉しい。そしてこれからの活動のモチベーションになると信じている。

【付録】

会計報告 ……178
メディア掲載 ……181
写真館（人物） ……184
写真館（風景） ……185
おわりに ……186

第４回本会議 会計報告

会計　宮本 寛紀
表作成　古屋 亮輔

渡航前						単位：円
日付	使途	収入		支出		残高
	集金	1,000 ×6 人	6,000		0	6,000
	保健関連				3,128	2,872
	お土産				1,000	1,872
	お土産				1,000	872
	お土産				1,000	-128
	ビデオカメラ				47,600	団体口座から
	ビデオテープ				3,160	団体口座から
	法被				19,984	団体口座から
	ハードディスク				10,450	団体口座から
	ボイスレコーダー				10,150	団体口座から

渡航中・日程毎						単位：Rwf （ルワンダフラン）
日付	使途	収入		支出		残高
8/22	集金	30,000 ×6 人	180,000			180,000
	タクシー (空港→ホテル)				10,000	170,000
8/23	携帯電話チャージ				4,000	166,000
	昼食			1,500 ×6 人	9,000	157,000
	虐殺記念館の音声解説			2,500 ×6 人	15,000	142,000
	タクシー			150×6 人	900	141,100
8/24	ホテル (キガリ・St. Paul)			8,000 ×3 部屋	24,000	117,100
	昼食				2,000	115,100
8/25	ネームカード				2,000	113,100

	タクシー (2 日間貸切)				90,000	**23,100**
	寄付 (トゥワ族の村)				30,000	**-6,900**
	ホテル (ブタレ・Barthos)			5,000 ×6 人	30,000	**-36,900**
	夕食				7,500	**-44,400**
	集金	50,000 ×6 人	300,000			**255,600**
8/26	ホテル (ブタレ・Barthos)			5,000 ×6 人	30,000	**225,600**
	昼食				3,400	**222,200**
	ジュース				4,200	**218,000**
	夕食				5,000	**213,000**
8/27	ホテル (ブタレ・Barthos)			5,000 ×6 人 ×2 泊	60,000	**153,000**
	夕食				7,600	**145,400**
8/28	マーカー				3,000	**142,400**
8/29	ホテル				30,000	**112,400**
	タクシー			2,000 ×往復	4,000	**108,400**
	軽食				1,800	**106,600**
	ミュージアム 入場料				7,200	**99,400**
	夕食				8,000	**91,400**
8/30	バス				20,000	**71,400**
	ホテル (キガリ・St. Paul)				24,000	**47,400**
8/31	タクシー (追加修理費用)				25,000	**22,400**
	夕食				21,200	**1,200**
9/1	**集金**	8,000 ×4 人	32,000			**33,200**
	タクシー				4,000	**29,200**
	携帯電話チャージ				1,000	**28,200**

	昼食				7,500	**20,700**
9/2	タクシー				5,000	**15,700**

※共有財布以外からの全体の出費	備考
①8 月 22 日ホテル代(**24,000**)	
②8 月 31 日のタクシー代(**45 ドル**)	
③ルワンダ学生に謝礼金(**100 ドル**)	
④8 月 31 日と 9 月 1 日のホテル代 4 人分(**55 ドル**)	※井上・宮本は 9 月 1 日に帰国

渡航前

小計　　97,472 円

渡航中　共有財布より　496,300Rwf

共有財布以外　24,000Rwf＋200 ドル

小計　　92,599 円

支出計　207,071 円

※1 ドル＝85 円、585Rwf で計算
※団体共同の支出のみ（航空券などはメンバーの個人負担）

メディア掲載

写真 1，2 枚目：ルワンダ最大のニュースサイト、「IGIHE」および「ORINFOR」に日本ルワンダ学生会議の活動紹介、モーリス・古屋のインタビューなどの記事が掲載されました。（2010 年 8 月 26 日 ルワンダ語のみ、NTIVUGURUZWA Emmanuel）

IGIHE：http://www.igihe.com/news-7-26-6886.html
ORINFOR：http://www.orinfor.gov.rw/printmedia/news.php?type=rw&volumeid=81&cat=16&storyid=2472

写真 3 枚目：ルワンダ国内で発行される唯一の英字日刊紙、『THE NEW TIMES』（ウェブ版：http://www.newtimes.co.rw/）にピースコンサートの様子が掲載されました。（2010 年 8 月 31 日、Donat NZIGIYIMANA）

IGIHE.com| Ku cyumweru , Tariki ya 10 Ukwakira 2010

SHAKISHA

IGIHE

Ba Free! Hamagara wishyure iminota 3 ibanza, Isigaye yose ni ubuntu! Hamagara KU BUNTU! tigo

Ahabanza | Amakuru | Abo turibo | Amamaza | Twandikire | Umuryango | Iyandikishe | Log in | Mail

Ibirimo

- Ikoranabuhanga
- Ubukerarugendo
- Abantu
- Imyidagaduro
- Ubukungu
- Politiki
- Amakuru
- Ubuzima
- Umuco
- Diaspora
- Iyobokamana
- Igihe.com
- Inkuru zanyu
- Imikino

MTN Ads

BEBEZA BIG SAVINGS!

Amakuru atandukanye | Hirya no hino | Utuntu n'utundi | Uyu munsi mu mateka

NUR: Muri Kaminuza Nkuru y'u Rwanda harabera Inama ya 4 y'Abanyeshuri ba Kaminuza bo mu Rwanda na Japan

posted on Aug , 26 2010 at 19H 36min 35 sec ***viewed 1303 times***

Online language lessons
Best language learning solution on the web. Take a trial lesson!
www.myngle.com
Ads by Google

Kuri uyu wa kane, tariki ya 26 Kanama , muri Kaminuza Nkuru y'u Rwanda iri i Butare mu Karere ka Huye hatangiye inama y'Urubyiruko rw'Abanyeshuri baturuka muri Kaminuza Nkuru y'u Rwanda (NUR) ndetse no muri za Kaminuza zo mu Buyapani (Japan) nka WASEDA University, YOKOHAMA University na International Christian University. Intego y'iyo nama ngarukamwaka ikaba ari uguhuriza hamwe ibitekerezo by'urubyiruko rwo muri ibyo bihugu byombi ku byerekeye imyigire n'umuco binyuze mu gukorana inama, ibitaramo n'amhugurwa.

Iyi nama ihuriyemo abanyeshuri 60 bo muri Kaminuza Nkuru y'u Rwanda n'abanyeshuri 8 baturutse muri Kaminuza eshatu zo mu Buyapani (Japan), bakaba barageze mu Rwanda ku cyumweru, tariki ya 22 Kanama. Bamaze kwakirwa na bagenzi babo b'Abanyarwanda basuye urubyiruko rwo mu Murenge wa Kiyombe wo mu Karere ka Nyagatare ndetse n'Ishuri ribanza ryitwa "Itwari Primary School riri mu Murenge wa Kabarondo, Akarere ka Kayonza; hose ni mu Ntara y'Iburasirazuba. Banasuye kandi Umudugudu w'abasigajwe inyuma n'amateka (Site ya Nonko), iri mu Murenge wa Kanombe mu Karere ka Kicukiro, mu Mujyi wa Kigali.

ORINFOR

Rwanda Bureau of Information and Broadcasting

English | Français | Twandikire | Abakozi | Gukurura

Murugo | Tumenye | Finance | Ubucuruzi | Mu karere | Imvaho Nshya | La Nouvelle Releve | Radiyo Rwanda | Rwanda TV | Akazi

Vol No: 2023 [02 Sep - 05 Sep 2010] Archives

Amakuru | Imikino | Imyidagaduro | Iryibanze | Mu ntara | Ubukungu | Ubumenyi | Ubuzima

HUYE: INAMA YA 4 Y'ABANYESHURI BA UNR N'UBUYAPANI

NTIVUGURUZWA EMMANUEL

Ku tariki ya 26 Kanama 2010, muri Kaminuza Nkuru y'u Rwanda iri i Butare mu Karere ka Huye hatangiye inama y'urubyiruko rw'abanyeshuri baturuka muri Kaminuza Nkuru y'u Rwanda (NUR) ndetse no muri za Kaminuza zo mu Buyapani (Japan) nka Waseda University, Yokohama University na International Christian University. Intego y'iyo nama ngarukamwaka ikaba ari uguhuriza hamwe ibitekerezo by'urubyiruko rwo muri ibyo bihugu byombi ku byerekeye imyigire n'umuco binyuze mu gukorana inama, ibitaramo n'amahugurwa.

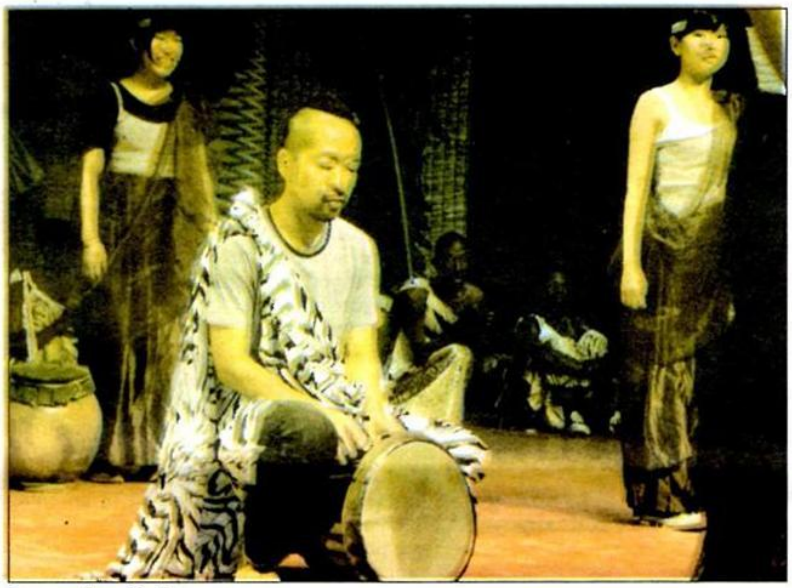
Iyi nama ihuriyemo abanyeshuri 60 bo muri Kaminuza Nkuru y'u Rwanda n'abanyeshuri 8

IBINDI

- Paruwasi ya Janja yizihije yubile y'imyaka 75
- Kamegeri: Abazahabwa inkunga y'ingoboka baramenyekanye
- Kayonza: Parike Akagera yibasiwe n'ikongi y'umuriro
- Kiyombe basuwe n'Abayapani
- Kirehe: Kwishyura ifumbire mbere ntibizagabanya umusaruro
- Ngoma: Gutanga ubupasitori byasabye inama y'umutekano
- Ngoma: Atuye mu nzu ya shitingi mu mujyi
- Zaza: Ababana n'agakoko ka SIDA batwita bashaka abana
- Kanyangese: Umugabo Rwibasira yatemye umugore we

Leisure

Japan-Rwanda cultural show pulls crowds in Huye



Japan cultural ballet on stage.

By Donat Nzigiyimana

A group of Japan and Rwandan cultural artists eager to promote traditional culture, last weekend, entertained residents of Huye district.

The event organized under the theme "Inkera y' Umuganura" attracted students from Rwandan universities and the University of Waseda, Japan, involving drama and traditional dance.

While opening the ceremony, Aimable Nsengiyumva, the organiser and chairperson of National University of Rwanda's cultural ballet 'Indangamuco', told participants that the event was meant to restore and preserve traditional culture.

He explained that 'Inkera y'Umuganura' was a time for the king and his people to celebrate the New Year's harvest. It was an occasion to recount their bravery and other praiseworthy achievements to the king.

Nsengiyumva said that there is need to restore the culture where Rwandans can gather to celebrate farming harvest and other economic achievements while planning for the future.

"The Indangamuco overriding mission remains to extend culture restoration to all Rwandans," he said.

Atsushi Munakata, a Japanese participant, commended his fellow participants especially university students' efforts to conserve culture.

He disclosed that Japan has had a cultural partnership with Indangamuco troop for a couple of years. He also recommended the conservation of culture through education.

"Any society is identified by its culture. Therefore, the government should set out measures to educate young generation the Rwandan culture," Atsushi stated.

BB All Stars updates

Mother Theresa vs Britney Spears

第4回本会議写真館＜人物＞

第4回本会議写真館＜風景＞

おわりに

渡航前、日本とルワンダの連絡口となっていたのはモーリス・カリオペというふたりのリーダーのみでした。私は、ルワンダで日本ルワンダ学生会議として自覚しているのはこのふたりだけなのではないか、と考えずにいられませんでした。

しかし実際ルワンダ側メンバーを見てわかったこと、それは彼らが「JRYC ルワンダ」として 30 人ものメンバーを抱え、私たち日本人メンバーと同じように、JRYC の今後のヴィジョンを深く考えながら非常に主体的に活動しているということです。そして 9 月 1 日にその象徴となるミーティングが開催されました。

この日、大学での学生会議とは別に、JRYC ルワンダのメンバーが 2 時間以上かけてキガリの私たちの宿舎まで訪れ、中庭で“Future of JRYC”について議論しました。そこで話されたのが、一言で言えば「相互理解の先」です。つまり、私たちの活動はディスカッションや文化交流で留まっていていいのか、Take Action に進むべきなのではないか、ということでした。この背景には、今回の活動でトゥワの村やキヨンベを訪ね、現状について話を聴くだけで彼らに対して何をできるわけでもない私たちの無力さを感じたという出来事がありました。

しかし、日本側メンバーは 8 月初頭に開催した夏合宿で「相互理解」という従来の理念について改めて議論し、学年・経験を越えた本気の議論の結果、この理念の意義を確認していました。「遠く離れた国に暮らす人間同士が真に互いを理解すること。そして共によりよい社会を目指すこと。これが私たちの常に目指すべき目標である」と。

確かに現状の私たちの活動には限界があります。しかし大きな目標を見失わずにいれば、私たちは「継続」の先できっと目標にたどり着けるのではないでしょうか。

私自身は、後輩たちの作り上げる日本ルワンダ学生会議の今後を、期待しつつ見守りたいと思います。

日本ルワンダ学生会議 第３代 代表
古屋 亮輔

日本ルワンダ学生会議　第 4 回本会議活動報告書

2010 年 10 月 23 日　第 1 版発行
編集　　古屋 亮輔
発行元　日本ルワンダ学生会議